

黎明物語

ふんだりけ

試読版



プロローグ

俺は、なぜ生きているのだろうか？このまま生き続けることに、どんな意味があるのだろうか？

人間、生きているからには「生きていれば、きっと人間に生まれてきてよかったと思える時がくる」と信じている。これは本人が自覚しているか否かに関わらず、そういうことになる。例えば、プラスバンドを続けている人がいたとしよう。なぜ彼は練習が辛くても、先輩が厳しくても、プラスバンドを続けるのだろうか。それは、プラスバンドを続けていれば、いつか「プラスバンドをやってきてよかった」と思えるはずだと信じているからだ。もし、「このままプラスバンドを続けていたら絶対後悔する」と思ったらどうなるか。直ちに辞めるに違いない。マラソンでいうなら、死ぬまで走り続けなければならないコースは、どんなに優れたランナーでも馬鹿らしくて走る気にもなれないようなものだ。生きることも同じ。もし「生きていたら必ず後悔する」と本気で思ったなら、まともな思考の持ち主ならば迷わず死を選択することだろう。

そう、俺は「人間に生まれてきてよかった！」という生命の歓喜、心の奥底からの喜びを求めているのだ。では、何がどうなったらそんな大満足が得られるのだろうか。

遙か昔の賢人は、「人身受け難し、今已に受く」と宣言したという。人間に生まれてくることは大変難しい。しかし、私は今、生まれ難い人間に生まれることができたぞ！という、人間に生まれてきたこと自体を喜ぶ大慶喜。なるほど、こういうものでなければ生命の大歓喜とは言えないだろう。

俺は今までの人生、嬉しかった瞬間は数え切れないほどあったが、人間に生まれてきてよかったと喜んだことはついぞない。そりゃそうだ。何でもいい、運動でも学問でも、たとえば世界の頂点に上り詰めたとしよう。それでも「今まで努力してきてよかった」とは思えるだろうが、「人間に生れてきてよかった」と口に出すのはどうも憚られる。どこか仰々しい感じがするし、実際その為に今まで生きてきたのかと迫られると、何とも空しい気持ちになる。まして、仕事帰りにビールを一杯飲み干し、「くうっ！この瞬間の為に生きているわ」などと言おうものなら、「お前の人生そんなものか」と同情の涙を誘うことはあれ、感動にむせび泣く者など一人としていないだろう。

実際、人間に生まれることはとても難しいことらしい。ある時、人間に生まれてきたことを大変喜んでいて吹聴していた者に、大変とはどれほどかと賢者が問うた。答えに詰まったその人に、賢者は喩えをもって諭す。太平洋のように広い広い海の底に、一匹の目の見えない亀が棲んでいた。海面には一本の丸太が浮かんでいるのだが、そこには丁度亀の頭が収まるほどの小さな穴があいている。さて、百年に一度だけ海面に頭を出すこの亀が、風のまにまに波のまにまに、あてどもなく漂うその丸太の穴にひょいと頭を入れることがあるだろうか？絶対に無いとは言えない。何億年何兆年と気の遠くなるような長い間、それが繰り返され続けられるとするならば、ひょっと頭が入ることがあるかもしれない。しかし、それは無いと言っていいほど難しいことである。ところがだ。我々が人間に生まれてきたということは、この亀が丸太の穴に頭を入れることよりも有り難いことなのだ。「有ることが難い」これが転じて今日、感謝の意を表す言葉になったという。

果たして、そのように人間に生まれてきたことを喜んでいる人は幾人いるだろう。世の中には自殺をする人がいる。自殺する人は、「こんなに辛い人生なら死んだ方がましだ」と、人間に生まれてきたことを恨み、呪っている人たちだ。少なくとも、幸せな人は自殺なんてしない。その自殺者が、この国だけで年間約三万五千人。交通事故の死者が約五千人だから、実にその七倍もの人々が自ら命を絶っていることになる。これに自殺未遂を含めると、どういうことになるだろう。

ところが、これは決して他人事ではない。俺達はどうだろうか。衆目の前で恥をかかされた時、諸々の困難苦難に追い詰められた時、挫折を味わった時。そうでなくとも、誰しもふと「こんなことなら死んだ方がましだ」と思ったことは一度や二度ではないだろう。

このように考えてみると、たとえ世界に六十五億の人がいても、六十五億人は全てが全て、本当の、心からの、人間に生まれてきた喜びを知らないと言えるのではないだろうか。

なぜだろう。なぜ、心から人間に生まれてきたことを喜べないのか？

それは金や物の有る無しとは関係なさそう。金や物、名誉や愛は、無ければ辛い、有れば有ったで不安が絶えない。渴望しながら、有れば苦しむ自己矛盾。それは他でもない。己自身に問題があるからだ。どんな山海の珍味も病人には味わえないのと同じく、幸せの材料が揃っているのに人生を心から楽しむことができないのは、生を味わう本人に問題があるからだ。要は、苦悩の原因は自分の外にあるのではない。元凶は自己の内にあるのだ。

では、自己の内にある苦悩の元凶とは一体何だ。自己を見つめて気付いたのは、欲や怒り、恨み妬みなどの煩悩だった。煩悩とは、「わずらわせ、なやませるもの」。人間には百八の煩悩があると言われるが、食欲、金、名声、異性、その他諸々の肉体的快樂など、目先のことに流されて、これまでにどれだけ大切なことを見失ってきたことだろう。親を殺す子、子を殺す親、世辞と裏切りの離合集散、揚げ足取り合う覇権争い、嫁姑の確執、骨肉相食む遺産相続。欲と怒りに狂って自滅していく姿には、古今東西、大人も子供も少しの違いもない。

だが、ここで一つ立ち止まって考えてみよう。我々人間が朝から晩まで追いかけて回しているものに、果たして^{ア・プリオリ} 自明な価値があるのだろうか。答えは否。究極的には、我々の身の回りのあらゆる価値という価値は、例外なく人間社会によって`作られた、価値に過ぎない。その証拠に、我々人間が知るあらゆる幸福なるものは、何かと比較しなければ気付かれず、しかも比較する対象によってコロコロ値打ちが変わってしまうのではないか。

一切は虚構である。世界が彩りを失い、同時に、容赦なき不安に襲われる。そして、俺は希求せずにはいられなかった。

ただ、真実が知りたい――

とどのつまり人間の快樂というものは、ご都合主義の人間社会や、生存競争の産物たるこの肉体、或いは脳によって押し着せられた、仮想現実である。そんなもののために本気で泣き、真剣に笑っているというのか、俺達は！？快樂に酔うだけの人間は、渴望という術者の操り人形と変わりなく、礼節規範に拘泥する者は、まやかに翻弄される哀しき道化と変わらない。最早、人間の都合で決められた不真実な価値に振り回されて精神を疲れ果てさせるなど、無意味な上に輪をかけて無意味なことだ。作られた世界に踊るだけ踊らされ、拳句の果てに全てに裏切られて死ぬだけだなんて、そんなのこちらから願い下げだ。

俺は、真に意味のある人生を送りたい。そのためにはどうしても、何ものにも動じることのない、不変の真実とは何かを知る必要があった。

しかし、この世に真実なんてあるのだろうか。もしあったとしても、無数の煩悩に狂った曇り眼で徹見するのは不可能だ。ならば、どうする。辿り着いた答えは実に簡潔だった。

`執着を捨ててしまえばよい、

この世のあらゆる嘆き、悲しみは、何らかの既存の価値への執着から生じているとは言えないだろうか。自分の財産だと思ふから失って泣く、自分の名誉とこだわるから貶されて腹が立つ。欲も怒りも執着から生まれ出る。ならば、一切の執着を断ち切ってしまおう。さすれば心眼は開け、真実がその姿を現すに違いない。

そう、思っていた。

第一章 燈

「こおら黎明君、起きなさいよ。次、微積の講義でしょ？」

……おっと。麗らかな陽気の中で、ついうとうと惰眠を貪ってしまっていた。まどろみから揺り起こされた俺は、漸く光に慣れた瞳をゆっくりと声の主へと向けた。

「やっとお目覚めか。おはよ、寝ぼ助さん」

やれやれといった表情で、スーツにビシッと身を固めたショートカットの令嬢が微笑んだ。

「ほら、外を見てご覧なさいよ」

言われるままに窓の外へ目を移す。そよ風に誘われ花びらの舞い散る桜並木が、霞がかかる青空の下、柔らかな陽光の中で枝々を揺らしていた。いつもと変わらぬ、退屈な風景だった。

「ね、空はこんなにも晴れ渡っている。ぽかぽか気持ちのいい天気じゃない。それなのに、なあに？新学期早々机に突っ伏しているなんて絵にならないわね」

快活な声を耳に、まずは欠伸をひとつ。それからゆっくり上体を伸ばしつつ、俺は思考を整理していた。これは恐らく、講義に遅れそうになっている俺を見兼ねて声を掛けてくれたという状況だ。ということは、まずは目の前の人物に対し感謝の意を表すべきだろう。しかし、その前に。俺は半跏の姿勢をとると、眼鏡のブリッジに中指をあてつつ切り出した。

「今の言葉には一つ大きな誤りがある。君は空が晴れているから気持ちがいいと言ったが、それは自明のことなのか？その価値判断はあくまでも君のものだ。それを私に押しつけようとするのは、いささか性急過ぎやしないか。雨の日にだって楽しいことはある。晴れの日だって憂鬱なこともある。天候と人間の心情は、本来全く関係無いのだよ」

言い終えたところで俺は後悔した。普段物を言う時は、少なからず相手の立場に立つよう心掛けているつもりなのだが、今は寝起きだったこともあり、つい無垢なる乙女に無粋な問答をふっかけてしまった。ことわっておくが、眠りを妨げられた腹いせでは決して無い。そう、断じて無い。しかし、そう釈明したところで、女は苦笑を浮かべながら立ち去っていくに違いなかった。ところが。

「天気と心は関係ないか、ふむ」

予想は大きく外れた。ショートカットはその場を離れず、腕を組み、むむうと眉間に皺寄せて唸っていたかと思うと突然、ビシッと俺の鼻先を指差し、こう言い放った。

「天気と心は関係がないと仰いますが、それはつまり、外界の事象と心の事象の間に因果関係は必要無いってことよね。でも、人には誰しも不測の事態が起こるものでしょ？もし心が外界と全く無関係に独自の世界を造れるのなら、そんなことはあり得ないんじゃないかしら」

こ、これは！？今の指摘は観念論の矛盾点、しかも極めて的確だった。さっきの話の流れの中で、俺の言葉の意味する所を理解した上で問題を整理し、かつその弱点をピンポイントにえぐり出す嗅覚がない限り、あり得ないはずの回答だった。

「む、なかなかやるな」

「えへっ、今ので正解？」

ぱっと花の咲いたような笑顔。つい見惚れてしまいそうになった。

「ねえねえ、もしかして黎明君って観念論者？」

「失敬な。あんな浅薄な者たちと一緒にしないでほしい」

「ふうん。じゃあ、实在論者？」

「あんな幼稚な思想と同一視されるとは心外だ。いやそれより、さっき君は、自分の価値判断を他人に押し付けるべきではないという私の主張をスルーしただろう。そういう狡賢さはディベートでは有効でも、日常会話では流れが狂って訳が分からなくなるぞ」

「え、あれ会話だったの？てっきり、安眠を妨げられた腹いせの難問攻めかと思っていたよ」

お見通しでいらっしまった。決まりの悪い俺と、にこにこ顔の女。好対照の二人だった。

ところが、女はあぁと叫んだかと思うと、いきなり人の腕を掴んで思い切り引っ張った。

「もうっ、早くしないと遅刻するよ！」

講義室までのルートを息せき切らせて走る。開始まであと二十秒に迫っていた。こんな時は、広大な敷地を抱えるこの大学が恨めしく思ったりもする。

「ねえ、黎明君」

「何だ、今急いでいるから、用件は手短かに」

「急いでいるのは、私も同じだよ」

並走する女がクスクス笑いながら、忙しい呼吸の合間から言葉を繋いできた。

「ありがと」

「……は？一体、何のことだ」

「うーん、一体、何だろうね？」

傍から聞けば相当阿呆な部類に入るであろう奇妙なやりとりは続く。

「多分、嬉しかったんだよ。黎明君と、お話できたことが」

「……………」

「セーフ！間に合ったあ」

空いていた後方の席に隣り合って座ると、俺たちは大きく息をついた。呼吸を整えながら、やっぱりこいつは狡い奴だと確信した。ただでさえ美人の部類に入る女に破顔された上、返答の暇もなく贈られた台詞が「嬉しかった」だぞ。こんな仕打ち、会話も議論もあったものじゃない。何と言うか、何とも言いようがなくなってしまうのではないか。さりげなく隣の様子を盗み見たつもりが、気付かれてまた微笑み返されてしまった。俺は慌てて眼を逸らした。

それから待つこと五分。未だ姿を見せぬ教授に痺れを切らし、講義室のあちこちで雑談に花が咲いていた。耳障りな喧騒を漫然と聞き流していた俺はふと、あることが気になった。

「なあ、ひとつ聞いていいか？」

「え、何々？」

「君、……誰だっけ？」

思い切り机に額をぶつけた鈍い音。ぶちまけられたボールペンやらシャープペンやらのカラカラと乾いた音が、講義室内に響きわたった。

「信じらんない！燈よ、観月燈！クラスメートの名前くらいちゃんと覚えときなさいよね！」

講義の間中、ぶすっと頬杖つき、じっと黒板を睨みつけたままペンだけはまめに動かすという、ある意味器用な技を披露してくれた彼女に、終了直後、呼び止められてこのざまである。しかし、クラスメートと言ったって百人近くいるのだ。入学して早々、覚えられるわけがなかろう。それとも何か？こいつ、じゃなくて、ええっと、観月さんか。観月さんは、もう既に百人の顔と名前が脳内で照合済みだとも仰るのか。いや、この人ならあり得るかも。先ほど見せつけられた常軌を逸した鋭さからして、冗談とも思えないのがまた恐ろしかった。

この三月に、晴れてこの国の最高学府、皇京大学の学生を名乗る資格を得た俺は、実は現在、絶望の真っ只中にあった。振り返ってみれば、それはもう合格の瞬間から始まっていたのかもしれない。合格通知を受け取った時は、今考えれば恥ずかしくなるほどの雄叫びをあげて宙に舞い上がった。ところがだ。次の瞬間には、冷めた自分が自分に対して問うていた。

「なるほど分かった。で、それがどうした？」

受験勉強は楽しくもあるが、やはり苛酷だ。周囲の期待と自己の理想、内外の容赦なき重圧に耐えつつ、一日一日、精一杯の努力を重ねて時を過ごす。一人、また一人と立ち塞がる壁を前に脱落する中、全てを乗り越え、限られた数名にのみ到達を許された頂上に登り詰めたはよいものの、そこに残ったものは何だったのだろう。最終的に登り切った勇士たちの顔ぶれを見れば、努力によって何かを掴んだという印象は少ない。むしろ、受験とは元々その人に備わっていたポテンシャルの高さを証明する過程に過ぎなかったように思える。受かるべくして受かった者たち。ご多間に漏れず、俺もまたその一人だった。頑張っ、頑張っ、やっと辿り着いた成果でも、他人から見れば当たり前すぎるほど当たり前。報告に訪れた母校での「あ、そう」の無感動な教師の反応には、いやでも現実を突きつけられた思いがした。

でも、何といってもこの国の最高学府。皇大ではそれなりのワクワクに出会えるやもと期待した俺を、誰が責められよう。この淡い望みの崩壊に、さほど時間はかからなかった。

単なるマニアでしかない教官陣は論外だった。問題は学生だが、大別して三つのタイプに分けられそうだった。第

一は、皇大に来れる成績だったから来た一群だ。彼等は何の目的意識もなく、勧められたことを勧められるままにこなすだけだった。基本的に姿勢は受け身で目も死んでいる。当初、こんな人生を捨てたような連中が皇大にいるのかと驚いたが、よくよく周りを見渡せば、これが大多数派であつたらしい。第二は、所謂天才と呼ばれる一群。なるほど彼等はものの理解が早かった。しかし、苦痛らしい苦痛を伴うこと無くポンポン知識が頭に入るのが災いしたのだろうか、残念なことに努力を知らず、精神年齢はまるで子供。人間のレベルが低くでは話にならなかった。第三は、自主的に努力を積んできた一群だ。これが意外にも少数に限られる。滲み出る彼等のセンスにはキラリと光るところがあり、加えて大人びた雰囲気纏っていた。俺がよくつるむのはこういう連中だったが、物足りなさを感じたのも確かだった。先の二群ほど不満はないものの、敢えて苦言を呈すれば、真面目過ぎるのか視野が狭かった。彼等は社会的に崇高な理想を持ち、活力に溢れ、人間的魅力もあったが、問題は、結局のところ「面白いからやる」以上の発想がないことだった。それだけで満足できるものなのか。それが歯痒くてどうしようもない。もっと大事なことがあるだろうと、何度注意を喚起しようとしたか分からない。でも、できなかった。説明があまりにも抽象的すぎて言っても分からなかったということもあるが、最大の原因は、とりまなおさず、俺自身がその「大事なこと」とやらを明確に把握していなかったためだ。

皇大と言ってもピンからキリまでである。詰まる所は、普通の大学だった。しかも余計に憂鬱なことには、これがこの国で最もましな大学なのだ。俺もこのまま、凡庸な学生の中に埋没してしまうのだろうか。

そんな悲哀と焦燥感を抱き始めていた矢先、彼女は現れた。観月燈。彼女は俺が探し求めていた第四のタイプなのだろうか。正直、この人は頭がいい。知性を感じさせる真っ直ぐな瞳に、一本芯の通った人間像、何よりこの人には「他者を聞く」力があつた。もしかしたら、ここもまんざら捨てたものじゃないのかもしれない。俺はある種の高揚感を禁じ得なかった。しかし同時に、浮かれようとする己の心を慌てて戒めた。「もしかしたら」。この幻想に、これまで何度欺かれてきたか知れないのだから。

「こらっ！ちゃんと私の話を聞いているの!？」

耳朶をぐいぐい引っ張られていた。なるほど、話の最中に上の空になるとは失礼極まりない態度だ。その怒りも尤も。しかし、いくら何でもこの仕打ちは酷い。それにかかなり痛い。

「分かった、分かった。名前を覚えていなかったのは悪かった。謝る。とりあえず耳引っ張るのをやめてくれると嬉しいのだが、って、こらっ、痛いからやめてくれないか、観月さん」

「あ・か・り」

「はい？」

それは、荒ぶる右手の動きとは似ても似つかぬ穏やかな口調だった。

「だから、私のことは燈って、下の名前で呼んでくれない？みんなもそう呼んでいるし。名字で呼ばれるのって、何だか他人行儀な感じがして嫌なのよ」

にっこりと微笑んだ。だから、それは反則だって。

「OK、燈がそう望むのなら、そう呼ばせてもらうよ」

「うん、完璧。さすが黎明君、適応力が高いわね」

満足そうでは有り。それにしても、いつまで人の耳をつまんでいるつもりですか、貴女は。

「それじゃあ燈、私のことげきも隙と呼んでくれ」

「……」

不意に訪れた沈黙、一時停止する燈。図らずして、しばし二人は見つめ合った。

「どうした？燈」

「い、いやですわ、黎明さんったら。話をして間もない殿方を呼び捨てにするだなんて、そんな不躰なこと、できるわけがないではありませんか」

「都合の悪い時だけお嬢様になるな。お前を名前で呼ぶんだ、私も名前で呼んでくれよ」

「え、で、でも、それはさすがに何というか、あ、あうう」

燈は両手で顔を覆い、全身をくねくねさせ始めた。なぜか耳まで真っ赤にしている。たかが呼び方一つに、本気で恥ずかしがっているらしい。どうということだ？

「まさかとは思うが、もしかして、燈は他人が自分に対して壁を作るのは嫌うくせに、自分が他人に対して作っている壁は今一つ取り払えないタイプなのか？」

くねくねがびたりと止まり、衝撃に見舞われた表情のまま、燈は凍りついていた。何と我が儘な奴だ。概して圧され気味だっただけに、よもや完璧超人かとも疑った燈嬢だったが、意外な弱点があったものだ。しかし、それもなぜか許せた。漸く解放された愛しの耳朶をさすりさすり、つい頬が緩んでしまう。一目置いていた怪物に、急に親しみの情が湧いてきた。

「ああっ、笑ってる！！こらっ、変なこと考えるな！」

おっと、二度も同じ手を食らいますか。再び耳へと迫る魔の手をワンステップで華麗にかわすと、涙目で追いかけてくる燈を尻目に、さっさと退散する俺であった。

第二章 誉

皇大の目と鼻の先に駅がある。大抵の学生は通学にここを利用する。いつもなら俺もこの皇大前駅から帰路に就くのだが、今日はお目当ての新刊コミックを購入すべく、皇大前商店街から道なりに、帝都でも有数の繁華街へと足を進めていた。帝国にその名を知らぬ者のない若者の街だけあって、種々雑多のビルディングが所狭しと立ち並ぶその空間は、相も変わらず活気づいていた。個々の区画を占める、時代を先取りする華やかな店舗群。鮮やかに彩られた景観を誇る半面、栄枯盛衰も激しく、この数ヵ月のうちにも流行に追い付けなくなった数多の企業が競争に敗れ、姿を消している。交錯するのは多種多様の欲望。老若男女を問わず、この街を支配する独特の雰囲気酔いに酔いしれていた。日が落ちるとドラッグの屋台まで出没する危なっかしさも魅力のうちだろう。ここを通ったが最後、懐の温かい人間ならば、たちどころに煩惱を掻き奪られ、ややもすれば狂わされてしまう空間であった。ところが、俺はそういった心配とは殆ど無縁だった。どんなに誘惑に満ち溢れていても、手持ちが無ければ認識できるのはせいぜい牛丼屋くらい。人間の欲は持てば持つほど膨張するものらしい。欧州全土を恐怖に陥れた大統領の言とはいえ、つくづく的を得ているなど感心する。

目的の品も無事購入し終えた俺は、もはや我が庭と心得ている街をほくほく顔で闊歩し、この世の平和を満喫していた。世はなべて事も無し。大映像から流れてくる最近売り出し中の女性ユニットの新曲が、一度聴いたら鼓膜に染みついて離れなくなってしまう雑貨チェーン店のテーマソングやらとない交ぜになって混沌たる不協和音を奏でていた。群れなす人々は思い思いの方向に慌ただしく足を進めている。一方で緩慢と流れる車道の列。黙したままに客を呼び続ける時代錯誤のサンドイッチマン、空からは女の子が降り、渋谷駅前の大型スクリーンには封切されたばかりの映画のPVが流れていた。それはいつも見慣れた光景。……ん？ひとつ、非日常的なものが紛れ込んでいなかったか？

女の子が降ってきた。目の前に落下、その拍子にももの凄い音がした。それきり、女の子は仰向けになったままピクリとも動かない。長い黒髪、色白の肌、和服を模したデザインの服。歳は俺と同じくらいだろうか。……ちょっと待て。今、何が起きた？状況が整理できない。直立の姿勢のまま微動だにできず、俺の視界もその子を中心に動かなくなってしまっていた。

「キャー！！」

叫び声にはっと我に帰った。ぐるりと周りを見渡す。腰を抜かしている青年、ぼかんと口をあけたサラリーマン、泣き叫ぶおばさん連中。突然の惨事に、その場にいた誰もがパニックに陥っていた。さっきの叫びは、あそこで喚き散らしている女子高生のものであったか。いや、今はそれどころじゃない。俺はぐったりしている黒髪の女性の側へ駆け寄った。脈はある。だが、過度に交感神経が興奮したのか、鼓膜を打ちつける俺自身の脈拍の音で、口に耳を近付けても呼吸がまるで分からない。動転する意識を叱りつけ、脳裏をよぎる最悪の事態を必死に振り払う。俺は眼鏡を外すと、レンズを女性の口許へ近付けた。……曇った。ちゃんと呼吸をしている。安堵とともに緊張が解け、俺は漸く肺に貯まっていた呼気を吐き出した。だが、まだ油断はできない。あの衝撃だ、全身を強く打ちつけたに違いない。打ち所が悪くなければいいが。しまった！まだ救急車も呼んでいない。早く一一九番に……

「！」

第六感とはこのことだろうか。急に、そこから動けなくなった。全身を駆け巡っているこの衝動は、恐怖。そうだ、これは動けないのではない。俺の身体を構成する六〇兆の細胞の一つ一つが、死の恐怖に慄き震えている。文字通り、俺は凍りついた。いや、俺だけじゃない。その瞬間、恐らくは街全体が凍りついていてたことだろう。

——マズイ、コロサレル

俺の本能が極限レベルの非常警報を発した。乾いた喉にゴクリと唾を押し込んだ音が、やけに頭蓋に響く。振り返ることすらできない。ただ、背後から何かとんでもないものが近付いて来ていて、なぜか俺たちを狙っている。それだけが嫌というほど感じられた。

——ニゲロ！

シナプスというシナプスが一気に爆発した。瞬間的に膨れ上がる筋肉。俺は女を抱え上げるや脱兎の如く駆け出した。直近の路地に入る。こういう裏通りはさすがに不案内だが、今はそんなことに構ってられない。ただ、遠くへ。少しでも「あれ」との距離を稼がなくては。十メートルもしないうちに左へ、また十メートルも進まないうちに今度は右へ。道の分岐さえあれば可能な限り小刻みに進路を変更し、左、右、左、右とジグザグに走り続けた。追いかける方からすれば、路を曲がった途端に相手の姿が消えていることになる。一度見失ってしまえば、それからは予測される逃

走経路のパターンは刻一刻と累乗されていくことになるから、急激に追跡の意欲は減退するはず。しかも、俺が通るのは路地だけとは限らない。単純な戦略だが、今は先方の混乱を誘うこの方法が最も確実だ。但し、これも袋小路に嵌ればお終いだ。行き止まりになるなよ。そう念じつつ、俺はひたすら走って逃げた。

もう、走れねえ。何だってこの辺りはこう坂道ばかりなんだ。そう思った時、気付けば俺たちは薄暗い廃墟ビル群の裏らしき所にいた。辺りには人影が見当たらない。丁度そんな時間帯なのだろう。あの場所からはどれくらい離れられただろうか。「あれ」はうまく撒けただろうか。既に筋肉に蓄えられたグリコーゲンも枯渇し、度重なる急激な方向転換で足首の靭帯は悲鳴をあげていた。思い出したようにずしりと肩に重みを感じる。あ、鞆背負ったままだ。ああいう状況なら少しでも身軽になるために投げ捨てていくものだろうが、そんな余裕も無かったのだな。もつれそうになる足をどうにか運びながら、ふらふら歩く。呼吸が落ち着くにつれて、少しずつ頭も働くようになってきた。

ふと、目の焦点が腕の中の女に合った。そういえば、何で連れてきたんだっけ？ああそうだ。あの時、この人にも殺気が向けられていたのだった。それで無我夢中で……。いやはや、こんなことさえすぐに思い出せないとは余程混乱しているな。だがなぜ、誰に襲われていたのだ。そういえば空高く舞い上がっていたが、どれだけの力で飛ばされたというのだ。とりとめもなく疑問が湧いては消え、湧いては消え、そしていつしか無限ループに陥る。もう自分でも何を考えているのか、よく分からなくなってきた。エンドルフィン漬けのランナーズ・ハイ。こんな状態で整然と思考を働かせようとする事自体が無理なのかもしれない。

「もう追い駆けっこはお終いなのお兄ちゃん」

背後から掛けられた声。脳幹が賦活し、ぱっちり覚醒できてしまった。瞬時に四肢が強張る。振り返ると、そこには真紅の制服に身を包んだ、高校生にしては小柄な女の子が立っていた。姿形は可愛らしいが、全身から放たれている異様なまでの殺意。間違いなく、「あれ」だった。首筋を冷や汗が伝う。だが、少女は俺の様子など意にも介さず、不敵に笑っていた。



「もう、お兄ちゃん、くねくね曲がりながら走るんだもん。追いかけるの大変だったんだよ？」

今、何て言った？後から追いかけただと！？俺は足の速さには結構自信のある方だ。しかも、可能な限り十メートルも間を置かず方向転換を繰り返し、時には人混みの中を縫って走った。つまり、少なくとも五メートル以上差があれば追走は出来なくなるはず。ということは、こいつは「五メートル以内をびったりと俺の後ろについていた」ことになる。

サッと頬から血の気が引いた。馬鹿な！そんな近距離で追いかけてくる気配なんて感じなかったぞ。しかし、ここにこいつがいることが、その言葉が紛れもない事実である何よりの証だった。俺はこの子の気紛れ一つで、いつ命を落としてもおかしくなかったのだ。そんな状況で数十分間、必死に抵抗したつもりになっていただけなんて。

「キャハハハ！お兄ちゃん、お顔が真っ青。そっか、死ぬのが怖くて喋れないんだね。ま、お兄ちゃんとの駆けっこ、意外と楽しかったし、そいつを渡してくれたら見逃してあげるよ」

そう言って紅い女の子は、俺の腕の中で眠る女を指差した。

切り替える！俺は半ば停止した思考に喝を入れた。ここで何もしなければ、一人の命が潰えてしまうのだ。それだけは絶対に許せない。考えろ！今何をすべきかを、この状況を打開するきっかけを！生憎、此処に居合わせているのは渦中の俺たちだけ、助けを呼ぶこともできない。周囲に目ぼしいものは無く、対抗する手段も見つからない。ならば、どうする！？

「なあ、ひとつ教えてくれ。お前はなぜこの子を殺そうとする」

俺は引っ掛けていた疑問をそのまま相手にぶつけた。今、目の前の女の子の頭は、この人を殺すことで一杯になっている。危険だが、ひとまずその注意を俺に向けさせようとした。

「キャハハハハハハハハハ！」

唐突だった。けたたましく腹を抱えて笑い転げる女の子。俺は意表を突かれた。

「ハハハハハハ、ああ、おつかしい。そっか、そういうことか。だよ、普通そう思うよね。あのね、違うんだよ、お兄ちゃん。そいつが先に^{ほまれ}誉を殺そうとしたんだよ」

「何だって！？」

予想もしなかった返答。一瞬、意味を取り損ねた。しかし、何度反芻してみても答えは同じ。確かに奴はこう言った。この女が、先に女の子を、コロソウトシタ……！？

そういえば、なぜ今の今まで気付かなかったのだろう。戦国ものの時代劇でよく見る籠手に金属らしきものを所々に仕込んだものを、女は両腕にはめていた。

「ね、分かったでしょ？そいつは誉を殺そうとした。だから誉はそいつを殺すの。誉、聞いたことあるよ。これって正当防衛ってやつでしょ。だから、殺してもいいんだよ？」

これは参った。まさか被害者と加害者がまるで逆だったとは。しかし、人の命が脅かされている状況に変わりはなく、この程度で冷静さを失っている場合ではなかった。勿論、混乱していないと言えば嘘になる。だが、俺は女の子の言葉に新展開へのきっかけを見出した。

「なあ、誉」

「え？」

おや？制服の女の子は大きな瞳をくりくりさせている。これは意外な反応だった。

「お前の名前だよ。誉って言うんだろ？」

もう一度確かめるように言ってみる。すると、今度は弾けるようにぱっと表情を綻ばせた。

「うん、そうだよ。誉、あたしの名前！お父さんとお母さんがつけてくれたんだ。誇り高く恥を知る、立派な人になるようにって」

「そ、そうなのか。いい名前だな」

「うん！」

余程、両親のことが好きなのだ。さっきまでの緊迫した雰囲気はどこへやら、お喋りする姿は嬉々としていて、まるで子供のようにだった。名前の意味が本当に分かっているのかどうかは少々不安ではあるが、俺は努めて優しく、語り掛けるように本題に入っていた。

「なあ、誉。今お前が言った正当防衛は、相手を殺さなければ自分の身を守れない時にしか成立しないんだ。でも、この人はもう気を失っているから、誉には襲いかからない。分かるか？つまり、ここでこの人を殺しても正当防衛にはならないんだ」

「ええっ、そうなの!？」

「そうなの」

誉の目をじっと見つめ、大きく首を縦に振ってみせた。誉はというと、自分が掘った落とし穴に自分で嵌ってしまった小学生みたく、悔しそうに唇を噛んでいた。どうもこの子は憎めそうにない。コミカルな仕草に思わず目を細めた。

しかし、それは束の間のことだった。感情豊かな童顔にさっと影が差す。今度は誉の方がじっと俺を見据え、低い声でこう言った。

「でもさ、お兄ちゃんも蚊に刺されたら殺しちゃうでしょ？」

先刻までのキラキラと輝いていた黒く大きな瞳が一転、冷たくなっていた。しかも、これはただ冷たいのではない。底の知れない深みを湛えた冷たさ。この子は今から本音をぶつけてくる。そう俺は悟った。いや、悟ったというよりも悟らされたと言う方が適切だった。否が応にも心の襟を正さざるを得ない。紡ぎ出された言葉は口調こそ変わらなかった。しかし、それは穏やかながらも静かに聞く者の心をえぐる、誉という存在からの発露だった。

「蚊に刺されたって死ぬわけじゃないのに、それでも殺しちゃうのはムカつくからってことでしょ？正当防衛じゃないよね。じゃあ、何でそいつはムカついても殺しちゃダメなの？」

誰しも一度は抱く素朴な問いだった。だが素朴だからこそ、本気で答えようとすれば、その難解さを思い知らされる。相手が子供なら誤魔化しも利くだろうが、今は違う。間違えば一笑に付されかねない問いであることは、誉も分かっているのだ。それを敢えて問うたのは、誉が俺を認めたから。真剣を以って斬りかかる相手は真剣で迎え撃たなければならない。ここで逃げれば、俺は一生軽蔑されることだろう。やれやれ、年下だろうが女の子だろうが、本気というのは実に重いものだ。俺は慎んで誉の挑戦を受けた。

さて、まずは問題の分析だ。誉の問いは大きく分けて二つ。一つは「人間が蚊を殺すのはなぜか」、もう一つは「人間を殺したらいけないのはなぜか」。早速前者から考えてみよう。

人間が動物を殺してもいい理由はあるのか。あるとすれば、少なくとも動物が人間よりも何かで劣った存在でなければならない。しかし、何をもってそう言い切れる。知能か、手先の器用さか。大いに議論の余地はある。しかし、もしある特徴に優れた存在はそれに劣った存在を殺してもよいというのなら、それは大変なことだ。生きる権利のある個体は、全生命体のうち高々一個体しかないことになる。しかも、どんな能力も老衰は免れようもないから期間限定のおまけつきだ。その意味では、本当の意味で生きる権利を持つ存在は皆無になってしまう。それでも敢えて弱肉強食は自然の摂理とでも主張するのであれば、並の人間よりも暴力に優れた誉が、今や無抵抗のこの女性を殺す横暴も正当化されるだろう。

一応言っておく。ここで神の下の人の平等と動物の劣等性を説かれても、個人的な信仰に他者を説得する力はないから論外だ。

結局、人間が動物を殺してもいい理由などどこにも無い。では、我々が日々おびたしい生命を奪っている現状はどう説明されるのか。他でもない、人間のエゴだ。全て、人間の都合なのだ。生きるためには仕方がないと、身内にしか通用しない理由をつけては生き物を殺して、その肉を喰らう。それどころか、誉が言ったように単にムカつくから殺すことだってある。カメムシやユスリカを不快動物と呼んで駆除している。釣りや闘牛に至ってはレジャーとして殺しを楽しんでいる。もし動物たちが自由を手に入れ、我々に復讐の刃を向けるようになっても、全く文句を言えないことを日々平然としているのが俺たち人間なのだ。

続いて二つ目の問い。人間を殺してはならない理由は何か。一昔前、この問いが物議を醸したことがあった。確か、国営放送の討論番組で一人の中学生が「なぜ人を殺したらいけないのですか？」とぼそりと呟いたのが始まりだった。その瞬間、それまで口から生まれてきたかのように侃々諤々の議論を捲くし立てていた並居る有識者たちが、一同見事にピタリと押し黙ってしまった。直後、大きな反響が巻き起こり、このことに寄せて有名無名の学者や自称インテリたちがこぞって持論を展開させたが、まともな説はただの一つも出て来なかったという。はじめは「そんな簡単なことに答えられないなんて情けない！」と憤慨していた大多数の国民も、実はそう簡単な問題ではなかったことを痛感させられた事件だった。

なぜ人を殺してはならないのか。俺自身この疑問を抱き、書を読み人に問い掛け、自分なりに回答を探し回ってみた。大多数は質問の意味さえ理解していない愚答ばかりだったが、深刻さを理解した稀有な人々も一握りはいたわけで、彼等の答えは見事に共通していた。

「ねえ、お兄ちゃん。どうしたの？気分悪いの？」

「どわっ！」

思わず声をあげてしまった。はっと我に返った瞬間、ズームアップされた誉の顔が、じっとこちらを覗きこんでいたのだから。

「なによなによ！人の顔見とお化けでも見たように驚くなんて。お兄ちゃんが具合悪そうだったから心配してたっていうのにつ！」

「あ、すまない」

涙目になってぶんすかご立腹の姫君だった。全く、我ながら無神経にもほどがある。心配してくれた女の子をこうも邪険に扱うとは……って、ちょっと待て。

「おいおい、心配するも何も、一体誰のせいであらうかと思っているんだ。そもそも誉が難問をふっかけてきたからだろ、私があれこれと考え込んでいたのは」

「ん？難問？何のことだっけ??？」

何だ、この仕打ちは。新手のプレイか何かなのか。どこまでもとぼけた様子の誉。大いに肩透かしを食らった俺は、精神的にも軽くダメージを受けてしまいそうだった。

「いや、だから人を殺すのはいけないことなのかどうかという質問をだな……」

突如、轟音が鳴り響いた。大地を揺るがす衝撃とともに大量の砂塵が舞い上がり、ビルの谷間だったはずの辺りの光景が一瞬にしてブラックアウトした。思わず身を屈めたもののコンクリートの細片が容赦なく背中に突き刺さり、堪らず地面にひれ伏す格好になってしまう。

「こらぁ！人がお話ししているのに邪魔するな！！」

さっきまで誉がいた場所とは全く別の方向から、でも、間違いなく誉の声が聞こえた。よかった、あいつは巻き込まれなくて済んだのだな。俺の方も気絶したままの女を辛うじて庇いながら、どうにかこうにかやり過ごしている。しかし、何が起こったというのだ。視界ゼロ、時折背中に降りかかる痛みの中で、迫りくる新たな脅威に戦慄を覚えた。

その時だった。ブォンと風を一薙ぎする音がしたかと思うと、ピタリと嵐が吹き止んだ。

「鬼の捕獲のためとはいえ、大変ご迷惑をおかけ致しました。申し訳ありません。それから、ご協力に感謝致します」

凜とした女性の声。青い長袖に丈の長い白のスカート。しゃんと背筋の伸びたその影は、力強く毅然とした風格を漂わせていた。

第三章 慈

「だーかーら、邪魔をするなー！！」

極限に達した殺意を一気に爆発させた誉の咆哮、迫り来る狂気の一閃。しかし女は動じることなく、身の丈ほどにすらりと伸びた一本の棒で、それを叩き落とした。そう、それは叩き落としたという表現が相応しい豪快な力技。しかしながら虚空に描き上げた円弧の軌跡はあくまでも美しく、それはすらりと伸びた長身と相まって壮麗なシルエットを構成していた。

「まだまだあ！」

「ふんっ！」

息つく間もなく繰り出される誉の連撃。しかし、重々しい金属音をこだませながら、またも棒で振り払い、叩き落とす。更に続く誉の攻撃。四合、五合、六合。

立て続けの強襲に疲れを覚えたのか、女の動きが僅かに鈍った。その僅かな狂いが招いた惨劇か、遂に七度目の突進で両者がまともに激突した。女は勢いよく砂煙をまきあげながら、三十メートルほど後方にいた俺の近くまで吹き飛ばされてしまう。その向こうで、砂まみれになりながら反対方向へ転がって行く誉の影もちらりと見えたような気がした。

時間にしておよそ十秒。しかしながら、その十秒間に凝縮された衝撃は余りにも大きかった。俺は人外の強大な力と力のぶつかり合いに、ただ見入ることしかできなかった。

「どうだ、参ったか！誉の、邪魔なんて、するから、こう、なるんだよ！」

遙か向こうで、満を持してあげられた誉の勝鬨。もしこれが無かったら、俺は一体どちらが勝利を収めたのか皆目分からなかったことだろう。満身創痍なのは双方ともに変わらず、痛々しくて見るに堪えなかった。ただ、当の二人にとっては立場の優劣は歴然としたらしい。息を切らしながらも誇らしげに笑う誉と、それを睨みつけている女。そういう構図だった。

だがその後、事態は予想だにできなかった展開を迎える。「ハッ！」と相手を嘲けるように鼻で笑ったのは、敗者であるはずの女の方だった。

「参ったか、だと？笑わせるな。そこで馬鹿笑いしている鬼よ、よく聞け。私はスポーツをしに来たのではない。貴様を狩りに来たのだ。狩る人間が狩られる獣に降参するなど、ちゃんちゃらおかしいことが分からんのか、この鬼畜めが！」

俺は自分の耳を疑った。これは追い詰められたが故の必死の虚勢と見るべきなのか。いや、それにしても酷い。余りに酷い中傷。なぜなら、この女の今の言葉は、誉の人間性を全否定したのだから。つい先程、彼女の威厳に満ちた立ち居振る舞いを目にしていただけに、この口汚い罵り文句が同じ人間から発せられたとはとても信じられなかった。強烈な違和感に苛まれたままの俺を余所に、事態は益々深刻化していた。

「きちく……ほ、誉が、鬼畜？はは……そっか、鬼畜なんだ、ふうん。じゃあ、さ。あんたは何なの。え？誉を鬼畜呼ばわりする、あんたは一体何だって聞いてんだよ！いい？鬼畜ってのは、本物の鬼畜というのは……お前たちのことを言うんだ！！」

はっと目を向けると、そこには怒りに顔を歪ませて猛然と襲い来る誉の姿。ぞっと鳥肌が立った。血走った眼、憤怒の形相はさながら鬼。人間、あんな表情ができるものなのか。

間もなく、ここは血まみれた阿鼻叫喚の地獄と化す。しかし、この状況にありながら、俺は全く別の違和感に捕われていた。何かがおかしい、だが、何かがおかしい？ほどなくしてその正体に気付いた。力の差が歴然としている相手が突進してきているのに、目の前の女にいささかも怯える気配がなかったのだ。それどころか、屈みこむような姿勢のまま、落ち着き払ったかのようにじっと誉を見据えている。彼女の瞳の奥にあるのは、鏡面の如き不気味な静寂。瞬間、閃きが起こった。俺の目が捉えたのは、巧妙に隠された右腕の緊張！

「止まれ、止まるんだ！！誉！」

「え？」

「ちっ！」

刹那、さっと差し出された右腕の突きが誉の胸元を切り裂く。刃渡り十五センチはあるだろうか。女の右手には、今度は短刀が握り締められていた。凍りつく空気。虚空を滑るように差し出された刀は、時の流れをも寸断していた。

もし、誉があのまま突っ込んでいたら。残像として目に焼きついた短刀の軌道は、一つ間違えば現実となっていた、もう一つの結果を雄弁に語っていた。当の誉は、幸いにも切りつけられる否や、すぐさま飛び退いて距離をとっていた。事態を把握して固まったのは、どうやらそれからだったようだ。全く器用なことだ。その反射神経は流石と言うよりない。誉の様子を見るに、どうやら身体に傷らしい傷はなかったようだ。切り裂かれたかと思ったのは服だけで、ほぼ水平方向にぱっくりと開いた胸元からは、小振りではあるが形の良い双丘が

「イ、イヤ——————ッ！」

耳をつんざく悲鳴に思わず両手で耳を塞いだ。同時に閉じてしまった両目を開くと、目に一杯涙を溜め、必死に両腕で胸元を隠している誉の姿が

「だ、だから見ないでって言ってるでしょ！お兄ちゃんのバカーっ！！」

「あ、す、すまない！！」

言われて慌てて眼を逸した。思わず見入ってしまったのは正直まずかったようだ。しかし誉よ、決して悪気はなかったんだ。これは所謂不可抗力というやつなのだよ。

「よ、よよよよくも、お、おお、お兄ちゃんの目の前で！」

矢継ぎ早の恨み節。涙目の誉がきつと睨みつけているのは、凶刃を振り抜いた姿勢のまま静止している青の女。喉の奥から絞り出すように吐き出された呪詛には、禍々しい怒気と怨念とが籠っていた。もし今の誉に近づける者がいたら、そいつは全世界の悪意を一身に纏って呪い殺されていたに違いない。それなのに、その怒りの矛先を向けられた当の人物は、相変わらず誉を冷たく見据えるだけだった。

「こっこっこ、今度会った時は、泣いたって、喚いたって、絶っっっ対に許してやらないんだからね！覚えてろー！！」

そう言って誉は、泣き喚きながら地平線の彼方へ姿をくらました。可哀想に。戦いを制したはずが、まるで正義の味方にコテンパンにやられた悪役が残していくような台詞だった。

本当に訳が分からない子だった。マイペースで直情的。会う人会う人、なりふり構わず振り回す我が儘娘かと思いきや、思慮深く妙に繊細な所もある。そうかと思うと、いざ戦いとなればいささかの迷いもなく、果敢に立ちまわるあの豪胆さときたらどうだ。ただ無邪気の一言では片づけられない捉えどころのなさがますます気に掛かる。今までに何があったのだろうか。何が彼女を突き動かしているのだろうか。あの子はどこへ行こうとしているのか。俺はもっと、誉のことを知る必要があるのではないだろうか。なぜか、そんな気がしていた。

「おい、貴様！一体どういふつもりだ！？」

ぐいと肩を掴まれて、強引に身体ごとぐるりと反転させられた。あの金棒女だった。一体どういふつもりだ、だって？それはこっちの台詞だ。一昔前の俺なら殆ど反射的にそう食ってかかっていただろう。俺は一呼吸置いて昂ぶる感情を鎮め、努めて冷静に振る舞った。

「待て、待て。とりあえずその手をどけてくれないか。それからゆっくり話を聞こう。感情のままに暴力に訴えても、お互い、いいことはないだろう」

易々とあの棒を振り回し、誉とわたり合った怪力の持ち主だ。ここで顔面に一発拳が入ろうものなら、鼻血くらいでは済まされないだろう。相手を刺激しないよう慎重に言葉を選んだつもりだった。が、つい口調に不機嫌さが滲み出ている。俺もまだまだ未熟だった。

「貴様、それは自分のやったことを自覚した上での言い草なのか」

赤子も泣きやむドスの利いた脅し文句に、予断を許さぬ事態であることを否応なく知らされた。いや、既に脅しではないのかもしれない。俺の胸倉を掴んだわななく握り拳から、女が心底怒りにうち震えていることが分かる。まずい、これは非常にまずい。どうする俺！？

目の前のこいつが何に憤慨しているのかはすぐに察しが付く。誉を殺すはずだったあの作戦を阻止されたためであるのは、ほぼ間違いない。しかし、今そこに触れるわけにはいかない。この血走った目を見てみる。言及したが最後、「ほう、自覚はあったのか」とか何とか言われて、即効THE ENDになってしまうことは目に見えている。話を聞かぬ相手に正論は通じない。下手をすれば命を落としかねないなら尚更だ。となると、これしかないか。

「待て、一体何をそんなに怒っているんだ！？俺はただ女の子と立ち話をしていただけじゃないか。そこに突然殴り込んで来られた上に、謂われもなく脅迫されているんじゃ洒落にもならん。何も分からないまま振り回されている、こっちの身にもなってくれ！」

俺はひたすら、自分は何も知らないことをアピールした。とてつもなく不格好だったが、そんなことを気にしている場合ではないのだ。

「な、何も分からないだと？貴様、どこまで私をおちよくるつもりだ！現に、ついさっき、私の任務を妨害したばかりじゃないか！」

「任務の妨害？お前、一体何を言っているんだ」

「何を言っているって……ええい！分からん奴だな。説明してやる。心して聞け、いいな！」

よし、食いついた！断罪者は断罪する者である限り、相手が自らの罪に無自覚なままではやりきれないものだ。ここであくまでも無知を装えば、この女は俺を糾弾する理由を系統立てて説明せざるを得ない。そう踏んだ俺の狙い通りになった。説明するともなれば、沸騰した脳内を整理するうちに一時の感情も収まりをみせる。お互い冷静になれば、打開策を練る猶予も得られるはずだ。ふふふ、訳の分からない騒動に巻き込まれた上に、あんな屈辱的な物言いまでさせられたのだ。それに見合った情報という見返りはきちんと頂かなくては。

「回りくどいのは性分ではない。結論から言う。貴様といたあの女は人間ではない。鬼だ」

鬼。恐らくこれがキーワードだ。こいつが誉を罵っていた時にも、話の中に不自然なほど自然に出ていた。鬼とは、お伽話なんかによく出てくる、あの鬼のことなのだろうか。

「おい、鬼というのは一体……」

「だからそれを説明してやる！」

もの凄い剣幕で怒鳴られた。俺は口をつぐみ、固唾を飲んで次の言葉を待った。

「いいか、鬼というのはな、鬼なんだよ」

あっさりしていた。やけにあっさりしていたために、それが回答だとは思ってもよらなかったほどだった。女の言葉は端的な中に底知れない深淵さを湛えているように見えて、その実、何も言っていなかった。言った当の本人が、決まり悪そうに俺から目を逸らしている。

「おい、今のお前の答えなんだが、論理的には同語反復と言ってだな」

「五月蠅い！分かっているよ！！」

分かっていたらしい。

「だから、鬼っていうのは鬼なんだよ。とどのつまり、人間でないということ！」

小学生みたいな物言いだったが、それでもさっきよりはましだった。成程、鬼とは人間ではないという意味なのか。

これも事の全容を知る一つの手がかりなので、一步前進と言えらる。だが、前進ついでに俺の中では沸々とどうしようもなく怒りが込み上げてきた。

誉は人間だ。

直接言葉を交わしたからよく分かる。もし、あの誉が人間でないというなら逆に問いたい。一体誰が人間だというのだ。しかしこいつは、誉は人間ではないと言い切った。それも、何の躊躇いもなく。こいつの話しぶりからすると、恐らく件の鬼の概念をもつ者はこの女だけではあるまい。その概念を共有し、しかも、誉に対してもっと明瞭な敵意を懐く者たちがこの女の周囲に存在しているのは間違いない。即ちそれは、人間を人間でないと言い切ってしまうコミュニティが存在している、ということだ。

「人間でない、と言ったな。一つ聞きたいのだが、人間っていうのは何だ」

思わず語気が荒くなってしまった。一瞬、気圧された形になった女。

「何だよ、いきなりおかしなことを聞いてくるな」

「はて、おかしなことかな。人間ではないと断言するからには、人間とは何かが明確になっていなければ、それこそおかしいだろう。それで人間とはどういうものかと聞いたわけだが」

女は分の悪さを自覚したのか、気まずそうに押し黙ってしまった。

「分かった、質問を変えよう。さっきの女の子が人間でない根拠みたいなものはあるか」

「なんだ、そういうことか。それなら簡単だ」

実際に聞いていることはさっきと同じなのだが、尋ね方一つで随分違うものだ。

「いいか、まず第一に、あれは今までに何人もの人を殺している。それも尋常じゃない。確認できているだけでも百人は超えている」

百！？俺は言葉を失ってしまった。殺人は数が問題ではないというものの、俺の想像を遥かに超えていた。あの子が、たった一人でそれだけの人を殺したというのか。

「分かったか。凡そ人間の所業とは思えまい」

「ヒトラーは約一千万人だったな」

俺の返答に、女ははっとした。

「スターリンは数百万、毛沢東に至っては数千万。正確な数が分からないというのがまた恐ろしい。そう言えば、この連中は人によっては英雄と讃えられているな。一人殺せば殺人者だが百万人殺せば英雄か。チャップリンの言葉そのままだ」

女は言葉を返せない。確かに殺人は許される行為ではない。しかし、それは決して人間性を否定する根拠にはなり得ないのだ。

「し、しかし、お前も見たらう！？あれが持つ異常なまでの力を！あんなの人間業じゃ」

「お前の力も負けず劣らず人間離れしていると思うけどな」

「！」

女の目が大きく見開いた。なるほど、今の今まで自覚が無かったと見える。ふうっ、と溜息が洩れた。二の句も告げられなくなったまま、女はその場に立ち尽くした。

「お前、自分が何と戦っているのか、もう一度自分の頭で考え直した方がいい。どんな残忍な行為も、宣伝文句次第では大義があるように聞こえてしまうこともある。そうなると悲劇を通り越して哀れだぞ」

胸倉を掴んでいた手から徐々に力が抜けていく。やがて、俺は解放された。今まで俺の一挙手一投足を詮索していた彼女の目が、今度は自らの言動を顧みるようになったようだ。

「あなたは、なぜあの子が人間だと思ったの？」

唐突な、予想もしなかった方向からの質問だった。

「なぜ、あの子は人間だと思ったの？」

二回目の問いかけで、ようやく声の主が判別できた。百合のごとく静かに佇む端正な顔立ちのその女性は、事件の始まり、俺がああ繁華街で最初に出会った黒髪の人だった。

「結！お前、無事だったのか」

我に返った女の呼びかけに眼だけでチラリと反応し、ややあってコクリと肯いた。結。どうやらそれが、この人の名前のようだ。この二人は知り合いだったのか。それなら色々都合点がある。つまり、女はこの結さんを助けるために、

あの場へ割り込んで来たというわけだ。そんなことを考えている間にも、返答を待つアーモンド型の大きな瞳はじっと俺を見つめていた。口では何も語らないが、それ故に強烈に何かを訴えかける不思議な眼差しに、何かを答えなければならない気がして答えていた。

「人間にしか分からない話。いや、それは少々語弊があるかもしれないが、兎に角、人間とは何かについて話が通じた。少なくとも、それは人間であることの十分条件だと思っている」

俺の言葉に、結さんは小首を傾げた。

「人間とは何かって、あの、何で人を殺したらいけないのかという、あの話？」

そう、その話。って、聞いていたのかよ。いつから起きていたのだ、この人は。一方、俺の反応を見た結さんは、少しだけ首を前後に動かしていた。

「はぁ？なぜ人を殺したらいけないかって、そんなの当たり前……」

「答えなんてないよ」

俺達の会話に口を挟んだ女の声、更に遮るように結さんが呟いた。その両の眼は既に、最早そのことについて興味は失せたとしても言わんばかりにあさっての方向を向いていたが。半ば置いてけぼりにされた形の俺たちは、啞然とするほかなかった。

それにしても、「答えなんかない」か。これ自体は特段珍しい回答ではない。俺の周囲にも、これまでにこのように嘯く輩はいくらでもいた。というのも、これは西洋哲学二千年の歴史が辿り着いた解答であり、哲学を少しでも齧ったことのある人間にとっては、ある意味常識だからだ。しかしそれ故に、この一言はしばしば陳腐な定型文に成り下がり易い。ただ、今の結さんの一言には重みがあった。決して単なる哲学論議では片づけられない重み。恐らく、何かしらの実体験に裏打ちされた確信めいたものが、この人にあるからなのだろうが。

「戻ろう、^{こころ}慈。この人は、この件とは無関係よ」

当の結さんは、さっさと踵を返して帰ろうとしていた。かに見えたが、急に立ち止まり、くるりとこちらを振り返った。

「そういえば、あなたの名前を聞いてなかった」

その眼は俺をじっと見つめていた。こちらには、別に名乗りを断る理由がなかった。

「黎明隙だ」

「黎明、隙。……じゃあ、黎君か」

ものの数秒で俺の渾名は決まってしまったようだった。

「私は四条結。じゃあね、黎君」

そう言い残すと、結さんはもうすたすと向こうへ行ってしまうていた。それを、先ほど慈と呼ばれたあの女が慌てて追いかける。

「ちょっと待てよ、結。まだこいつが無関係だと、そう言い切れる訳では」

「この人の会話を聞いていた私が言っている」

「ふう、分かった。その代わりに、お前が聞いたという話の内容は後で報告すること。いいな」

「めんどくさい」

「我儘言うな」

意味不明なことを言い交わしながら、二人は去って行った。

第四章 第三の選択

本当にその日は色々とあり過ぎた。自覚はしていなかったが、俺の身体、特に神経系の方には相当負荷がかかっていたのだろう。帰りつくなりバタンと倒れ込んだところまでは覚えているが、そこでプツリと記憶が途切れている。気を失うように眠りに就き、気が付けば、白じむ四角い窓の向こうから奏でる小鳥のさえずりが、朝の訪れを教えてくれていた。

寝ぼけ眼をこすりつつ、身支度を整えながら昨日の出来事を一通り振り返ってみる。気掛かりになっていた幾つかの疑問を考証しようともしてみたが、それは途中で止めた。余りにも不可解で不明な部分が多過ぎる。推理で補おうにも、決定的な情報が欠落した現段階では、考えれば考えるほど却って筋を見誤り、泥沼に嵌り込んでしまう恐れがある。特に、今回のように常識が通用しない事態では、その危険性は輪をかけて増すと思われた。しかし、だからといって捨て置くわけにもいかない。人知を超えた力を持つ者の存在、それらを裏で支える勢力、そして、その対立構造に影響を及ぼしている思想的背景。この複雑に絡み合った雑多な要素を丁寧に解きほぐしていく作業は、誰にでも出来ることではない。おこがましいかもしれないが、俺が解決へ導かなければならない。そんな問題であるような気がしていた。

「うん、どこからどう聞いてもおこがましい考えだね」

「そう率直に言われると、逆に腹が立つな」

電車の中で俺と並んで立っている燈が、くすりと笑みを浮かべた。

燈は朝から元気だった。何しろ、いつも通り吊革につかまっていたところを「おっはよう！」と開口一番、俺の背中に強烈な張り手をお見舞いしてくれた。かと思いきや、「黎明君、どうしたの？朝からポケーッとしちゃって。まあ、いつものことと言えばそうなんだけど」などと、昨日初めてまともに会話した相手に対する言葉とは思えない、非常に失礼なことをのたもって下された。朝はできるだけのんびり過ごしたい俺としては、頗る迷惑な話だった。しかし騒がしかったのは最初のうちだけで、その後は当たり障りのない世間話をしながら、共に大学へと向かっていたのだった。

そのうち、今一つ乗りの悪い俺の様子が気に掛かったのだろう。何かと詮索するものだから、いつの間にかぼつりぼつりと昨日の事件のあらましを喋っていたというわけだ。元々話すつもりはなかったが、かといって隠す気もなかった。まあ、話して聞かせたところで、語れば語るほど事実は奇想天外なお伽話になってしまうのだ。まさか燈が最後まで根気強く聞くなんてあるわけがないと高をくくって、二言三言話し始めたのだった。信じられなければ信じなくていい、そう前置きした上で。ところが、燈の相槌の調子のいいこと。こちらも調子に乗って、つつい昨日のハチャメチャな出来事を粗方喋り尽くしてしまった。

やっぱり、不思議だ。普段の俺なら、こんなに一方的に喋りまくるなんてことは滅多にない。今日の聞き手を前に、一切の気遣いは不要だった。つくづく思う。燈は相当の聞き上手だ。この点については正直頭が下がる思いがした。

「なるほどねえ」

一通り話を聞き終わり、おもむろに頷く燈はどこか感慨深げだった。

「おい、ちょっと待て。まさか今の話、真に受けたのか？」

予想外の反応に、思わず問い質してしまった。だってそうだろう。一部始終をこの目で見てきた俺自身、未だに信じられないのだぞ。いくら理解があるとはいえ、話を聞いただけでそこまであっさり信じられるものか。だが、驚嘆する俺とは対照的に、それまでにこやかだった燈の表情がさっと陰り、不機嫌な心情が顔を覗かせた。

「まさか、また私をからかったの？」

あ、今の反応を悪意に取ってしまったのか。ここは事態の収束を図らねばならないだろう。

「いや、断じてからかったりしていない。今話したことは紛れもない事実だって」

「よく言うわよ」

燈は自嘲気味にふっと溜め息をついた。

「あなたはいつもそう。普段は愛想がいいけど、結局、私で遊んでいるだけなんだわ」

「待ってくれ、燈。お前が本気で俺を信じるとは思わなくて。兎に角、謝る。この通りだ」

「ふん、私のことを散々弄んどくせに、それで謝って済むと思ってるの？」

「さんざんって。確か、燈をいじったのは、まだ一回だけだったような」

「まだ一回って。回数なんて問題じゃないわよ！こんなことに一回も二回もないでしょ！？」

「落ち着けよ、燈。話せば分かる」

「ふん、話ならよおく聞かせてもらったわ。昨日は女を三人も相手に大奮闘だったのよね。随分と精の出ること」

「そうそう、その三人が三人とも本当に凄くてさ」

「この期に及んでまだそんな話を続けるつもり！？もう、信じられない！」

「燈、これは気のせいだろうか。なぜか知らんが、さっきからすれ違う人すれ違う人、俺たちと関わりたくはないと思いつつもどこか興味津々といった視線を送っているのだが」

「本当は私だって、あなたのこと、信じていたいよ。でも、だめなの。どんなに信じようとしても、一度弄ばれ傷つけられたその記憶が、無意識にあなたを拒絶してしまうのよ」

「燈。そろそろ勘弁してくれ。俺に向けられる視線が、好奇心から徐々に敵意へと変わりつつある。このままでは本気で洒落にならん」

「へっ」ごめんね」

ウインクと同時にペロッと舌を出しておどけて見せる燈だった。

「怒った？」

今度はこちらが大きく溜め息をつく番だった。からかわれていたと分かって、もちろん腹が立たないわけでもないが、単なる悪戯けだった以上はこれを咎めることはするまい。それに、今のは言葉遊びだと割り切れれば、むしろ楽しかったくらいだ。

「ここで怒鳴り散らしたら益々誤解を招くだろう。それに怒ったところでしょうがないさ」

「ありがと。私も悪乗りが過ぎたね。反省する」

カタンコトン、カタンコトン。リズムカルに電車が揺れる。俺たちはその律動にしばし身を任せることにした。

それにしても、燈も総武線経由で通学していたとは。中央・総武線沿線に住んでいるということは、このオフィス街の中で暮らしているということなのだろうか。ここは郊外に比べれば、生活を営む上では何かと不便な所だ。おまけに地価もべらぼうに高く、まず貧乏学生が住めるような場所ではない。俺の場合とは言う、たまたま高校時代の担任のついで、同郷の人を優先的に安く世話してくれる学生寮を紹介してもらったことから、ほぼ都心のど真ん中で暮らすはめになってしまったという、ごく稀なケースだ。最初の頃は、見渡す限りのオフィスビル、そうでなければ、そこに勤める人たちを相手に商売している、やや値の張る店ばかりが並び建つ光景に少々たじろいだものだ。そんな所だったものだから、それらの谷間にひっそりと構えるスーパーやコンビニの場所が分からず、危うく都会の真ん中で餓死しかけるという笑い話にもならない事態になりかけた。いや、そんなこと今は関係ない。つまり俺は何が言いたいのかというと、燈はそんな都心に間借りできるような超絶お嬢様か、或いは俺と同じように何かしら気の毒な境遇かのどちらかであることが推測できるというわけで……そろそろ燈が怪訝な顔を始めたので、邪推はこの辺りで止めておこう。

「ねえ、黎明君はどっちの仲間になるつもりなの？」

「ん？何のことだ」

前触れもなく発せられた燈の問いかけ。思わず問い返した。

「だから、鬼と言われている勢力と、それを狩ろうとしている勢力と、二つの集団があるわけでしょ？黎明君はどっちに味方するのかなって」

燈はじっと俺を見ている。回答を促すその双眸には、心なしか切実なものが感じられた。軽口を叩くのもどうかという雰囲気、何とはなしに次の一言を躊躇ってしまった。

『次は代々木、代々木です。お出口は左側です』

電子音の軽快なBGMとともに、乗り換え駅の名がコールされた。間もなく締めつけるようなブレーキ音を立てて電車が停まる。それを合図に、今まで静かだった人の波がにわかに大きなうねりを生み出した。ここからは山手線だ。返答の機会を逸したまま、俺と燈は押し出されるように電車を降り、流れの淀むホームにて次の電車を待つことになった。

「なぜ、私の話が事実だと思った？随分突飛な内容だったと思うんだが」

人に流されぬよう、俺の背中にぴたりと張り付いていた燈に、さりげなく聞いてみた。唐突だったためか、「え？え？」と要領を得ない様子の燈だったが、俺の言葉の意味する所を把握したのだろう。顎に軽く手を添えると、考えが整理できたとみえて小声で話しかけてきた。

「確かに突飛な話だよ。そう、形容するならまさに荒唐無稽。でも、作り話には思えなかったな。嘘にしては、余りに手が込んでいたというか」

「おかしなことを言うなあ。嘘というのは手が込んでいるものだよ」

「でも黎明君、嘘をつく時は分かり易い嘘をつくでしょ。人に迷惑を掛けそうなら尚更ね」

不覚にも目を見開いてしまった。心の内を見透かされた？そんな薄気味悪ささえ覚えた。

「黎明君、見かけによらず優しいもんね」

「今、余計な一言が聞こえたような気がするが、一応褒め言葉と受け取っておこう。だが、俺が本当にそんな人間かどうか、保証なんてどこにもないだろう」

「大丈夫だよ。私、人を見る目はあるんだから」

にこっと微笑むその表情に、厭味は感じられなかった。

「それは自分で言うことじゃないな」

「ははは、そりゃそうだ」

じゃれ合っているうちに電車が到着。鉄の塊に押し出された空気が燈の髪を揺らした。

「あ……」

どちらからともなく漏れる溜め息。扉の向こうには、沢山の人が饅頭のように押し潰されていた。超満員。白く曇った窓という窓は、人体由来の水分による車内の異常な高湿度環境を物語っている。その窓にへばりつく格好で潰されている人など、見るも無残であった。

扉が開く。と同時に、逃げ場のない圧力から解放された人々がどっと車外へ弾き出された。しかし残念ながら、ここで降りて行く人はほんの少しだった。弾き出された人の殆どはぞろぞろと車内へ戻って行く。通勤ラッシュの時間帯だけに、皆向かう方角は同じであるようだ。

さて、時間内に大学へ行き着くためには、この鮫詰め地獄の中に突進していかなければならない。流石の俺も、上京したての頃は臆して何本も電車を見送っていたものだが、過去の俺は俺にして而して俺に非ず。この中へ乗り込むコツは既に習得済みである。初心者は扉からはみ出さんばかりの群衆に圧倒され、出足からそこであきらめてしまう。しかし、電車内の人間は乗り降りの便を考え、なるべく扉付近に陣取る傾向にあるものだ。結果、扉周辺の人口密度が極端に高くなる一方で、車両奥には見た目とは裏腹に相当の余裕がある。何事も外見に惑わされてはならない。ただし、ある人を中心に正六角形の頂点にあたる位置にその周囲の人々が場所を占めているようであれば、それは実際に車内が飽和状態にある時だ。いくら突撃を仕掛けても無駄である。幸い、今日はそのような配列ではなさそうだ。

さて、敵情さえ分かれば攻略は容易い。まずは足場を確保。扉に背を向け、少ない床のスペースに右足だけ踵をねじ込む。次に扉の上辺に両手を懸けたら、これら三点を支点に背中を一気に群衆を押し込む。十中八九、これで乗客をズッと車両奥へ押しやることができるのだ。よし、今日もうまくいったな。

と思いきや、ふと見ると、普段は威勢のいい燈が未だホームでおろおろしていた。無理もない。目の前にあるのは、男の俺でも突進するには覚悟を要する圧倒的なまでの肉の壁。そこを、女の燈に俺と同じようにやれとはとても言えるものではない。俺はもうひと踏ん張りして、背中の群衆を更に奥へと押しやった。俺の前には、普段より多めのスペースが出来上がった。それに気付いた燈は、背中を向けて無言のままそこに入り込んだ。

さて、無事敵地に潜り込めたわけだが、またここからが大変だ。満員電車の中は正直言って不快だ。まずは乗っている人の表情からして不快である。皆、朝の眠い所を叩き起こされ、生活のためには仕方がないと無理矢理職場へと駆り出されているのだから無理もない。更にその道中、高温多湿の密室環境で年甲斐もなく押しくら饅頭させられるのだから、事ここに至りては不快の極みと言わずして何であろう。中には、朝から疲労困憊といった様子で死人と変わらぬ顔色の人までいる。多分あの人は、前後左右から均等にかかる肉の圧力によって、ようやく立っているのだろう。しかも、この時間帯は時間調整のために駅以外の場所でもブレーキがかかることなどしょっちゅうで、その度に容赦なく人の重みが押し掛かってくる。その中で一人が耐えきれずバランスを崩すと、ドミノ倒しよろしくバタバタと倒壊の連鎖反応が生じる有様だ。そして、その大惨事を立て直す力もまた肉の圧力であるというのは何とも皮肉なことだった。俺はそうした四方の肉圧から守るように、両脚の踏ん張りを利かせつつ、扉に押し付けた肘を支点にして、目の前の一人分の空間をじっと確保し続けた。

約十分にわたる耐久レースから、漸く解放される。やれやれ、毎朝大変なことだ。しかし鉄道マニアの友人の話によれば、小田急線の混雑ぶりは山手線の比ではないらしい。何事にも上には上があるものだ。むしろ山手線通学であることに感謝しなければならないのだろう。

降車したとき、燈が俯き加減のまま「ありがとう」と呟いた。

「当り前のことをしただけだ」

素っ気なく返事をすると、急いで井の頭線へと進路を取る。渋谷は井の頭線の始発駅、乗り降りに便利な扉付近の角の空間の確保が可能だ。そのためには、行動は早い方が良い。各方面から合流する人の流れが複雑に交錯する中、同じ進路を取る流れに乗りつつ、人と人との隙間を縫うようにして己の進路を見出し、素早く改札を通過した。

うまい具合に扉付近の位置を確保することができた。燈は今度も俺の背中にぴったりと張り付いていたらしい。ちゃっかりと俺の隣に並んで立っている。俺たちが定位置についた後から、バラバラと学生が乗り込んで来た。この半分くらいは俺たちと同じ皇大生だろう。無感動な面々を眺めているうちに定刻となり、電車は大学へ向けて発進した。

「燈、さっきの話なんだが」

「うん」

大学に到着してしまうと、一コマ目の講義が異なる燈とはそこで別れることになる。保留のままのさっきの問いに答えるとしたら今しかない。燈も同じことを考えていたようだった。

俺の考えを燈に話したところで、どうなるものでもないが、語れば自らの思考をいくらか整理することはできるだろう。俺は自分自身に覚悟のほどを問いながら、訥々と話し始めた。

「結論から言えば、俺はどちらにも属するつもりはない。理由は簡単だ。まず、鬼と呼ばれている集団だが、彼らは現実には人を殺し、社会を混乱に陥れている。これは決して許される行為ではないし、何としても止めなければならない。しかし、だからといって鬼と呼ばれる存在を狩る集団にも与することはできない。確かに、彼らは秩序を守る正義の味方のような立場にある。だが、奴らは相手が「鬼」だから、ただそれだけの理由で彼らの人格を否定し、殺そうとしている。しかも、それがどういうことなのかあまり深く考えていない。レッテルで人を差別し、人命さえも軽視している。そんな危うさがあるように思えて仕方がない」

「両方とも間違っている。でも、両方とも見捨てておくわけにはいかない、ということね」

燈は一通り聞き終わると、俺の言葉を一言一言咀嚼するかのようにならざるを得ない。でも、それはとても難しいことだと思ふよ」

「だろうな。だが、何事においても自分の信念を貫くのは難しいものだ」

「ふふっ、そうだよ」

俺の回答を聞き終えた燈は、いたく満足したようだった。

電車が駅に到着した。各々の講義室へと向かう学生の緩慢とした足取りの中、一人颯爽と飛び出した燈は、途中でぐるりと身を翻し、後からのろのろついてきた俺に呼びかけた。

「ねえ、黎明君。もしかして、二限空いてる？」

「ん？ああ、そういえば空いていたな」

「じゃあ、早目にお昼を摂ろうよ。昼休みになってからだと席が埋まっちゃうもんね」

楽しげな燈の語調に、つられてこちらもそんな気分させられる。

「じゃ、一限終わったら食堂に集合ね」

俺の返事を待つことなく、柔らかな春風と共に燈はもう駆け出していた。

第五章 スクランブル

「ねえ、黎明君。εδ論法って理解できた？ほら、昨日やった微積のあれだよ」

「ああ、あれか。要するに、適切な微小区間δを設定すれば、どんな小さな値εでも数列を抑えることができるなら、そいつは連続だっていう定義だろ？」

「.....ごめん、もうちょっと分かり易くお願いできない？」

「ははは、確かに今の説明は不親切だったよな。ちょっと待ってるよ。つまりだ。昨日、教授は数列で説明したけど、あれをx y座標で考え直してみると分かり易くなるんだよ。ほら、こんな風にδをx座標、εをy座標上の値として置き換えてみると」

俺はメモ用紙を取り出し、さらさらとグラフを描いて説明してやった。俺が説明する横から紙を覗き込み、グラフや論理式と睨めっこしていた燈だったが、程なく理解できたようだ。

「なるほど！そういうことか。やっとεδ論法の何たるかを掴めた気がするよ」

「そっか、それは良かった」

俺の拙い説明で理解してもらえて何よりだ。燈は清々しい面持ちで軽快なステップを踏み、皇大前通りを遊歩していた。

一限の後、当初の予定では早目の昼食を摂るはずだったが、「折角だから遠出しようよ」との燈の提言で、半ば強制的に学外へ連れ出されてしまった。まあ、こういうのも悪くないか。

「それにしても、大学に入ってから急に数学が厳密さを増してきたような気がするのよね」

「未だ数学への遺恨晴れやらず、といったところか。そういえば先輩が言っていたな。大学に入ると、生物は化学に、化学は物理に、物理は数学に、数学は哲学に変わるって」

「はははっ、うまいなあ。ほんと、その通りよね。たかが連続の定義くらいで、あんな小難しいことをだらだらと聞かされた時点で納得だよ」

「ま、数学は論理が命だからな。曖昧なままだと、どこかで足元をすくわれるんだろ」

「いや、それは分かるんだけど、私が言いたいのは、つまり.....そう！些細なことに拘り過ぎることは大局を見失う危険性を孕んでおり、故に微分積分学的観点は特に目先の利益のみを追求する傾向にある昨今の刹那主義的風潮を助長するばかりでなく、心の豊かさという目に見えぬ価値をも我々人類から忘れさせつつある元凶にもなっているのではなからうかと」

「いきなり深淵な話になったものだな」

「だってそう思わない？さっきの連続の定義だって、哲学上は数ある仮説の一つにすぎないのよ！？それが理解できるようになったからって大きな顔されても困るってものですよ。それより私達は、もっと大きな、何億何兆光年とも知れぬ壮大な宇宙的観点を持つべきなのよ」

「そんなに数学が憎いならニュートン先生やライプニッツ氏に文句を言うんだな。ああ、それから、その何億何兆光年とも知れぬ壮大な宇宙の謎を解明する手段として、現在最も有効なのが、まさにその微分積分学的観点だ。忘れるなよ」

「あう！」

ぐうの音も出なくなったようだな。大人しくなったようで結構、結構。

周囲は買い物客やビジネスマン、学生たちで賑わっていた。

「なあ、燈。お前、数学が苦手だったのか？」

何気なく聞いてみた。

「うん、苦手ってほどじゃないけど、得意とは言えないわね。私、元々哲学科志望だし」

「哲学科？だってお前、俺と同じ理科二類じゃなかったか？」

「おや、黎明君ともあろうお方が、そういうことを仰いますか？」

燈が意地悪っぽい顔を向けてくる。俺は思わず苦笑した。

「すまない、愚問だったな。そもそも学問に理系も文系も関係ないか」

「そうそう、古代ギリシアでは哲学も数学も政治も科学も音楽だって、みんな『哲学』。区別なんて無かったんだから。そういう黎明君は、高校時代は何が得意だったの？やっぱり数学とか物理とか？」

「いや、国語と日本史だ。むしろ物理は大の苦手だったな」

俺の答えが余程意表を突いたものだったのか、燈はしばらく呆気にとられた様子だった。が、やがてくすくすと笑い出した。俺もつられて笑い出した。

他愛のない会話。生産性のない無駄な時間のはずなのに、どういうわけか、この一瞬一瞬がとても貴重に感じられる。おかしいこともあるものだ。相手が燈だから？恐らくそうなのだろう。時折、ざわざわと木の葉の擦れ合う音が辺りを覆う。ゆったりと時は流れていた。

「さて、燈。そろそろ触れてもいいのかな？」

「た、多分、問題はないと思う……けど」

苦笑いを浮かべながら燈が応えた。どこか落ち着かない様子だ。それもそのはず。俺たちが正門を出たあたりから、ずっと後をつけている人物がいたのだ。しかし、その出で立ちたるや、白いマスクに黒いサングラス、目深に被ったニット帽、おまけに季節外れのフロックコートという、見るからに異様な雰囲気を感じていた。その人はものを言わずとも、現在誰かを尾行中であることを全身で主張しまくっていた。いや、この際姿形はどうでもいい。どうでもいいはずがないのだが、それでもそう思わせてしまう致命的な欠陥を、その追跡者は有していた。というのも、もうさっきから何度となく俺たちの視界にその珍奇な装いを晒け出してしまっているのだ。こちらが気を使って、できる限り見ないように努力してやっても、それでもちょくちょくと視界の中ほどまでしゃしゃり出てくる。なぜだ！一体どうすればそこまで初歩的なミスを繰り返すことができるのだ！？しかも、あれで本人は物陰に身を隠しているつもりらしい。ここまでくれば、最早ひとつの才能だった。余りのドジっぷりに、こちらがいたたまれなくなる。このまま様子を見続けることが、ひどくもどかしく感じられた。

「何なんだ？あれ」

「さあ、何なんだろうね？」

俺たちがやきもきしているさなかだった。前から歩いて来た学生が、飲み終えたコーヒー缶をポイと路上に投げ捨てた。全く、とんでもない餓鬼だな。後方へ転がる空き缶を、見るとはなしに目で追っていった。すると、すっと進み出て缶を拾い上げ、流れるような動きで自販機側のゴミ箱へ放り入れた者がいた。見事なお手前に思わず見入ってしまった。意外なことに、それは先ほどの不審者だった。

「誰か！あいつを捕まえて！！」

突如響き渡った女性の甲高い叫び声。何かと動きの止まった俺たちの脇を、全速力で男が駆け抜けて行った。懐に抱えているのは女物のハンドバッグ。ひったくりか！はっとする俺たちの脇を、再び尋常ならざるスピードで抜き去って行く影。間もなくひったくり犯は、その影に抑えつけられてしまった。影の正体は、やはりあの似非探偵。彼女はわらわらと集まってきた警察官に男の身柄を預けると、そそくさと定位置……電柱の陰へと身を隠した。

「きゃあああああああ！」

今度は何だ！？叫び声のした方を見遣ると、未だ赤信号の灯る横断歩道の真ん中をカラカラと走る乳母車！しかも間の悪いことに、そこへ大型トラックが突進してきている。まずい、このままでは赤ん坊が轢き殺されてしまう！目の前で進行する絶望的な状況に、居合わせた誰もが動き出すことができなかった。ところが、またもや一陣の風と共に現れたフロックコートの魔術師。目にも留まらぬ速さで横断歩道の中央へと躍り出ると、乳母車ごと抱えあげるや、次の瞬間には向こう側の歩道に着地していた。急ブレーキをかけ停止するトラック。路上にはくっきりとタイヤ痕が残されたが、赤ん坊は無傷だった。命の恩人に、何度も何度も頭を下げては涙を流す母親の姿が見えた。当の救世主は、いえいえ、当然のことをしたまでですから、という身振り手振りで、そんな母親の姿に心底恐縮している様子だった。

もしかして、あいつはもの凄くいい人なのではなからうか。あ、そう思ったそばから、今度は木陰に隠れるのか。

「もういいよ、慈。とっくにばれてるから」

燈の声にビクッと反応し、その行動が停止した。不審人物はクルリとこちらに向き直ると、

「よう、燈。奇遇だな、こんな所で会うなんて」

何事も無かったかのように言ってのけた。勿論、あの服装のまま。称賛に値する白々しさだった。それにしても。先程、確かに燈はあの不審者を慈と呼んだ。慈とは何とも珍しい名前だ。まさかとは思うのだが。

「慈、もうあきらめなよ。何のつもりか知らないけど、ここまで白をきるのは見苦しいよ？」

「う、そうか、見苦しいか。うむ、武人たる者、見苦しいのはよくないよな、見苦しいのは」

不承不承ながらも、慈と呼ばれたその人物はいそいそと変装を解いた。やがて現れたその顔は、やはりと言うか何と言うか、まさしく、昨日出くわしたあの怪力女だった。

「なあ、燈。お前、この人と知り合いなのか？」

目の前の危険人物には、こちらの動きを悟られてはならない。細心の注意を払いつつ、こっそりと燈に尋ねてみた。「あ、黎明君は初めてだったよね？こちらは私たちと同じ一年生で、文科二類の東郷慈さん。見ての通り、ちょっとした慌てん坊さんだけど、真面目で頼れるいい人だよ」

「なるほど、ドジっ娘の猫文二、東郷慈さんか。まさか同じ皇大生だったとは」

「そこ、おかしな紹介をするな！そしてお前、お前も妙な納得の仕方をするんじゃない！」

「あ、聞いてた？」「聞いてましたか」

「何が聞いてましたか、だ。聞こえるように話をしおってからに！」

頭に血を昇らせ、噛みつかんばかりにこちらを睨みつけている。

「ちなみに私は文科三類。幸か不幸か、猫よりは暇じゃない」

「うわっ！」

背後からぬっと登場してきたのは四条さんだった。この人も相変わらず神出鬼没だな。まるで始めからそこにいたかのように、平然と空間に収まっている。

「おおっ、結ちゃんもいたんだ！？全然気がつかなかったよ」

「私は普通に歩いてた。あなたたち二人が慈にばかり気を取られていただけ」

返す言葉もなかった。そういえば、俺達は東郷さんにばかり気を取られていた。もし、あの出で立ちが陽動作戦だったとするならば、俺たちはまんまとしてやられたことになる。まあ、そこまでして四条さんの存在を隠すメリットはないわけだが。それにしても、声を掛けられる直前までまるで気配が分からなかった。こんなことってあるのだろうか。

「ちょっ、結！あんたまで出てきたら尾行にならないでしょ」

「やっぱり尾行していたのか」

「ハッ！しまった」

慌てて両手で口を抑える東郷さん。だから、今更遅いって。

「尾行は慈が見つかった時点で既に失敗していた。こっちは英語の講義を抜け出してまで協力している。失敗した以上は早く戻って、途中からでも聞いておきたい」

ほう、この時間に英語ってことは、四条さんは二年生だったのか。

「はいはい、二人ともストップ！親睦のためのコミュニケーションは大いに結構。でも今日はこのくらいにしましょ。んで、結ちゃんと慈には、どうして私たちの後をつけていたのか、その辺をじっくりとお話して頂きましょうか」

ずいと燈が慈に詰め寄った。苦虫を噛み潰したような顔で必死に口をつぐむ努力をしていた東郷さんだったが、燈の無言の抗議に気圧され、遂に観念してしまった。

「いや、だからだな、私がキャンパスをふらりと歩いていた時に、ふと見ると、燈がこいつと連れ立って正門から出ていくのが目に入ったんだ。で、気になって結にも連絡を入れてだな。って、そうだよ！燈、お前大丈夫か？何もされてないか？お前たち二人にどういう繋がりがあるのかは知らんが、こいつはほんと油断ならない怪人物なんだぞ」

「私に言わせれば、あんたの方がよっぽど油断ならない不審人物だけだな」

「一々五月蠅いぞ！お前」

「はいはい、事情は何となく分かりました」

睨み合う俺たちの間に、ずっと燈が割って入った。

「つまり、慈は私が心配でついて来たってことなのね。でも慈、生憎それは杞憂よ。黎明君はおかしな人なんかじゃないし。そうねえ、むしろ真面目過ぎて融通が利かないくらいかな」

そう言う燈は、目だけを俺に向けてにまにま笑っていた。

「ほう、真面目に過ぎるとは、燈にしては高い評価をしたものだな」

腕組みしながら、尚も怪訝そうに俺をしげしげと値踏みしている東郷さんだった。

「黎明君も、そんな喧嘩腰にならないでよ。さっきの慈の活躍、見てたでしょ？慈はとっても正義感が強いし、頼りになるのよ。私の見た所、二人は結構気が合うと思うんだけどな」

「「はあ？こいつと気が合うだって！？冗談じゃない」」

見事にハモってしまった。お互い気まずい顔を見合わせる。耐えきれず俺は目を逸らせた。燈はそんな俺たちの様子を見比べてニコニコ楽しんでおり、四条先輩の方は、こちらに背を向けて小刻みに肩を震わせていた。堪えている。必死に笑いを堪えている姿勢だ、あれは。

「あれ？結ちゃん、講義に戻らなくていいの？」

「あ、つい二人のコントに聞き入ってしまった」

「「コントじゃねえよ！」」

またもハモる俺達。四条先輩はゆっくりと背を向けると、再び肩を震わせ始めた。意外と笑い上戸な人だった。收拾

のつかない堂々巡りに、俺はたまらず燈に話を振った。

「それにしても燈。お前、先輩をちゃん付けで呼んでいるのか？四条先輩って二年生だろ」

「うーん、私も最初は四条先輩って呼んでいたんだけどね、結ちゃんが先輩とかつけるなって言うんだよ。でも、さすがに呼び捨てにするわけにはいかないでしょ？だから、結ちゃん」

なるほど、本質的な部分で誤りがあるような気がするが、一応経緯は理解できた。

「結は一年しか違わない相手に、先輩面するのもされるのも苦手なんだそうだ。私も最初は抵抗があったんだが、今は結の気持ちを汲んで、不躰ながら呼び捨てにさせてもらっている」

なるほど、なかなか謙虚な人なんだな。

「黎君も、私のことは結でいいよ」

いつの間にか隣に立っていた四条先輩が囁いた。

「じゃあ、結先輩って呼んだ方がいいですかね」

「先輩とか言わなくていいよ。かといって黎君は男の子だから、燈みたいにちゃんづけで呼ぶわけにもいかないよね。だから……やっぱり、結でいい」

「結さんという呼び方もありますが」

「結でいい」

「はい」

何だろう？ほんの一瞬だが、言いようのない威圧感を覚えた気がした。

「ふうん。黎君、ねえ」

なぜか今度は背後からの威圧感。あの、燈さん？一体ドウナサレタノデスカ？

「ねえ結ちゃん、その呼び方、いつどこでどのような経緯でできるようになったのか、詳しく教えてもらうことってできないかな？」

とびっきりの笑顔。でも、目が笑っていない。何だ、一体何があったのだ！？燈の豹変ぶりについていけない俺。そんな俺と燈を交互に見比べていた結さんが、ポンと手を叩いた。おお、何か分かったらしい。助けを求め、すぎるような視線を結さんに送る。結さんはそんな俺の目を見つめ返し、そっと俺の手をとった。それにどんな意味があるのか見当もつかない。だが、何か策があるに違いない。そう踏んだ俺は、結さんの手をぎゅっと握り返した。その瞬間、結さんの口元がにやりと歪んだ。嵌められた！？気付いたが時既に遅し。結さんは俺の肩越しに燈の表情を窺っては細かく肩を打ち震わせているが、俺にはとてもじゃないがそれを確認する勇気はない。ただ、俺の背後で事態は間違いなく火に油を注いだ状態になっていることだけは察せられた。

渦中に、軽快な着信音が鳴り響く。

「あ、私の携帯」

燈がショルダーバッグを探り、携帯電話を取り出した。素早くメールをチェックしている。

「ええっ、こんな時に呼び出し！？もう、ちょっとは空気読んでよ！というわけで、いい？黎明君に結ちゃん。少し席を外すけど、さっきのこと、後で詳しく聞かせてもらうからね」

「ん、さっきのこととは？」

「うっ。もうっ、知らないわよ！」

なぜか腹を立てて、燈は元来た道を走り去って行った。って、おいおい、待ってくれよ燈。か弱い俺を、この猛獣二頭の下へ置き去りにするのかよ。

「ええっとお、黎明君、猛獣二頭って誰と誰のことなのかな？」

うっかり口走ってしまっていた。無用の災いを自ら招いてしまったことをこの上無く後悔したが、後の祭りだった。仕方がない。かくなる上は実力行使にてこの場を脱するより道は

「待って、黎君！」

あっさり捕まってしまいました。ですよ、この二人から逃れようなんて端から無理な話ですよ。そのまま俺は結さんに引きずられて物陰へ……え？

俺は、俺の肩を掴んでいる結さんの手を見て驚いた。結さんは、いつの間にかあの籠手を装着していた。向かいの東郷さんも周囲に気を張りつつ、あの棒を手に、ただならぬ緊張感を発していた。誰のものだろうか、ゴクリと唾を飲み込む音が聞こえた。

「鬼が、近くにいる」



第六章 哀しき銃声

「まだ、こちらには気付いていないみたいだな。近付いてくる気配はない」

「相手の居場所が分かるのか？」

ギロリと東郷さんが俺を睨んだ。思わず首をすくめる。慎重に話しかけたつもりだったが、やはりタイミングが悪かったか。だが、東郷さんは何事か逡巡するような素振りを見せた後、腹を決めたように体ごと俺の方に向き直り、すつとあの棒を差し出して見せた。

「この神具を手に入れば、ある程度分かる」

神具。通常、それは歴代皇帝が代々継承してきた帝位、或いは国家の象徴とも言える、剣、玉、鏡の三つの宝物の総称。だが、今俺が目にしてる棒は、それらとは似ても似つかぬものだった。重々しい名を冠する武器の説明は続く。

「私の神具はこの棒、結のは、ほら、あの籠手だ。この神具に触れていれば、鬼の大体の位置が把握できる。しかし厄介なことに、同時に鬼の方にも神具の持ち主の居場所が分かってしまうらしい。それも興奮するほど見つかり易く、逆に落ち着いていると見つかりにくい」

そこで一旦話を区切り、東郷さんは再度周囲に気を配る。神具を通して相手の動きを確認しているのだろう。

「だから、今は鬼を監視しつつ、努めて平静を保つ。無益な衝突を避けるためにも」

なるほど、お昼時のこの通りは交通量も多く、食事をしに集まってきた人々でごったがえしている。確かに、ここで昨日みたいな凄まじい戦闘が始まるものなら、その被害は甚大だ。平和な日常風景が一瞬にして地獄絵図と化す事態は、何としても避けなければならない。

「考えているな。むやみやたらと喧嘩を吹っ掛けているわけではないということか」

「無論だ。私たちだって好き好んで戦っているわけではない」

不意に東郷さんの言葉が途切れた。よく見ると目を剥いて、呼吸まで止まっている。

「まずい、気の勢いが変わった。こちらに気付いたみたいだ」

ここは無難に事が過ぎて欲しい。そんな俺の期待はあっさり裏切られた。神経が張りつめ、心臓が早鐘のように打ちつける。急激な血圧の上昇に、軽く吐き気を催した。

「慌てないで。まだ見つかったわけじゃない」

結さんが冷静にたしなめた。その言葉に東郷さんも頷く。このまま静観していれば充分遣り過ごせるということか。だが、胸中にこびり付いた気持ち悪さを拭い切れない。如何せん、相手も人殺しを何とも思わない連中。しかも結さんや慈たちに対して深い遺恨があるとすれば、このままで済むとはどうしても思えない。

「隠れたままで大丈夫か？奴は俺たちを炙り出そうと、通行人を人質に取ったりはしないか」

最悪の事態を懸念した俺の問いだったが、東郷さんはふっと笑みを浮かべた。

「なるほど、手近なもので最大限の効果を発揮する、人道的にはともかく戦略的には有効な手段だ。だが、心配はない。今までの鬼の行動パターンから察するに、奴らは基本的に、自分以外の存在にはまるで関心がないのだ。つまり、鬼は人質を取られた場合の我々の焦りなど知る由もないし、想像すらしない。だから、人質を取るなんて心を攻める戦略的行動はないと考えていい。下手に刺激をしない限り、じきに興味を失って姿を消すのが関の山……」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

それは、生まれて初めて聞く人の断末魔だった。

「ひ、人が……人が……」

「ひええっ！血が、血が噴き出して、あ、あ、ああっ！」

「た、助け……て……」

「い、医者あ！医者はいないのか！？」

街がパニックに陥った。人々が意味もなくそこら中を走り回る。

「馬鹿な！？」

弾き出されたように発せられた、東郷さんの声。だが、現実は余りにも残酷だった。軽率にも、俺はその場を飛び出してしまった。無秩序に錯綜する人々の群れ。体中に鮮血を浴びた人も多数混じっている。人が殺されたのは間違いない。だが、現場から遠ざかろうとしているはずなのに、方向性も何もなく、糸の切れた凧のように、ただぐるぐると

逃げ惑うばかりの群衆。それは、同時多発的に複数の場所で殺人が行われたことを物語っていた。

「こ、これは……」

いつの間にか一緒に飛び出していた東郷さんが、絶句してしまった。しかし、それは目の前の大惨事に対してというより、握りしめた神具を通して伝わってくる何かに対してだった。

「どうした」

呼びかけても返事がない。心なしか身震いしているようにも見える。

「今、鬼の思念が伝わってきたの。とても強力な形で」

代わりに答えてくれたのは結さんだった。

「『早く出てこないと、また人を殺す』と言っている。とても危険。殺気というより狂気。これは伝わってきたんじゃない。明確な意思をもって送られたメッセージ。こんなの、初めて」

「鬼の奴め……許さん！」

突如、東郷さんがトップスピードで走り出した。迷いなく真っ直ぐ、どこかを目指して突き進んでいく。相手の正確な位置が掴めたのだ。結さんもそれに続く。俺はというと、置いて行かれないように後を追うので精一杯だった。

黒衣に身を包んだ長身の紳士。一目で神父と分かった。しかし、よく目にする神父とは違い、両手には四本ずつナイフが握られていた。既に二人は、その神父と交戦状態にあった。繰り出される東郷さんの金棒。神父はそれを指の間に挟んだ数本のナイフで絡め取り、軽くないなしている。すると今度は結さんの拳が神父に迫る。だが、それもナイフの壁に阻まれて届かない。結さんの攻撃がかわされると、また東郷さんの棒術が繰り出される。その繰り返しだったが、攻撃の合間合間に生まれる連携の隙を突いて、神父はナイフを投げつけてくる。その度に二人は大きく体勢を崩し、その都度、神父の足技が二人にダメージを与えていった。

結さんと東郷さんのペアは何とも戦いにくそうだった。東郷さんが棒を振っている間は結さんが敵に近づけず、結さんが拳撃を加えている時は東郷さんが棒を振るえない。お互いがお互いに同士討ちを避けるよう遠慮しながら戦っていて、無意識のうちに力をセーブしてしまっていた。こんなことでは、どちらか一人だけで戦った方が、まだましな気もする。それに引き換え、神父はどこまでも落ち着いていた。守りに入っている間はじっと二人の動きを観察し、隙が生まれれば確実にものにしていく。勝負の行方は目に見えていた。

「こんなものですか」

がっかりしたような、溜め息混じりの神父の呟きが俺にも聞こえてきた。刹那、今度は一度に六本のナイフが放たれた。今までにない襲撃に浮足立ち、結さん東郷さんの二人の動きが完全に止まってしまった。次の瞬間、神父の足蹴りが結さんを捉えた。結さんは虚空に大きな放物線を描きながら、遙か彼方へと飛ばされてゆく。

「結っ！」

「お友達の心配をしている場合ですか」

続いて東郷さんに神父の蹴りがクリーンヒット。東郷さんはそのまま街路樹に叩きつけられた。あっという間に、二人とも戦闘不能に追い込まれてしまった。

「おや、もう一人いましたか」

二本のナイフが俺に向かって飛んできた。俺は自分でも訳が分からないまま、本能としか言いようのない動きで身を翻す。間一髪。チッという神父の舌打ちが聞こえた。

「ふむ、見事な体裁ですが、貴方は普通の人間ですね。貴方からは神具の気配がしません」

神父の狙いは、今度は俺に向けられていた。一步、また一步と近づいてくる瘦身の男の足音が、ズシリズシリと腹に響く。ただ単純に、どうしようもなく恐ろしかった。逃げられるものなら逃げ出したい。だが、ここで二人を見殺しにはできないし、そもそもこんな奴から逃げ切れるものでないことは明白だった。俺は、俺のやるべきことをやるしかないのだ。

「おい、あんた、神父なんだろう！一つ聞きたい。お前は、なぜ人を殺すんだ」

叫びにも似た俺の問いに、神父の歩みが止まった。

「なぜ人を殺すのか、ですって？ははあ、なるほど。あなたはこの格好をした私がなぜ人を殺めるのか、不思議に思っ

ていらっしゃるのですね。無理もない。世間で神父と言えば、虫も殺さぬお人好しのように思われていますからね」

食いついた！よし、ここをきっかけにどんどん切り込んでやる。

「端的に言いましょ。それは、私が天啓を受けたからです」

ある意味、予想通り。しかし同時に、最も恐れていた回答だった。天啓。改めて聞くと、何とおぞましい言葉だろう。服装から察するに、この神父が信仰しているのはキリスト教。その信者が暴走する理由といたら、ほとんどこれに決まっているといっても過言ではない。

「ほう、キリスト教には殺人の教えでもあるというのか」

敢えて誘い出す問い方をしてみれば、案の定、神父は口元に薄笑いを浮かべるのだった。

「異教徒の貴方には到底分からないでしょうね。しかしですね、この世は神の造りたもうた世界。故に、神が善しとされたことは善いことになるのですよ。たとえどんなことであれ、ね。そりゃあ、私も神の御声を聞いた時は身の震える思いがしました。そして、その内容を理解して、改めて戦慄を禁じ得ませんでした。でも、こう思うことにしたんです。私は選ばれたのだ。神によって選ばれたんだってね。これはきっと、私以外の人間には決してできないお仕事なのです。ああ勿論、私が神のご意志を正確に知り得たなどというおこがましい考えは持っていませんよ。神は我々人間には測り知れない、まさに全知全能でいらっしゃるから。ただ私に言えることは、私が何十年にもわたって学んできた神学と何ら矛盾する所はないということだけです。ああ、天の父よ、偉大なる主よ。全ては神の思し召しのままに」

聞いているだけで吐き気のする、立派なキリスト教神学のご高説だった。そりゃあ神学とは矛盾しないだろうよ！命をも軽視する身勝手な発言に、思わず怒りで我を忘れそうになる。

「おやおや、私としたことが。つついお説教に夢中になってしまいました。ごめんなさい、何せ数十年来の習慣だったものですから。では、そろそろ貴方には死んでもらいましょうか」

しまった！一瞬とはいえ冷静さを欠いてしまったために、後手に回ってしまった。肉迫する神父の黒衣を前に、己の見通しの甘さを痛感した。

ズダン！

銃声が鳴り響いた。チッと舌打ちを残して神父は飛び退いた。間髪入れず、ズダン、ズダンと畳みかけるように神父めがけて発砲されたが、ひらりひらりと舞うようにかわしていく。

「そこですか」

神父は握っていたナイフを発射地点と思しき方向へ投げ飛ばした。

「！」

スナイパーの焦りが俺にも感じ取られた。カインという金属音。恐らく、飛んできたナイフを咄嗟に銃で弾いたのだろう。

「逃がしませんよ」

神父は標的を変え、今度は姿の見えぬスナイパーに襲いかかろうとしていた。

「黎明君、伏せて！」

聞き覚えのある声を耳にし、俺は脊髄反射的に大地に伏せた。その瞬間、炸裂音が轟き、爆風に煽られた砂埃で周りの視界が遮られた。ちょっと待て、いきなり手榴弾かよ。そしてこれは.....そうか、弾幕か。何者かが駆け寄り、俺の手を掴む。温かく柔らかいその感触に引っ張られ、俺は戦線から離脱していった。

ほんの数分間の戦闘であったにもかかわらず、街はすっかり様変わりしてしまった。整備された区画も街路樹も店構えも跡形もなく、無造作に転がる瓦礫の配列のみが、わずかにかつての賑わいを偲ばせる。一体、ここで何人の人が死んだのだろう。無念のうちに亡くなっていった人々の傷ましさを想うほどに、どうしようもなく怒りが込み上げてくる。

目の前で、狙撃手の女がゴーグルを外した。

「やはり、お前だったのか」

燈は決まり悪そうに俯いた。連れられて来た物陰には、既に結さんと東郷さんが身を隠していた。手も足も出なかったショックからか、皆押し黙ってしまっている。ただ、俺にとってはそんなことよりも、燈が結さんたちと同じ能力者だったことが余程ショックだった。

「……ごめん、黎明君」

重苦しい空気の中、燈が呟いた。そんな言葉で平静さを取り戻せるほど俺は出来た人間ではない。だが、考えてみれば燈が謝る理由なんてどこにもなかった。どんな人間でも、できることなら隠しておきたいことなんて一つや二つでは済まないはずだ。それをなぜ最初から明かさなかったなどと、誰が糾弾できようか。

「黎明、色々と言いたげだが、今はそれどころではない。判ってくれるな」

東郷さんの介入がなければ、いつまでも俺たちは黙ったままになっていたかもしれない。そう、今はそれどころではないのだ。カチッと頭の中のスイッチを切り替えた。

「それにしても……あいつ、人殺しが天啓だなんてほざいてやがったな。いくらなんでも、そんなことがあるわけないじゃないか」

余程腹に据えかねたのか、吐き捨てるように東郷さんが言った。そうか、聞いていたのか。確かに東郷さんの気持ちも分からないでもない。だが

「ううん、あの牧師さんの主張は何も間違っていないわ。キリスト教の教義的には、ね」

燈の返答に、東郷さんは驚きの表情を向けた。燈はそこからどう続けるべきか思案しているようだったが、そこは俺が引き継ぐことにした。

「事実、人を殺せとの神の命を実行したことで聖人並みに祭り上げられた奴は腐るほどいる」

「え？そんな人って」

「ジャンヌ・ダルク」

「あ」

言わずと知れた、百年戦争にて連戦連敗のフランス軍を勝利へと導いた少女である。鋤鍬しか持ったことのない農家の娘が、単身戦場へ飛び込んでいったきっかけ、それも神のお告げだった。戦争といえば、どんな美辞麗句で飾ろうとも、本質は人殺しだ。

「そいつが一番有名かもな。それ以外にも、ユスティニアヌス一世、ウルバヌス二世、インノケンティウス三世、挙げればきりが無い」

神の腹積もりひとつで善が悪になり、悪が善にもなる。そして被造物たる人間は、これを諸々と受け入れなくてはならない。これがキリスト教の基本中の基本だ。そのキリスト教徒を啓典の民とするイスラム教も根本的には変わらない。そういう教義であるからこそ、一度確信を持った信者は残虐な行為にも徹底的にのめり込んでしまう。「人は宗教的信念によって行うときほど、喜び勇んで徹底的に悪を行うことはない」。パスカルの指摘通りだ。良心の呵責自体が神への反逆になってしまうのだから、歯止めが利かなくなるのも無理はない。

「そこに`神のお告げ、という極めて個人的な体験が加わると、もう手がつけれなくなるの。その内容がいくら公序良俗に反したものであっても、本人が神様を体験してしまった以上、それはその人の中で確固たる事実になってしまう。そうなると、どんな権威も意味をなさない。多分、法王が仲介に出てきてもどうしようもないでしょうね」

燈の言葉を承けて、俺は続ける。

「各自の体験を通してしか信じることができないのが、人間の信心の宿命だ。そういう意味では一神教と言っても、実際は十億人なら十億通り、全く別の神を信じていると言っていい」

更に俺は切り込む。

「そもそもキリスト教は、ある事情から提起された、不条理とも思える苦しみを如何に耐え忍んで生きていくかという問題によって生まれた宗教だ。その回答として、彼らは神という架空の存在の下に、既成の価値観を根底から覆すこと

で心の平安を得ようとした。金持ちよりも貧者の方が、賢い者より愚かな方が神の国に近い、といった具合に。こうすれば、裕福な人々を見下しては優越感に浸り、悲惨な現状は神の国を夢見ることで誤魔化される」

「なるほど。ニーチェが言ったルサンチマンの哲学だね」

流石は哲学科志望の燈だった。

「夢想家になれば、ある程度の苦しみには耐えられる。だが、それはつまり、ある程度以上の苦しみには耐えられないということだ。誤魔化しは続かないからな。それはさておき、こんな風に世の倫理や道徳を根本からひっくり返した宗教であるだけに、キリスト教は実に非論理的で矛盾が多い。いや、矛盾だらけと言った方が適切だ」

東郷さんが膝を叩いた。

「おい、ちょっと待てよ。矛盾だらけなら、いくらでもそれを指摘できるってことじゃないか。間違いは間違いだと分からせれば、あの鬼の暴走も止められるんじゃないか？」

「なるほど、黎君はそれを狙っているのね」

俺は頷いた。

「でも、現実はそう甘くはないわ」

燈が浮かれる東郷さんたちを制した。

「処女受胎に死者の復活、イエスの死に際の断末魔。確かに、キリスト教は矛盾の宝庫と言っている。勿論、そういうところから神の不在に気付いたアインシュタインやシュレーディンガーといった理性的な人たちもいる。でも、いくらそういうことを取り上げても、信者は信仰が揺らぐどころか、却って信仰を強めてしまうこともあるの」

「は？一体どういうことだよ」

「キリスト教では、人の理解の及ばない出来事を『奇跡』と呼んでいる。これが、まさに神の存在の証明とされているのよ」

「ってことは、つまり……」

「矛盾を指摘しても奇跡と解釈され、一層信念を強めてしまう」

沈黙が流れた。

「本当に厄介なんだな」

「『矛盾なるが故に我信ず』。アインシュタインは『気でも狂わない限り、とてもじゃないが信じられない宗教』と言ったけど、一旦信じてしまうと面々の楊貴妃になってしまうのね」

「確かに厄介だ。だが、キリスト教信者ならばどんなことがあっても絶対に受け入れることのできない矛盾が一つある。そこを突く。そうすれば、奴に反省の機会を与えることだって」

「おい、ちょっと待て、黎明。貴様、何甘いことを言っているんだ」

俺の発言は唐突に遮られた。声の主である東郷さんの表情が険しく歪む。

「今、何て言った。あの鬼に反省の機会を与えるだって？冗談じゃない！奴は今この瞬間にも人を殺し続けている。いわば凶悪犯だ。お前が主張するように、たとえ奴が人間であったとしても、今は罪なき人々を守るための射殺もやむを得ない状況だ」

今なされているこの議論が長引けば長引くほど、刻々と犠牲者は増えていく。方針と対策さえ決まっていたなら、本当ならすぐにも行動を起こさなければならないのだ。必要に迫られて作戦の検討を行っているわけだが、それさえも口惜しい。奥歯を強く噛み締めている東郷さんの心が義憤に打ち震えていることが、ありありと見て取れた。東郷さんは続ける。

「黎明。お前、私に鬼をレッテルづけして人間扱いしないのは不当だとか、そんなことを言ってくれたな。確かにそれも一理ある。だがな、お前はお前で、逆に鬼の肩を持ち過ぎてやしないか。レッテルを貼られている奴が可哀想だからって、そいつらの悪事は全部が全部大目に見るっていうのかよ。それはただ自己満足に浸っているだけだろうが！」

何も言い返せなかった。尤もだ。俺は不当に鬼と扱われている者を守ろうと正義の味方気取りでいた部分があった。それはそれで、ひとつのレッテル貼りじゃないか。自重に耐えきれずカラカラと崩れ落ちたコンクリート塊の残響が、空しくこだました。

「ちょっと待って。みんな重要なことを忘れてる」

水を差したのは結さんだった。

「説得で揺さぶりをかけるのはいい。だけど、今のままじゃ相手は応じない」

この一言で改めて深刻な現実に思い至り、ついに一同から楽天的な雰囲気は消え去った。彼我の実力差が大き過ぎる。余りにも微力な者を相手に、優位に立つ者が会談の場に姿を現すなど極めて稀なのは歴史の証明する所。重苦しい空気を払拭すべく、俺は話を切り出した。

「それについてなんだが、みんな、俺の案を聞いてくれないか」

「おい、黎明。この際はっきりと言っておく。私はお前が嫌いだ」

物陰から、目と鼻の先に佇む神父の様子を窺う。姿を隠しているとはいえ、相手も、もうこちらの動静は把握していることだろう。予断を許さぬ中、嫌というほど喉の乾きを覚えた。

「お前の作戦に乗ってやるのは、お前を信用したからではない。奴を止められる可能性が高いと踏んだからに過ぎん」

「充分だ。そういう人間の方が信頼できる」

俺は歯を見せて笑ってやった。その反応が意外だったのか、東郷さんが固まったように見えた。だが、それも一時的なもので、すぐにその表情が和らぐ。

「それから黎明、東郷さん、では何かと不都合だろう。これからは慈と呼べ」

今度はこっちが不意を突かれた。了解、と親指を突き立ててみせる。男達は分かり合えた。

「私は女だ」

忘れていた。

「隠れているのは二人、ですか。いえ、どうやらあの青年を含めて三人のようですね」

独り言のように発せられた声。冷たい汗が額を伝う。

「はて、確か貴方達は四人組だったはずですが、もう一人はどこへ行かれたのでしょうか？ふふっ。まあ、いいでしょう。私は私の為すべきことを成すだけですから」

神父がナイフを投げる構えを見せた。ナイフを投げさせてはまずい。しかし、その動作を阻む絶妙のタイミングで、慈が神父の眼前に躍り出た。

「待て！その自慢のナイフ、まずは私が味見をしてやろう」

大喝すると慈は腰を落とし、棒を自らの視線に、即ち神父に向けて真っ直ぐに構えた。

「どうした。お前の制球を試してやろうと言っているんだ。早く投げて来いよ、ノーコン」

てっきり慈が突っ込んで来ると思っていたのだろう。神父は慈が現れるや待ち構えたように防御の姿勢をとったが、お互いが専守防衛のまま睨み合う構図に滑稽さを覚えずにはいられなかったようだ。仰々しいほどの失笑を披露してくれた。

「これは、これは。猪突猛進が売りの元気なお嬢さんかと思いきや、さてさて、なかなか頭脳的な立ち回りも見せてくれるんですね。いやはや、参りましたよ」

「なっ、突撃以外能のない、お馬鹿な猪娘だと！？貴様、言うに事欠いてそれか！」

いやいや、そこまで言ってないから。ん、待てよ？言葉の意味的に違いはないような……などと下らないことを吟味している場合ではなかった。神父の辛辣な挑発にもかかわらず、慈はよく耐えてくれていた。それどころか、神父を凝視して逸らすことなく、全身には触れれば斬れるような凄みを纏っている。まるで毘沙門天がのりうつったかのようにだったが、実際はそんなものではない。単なる怨念の塊、それ以外の何物でもなかった。残念だった。

不敵な笑みを浮かべたまま、神父は投擲の動作に入る。そして、これこそが俺たちの狙っていた瞬間。いくら全方位に対し瞬時に反応できる並外れた嗅覚の持ち主とはいえ、自らが狙撃する瞬間には、どうしても目の前の敵に集中せざるを得ない。その一瞬の隙を突くとなれば、同じ狙撃手であり、狙撃の呼吸を熟知する燈以上の役者はないだろう。燈には手袋のまま照準を合わせてもらい、狙撃の直前まで神具には直接触れないようにしてもらっている。難しい注文だったが、先刻の神父の呟きからして、このステルス作戦は功を奏したようだ。細かい手筈は燈に一任している。あとは、首尾よく事が運んでくれるのを願うしかない。

ズガン！拳銃の発射音が響き渡った。だが、それよりもほんの僅か早く神父は動作を止め、後ろを見遣った。その視線の先は、正確に燈の姿を捉えていた。完全に見抜かれていた。神父を狙ったはずの銃弾は、流れるようなナイフ裁きによって、いとも簡単にいなされた。

「がはっ！」

神父の季肋部に炸裂した結さんの両拳。たまらずもんどりを打つ神父。しかし、結さんの追撃は止まない。車輪のように回転しながら飛ばされていく神父に追いすがり、更に打撃を加えるが、敵も然る者。あわやという所で踏みこらえ、正面で結さんの攻撃を防ぎ切った。この咄嗟に発動した類稀なる神父の防衛本能が勝敗を決した。表あれば必ず裏あり。正面で攻撃を受け切った神父の背後は当然ながら無防備。後ろに回り込んだ慈の格好の餌食だった。

「よう、鬼さん。誰が猪だって？」

まだ根に持っていた。弁解の暇も与えられず、振り下ろされる金棒。神父の目論見は、彼の脊椎とともにあえなく粉碎された。

戦いは数、寡勢よりも多勢が有利なのは常識の中の常識だ。しかし、たとえ数が多くても、連携が取れていなければ互いが互いの足を引っ張るだけ。これが初戦の敗因だった。そこで俺は三人に、一人が相手の動きを封じている間に別の者がダメージを与えるという、複数での戦いの基本を教えた。最初の段取りこそ俺が指示したものの、各人がよく目的を理解し、自分の役割を十分に果たしてくれた。たとえ結さんやそれに続く慈の攻撃がかわされたとしても、この基本を忠実に繰り返す限り、こちらの勝利は不動のものだっただろう。ちなみに、ステルスは上手くいけば儲けもの程度の見せ球に過ぎない。ただ、成功したとばかり思い込んでいただけに、燈の位置が看破されていたと知った時には流石に焦ったが。

「なるほど、こいつが言う消えた一人とは結のことか。あの一撃には全く無警戒だったしな」

白目を剥いて泡を吹いている神父を見下ろしながら、納得したように慈が呟いた。

「もしかして結さんも、直前まで神具に触れていなかったのですか？」

「そんなの無理だよ」

結さんは少しだけ肩を竦めてみせた。確かにそうだ。引き鉄を引く時だけ直接神具に触れればよい燈と違い、結さんの籠手は前もって装着しておく必要がある。となれば結論は一つ。終始平常心のまま戦闘に参加することで、結さんは神具に触れていながら、神父に存在を気付かせなかったということだ。いや、ちょっと待て。それってあり得ることなのか？

「おい、黎明。さっさと始めろ。もう一度言うておくが、制限時間は十分。それ以上はコンマ一秒だって待たんぞ」

慈が俺を急かす。そうだ、俺はこれからこの神父の説得にかからなくてはならない。十分。それが俺に与えられた時間だった。鬼の回復力は尋常ではない。普通の人間なら致命傷としか思えない深手を負っても、ものの十分で原状に戻ってしまう。だから鬼の説得など到底許すわけにはいかない。一度はそう強弁した慈だったが、俺が確実に神父を戦闘不能に陥らせる策を立案したことを鑑み、神父が再び反逆の狼煙を上げた場合は直ちに相応の処置をすることを条件に、俺に対話の機会を与えてくれた。十分で完全回復してしまうのなら制限時間は十分未満にしなければならないはずだが、それも承知でギリギリの時間設定をしてくれた慈の人の好きには、素直に感謝しなければなるまい。

神父は息も絶え絶えながら、既に意識が戻っていた。その両側に慈と結さんが仁王立ちになって厳戒態勢をとる中、俺は神父に語り掛けた。

「神父さん。つい先刻のことだが、なぜあんたが人殺しをするのか、その理由を尋ねたのを覚えているよな。その時、あんたは神のお告げがあったからだと答えた。間違いないか」

「ふふ、何を言うかと思えば。ええ、そうですとも。私は直接、神から啓示を受けたのですよ。殺しなさい、生きること自体が無駄な失敗作どもをできるだけ殺しなさい、とね」

「ほう、失敗作ねえ」

これだけ明確に言うておいて、なお根本的な矛盾に気付かないのだから大したものだ。いや、気付かないのではない。気付こうとするのを止めてしまったのだったな、この人は。

「では、もう一つ質問するぞ。神父さん、なぜ、あんたは神に従わなければならないのだ」

可笑しなことを聞く、とでも思ったのだろう。神父はふんと鼻で笑った。

「そんなの、被造物には創造主の命に従う義務がある。これは当然のことかと思いますが」

「いや、当然ではないな」

すかさず俺は畳みかけた。

「つまりだ、ええっと……うーん、生憎、私にはあんたらの倫理観がどんなものか、分かりかねる部分があるからな。何と言ったものか……そうだ、これなら分かるだろう。例えば、旧約聖書に出てくるような悪魔に造られた生物がいたとしよう。ところが、そいつが自らの意思で悪魔に反逆し、神の側についたとする。この場合、創造主の悪魔に逆らうことは悪か？」

「……いいえ、善いことです」

沈黙の後、ぼそりと小さな声で答えた。しかし、今度は神父の方が続けざまに主張する。

「しかし、今の話は創造主が悪魔の場合でしょう？ところが実際の創造主は神なのですから。貴方の言っている例え話には合いませんね。おほほほほほほほほほほ」

こんな頭の悪い発言さえも平気で言っているのだから、益々頭が下がる。例え話の定義すら知らないのか、こいつは。だが、そんなことに構っている暇はない。何しろ時間がないのだ。俺は焦りと苛立ちを抑え、慎重に神父の発言に呼応する。

「そう、それこそあんたが神に仕える本当の理由だ。創造主だからではない、全知全能だからだ。そう信じるからこそ、従えば幸福になれるという確信の下に従っている。そうだろう」

神父の高笑いが止まった。今度は何も応えない。その代わりに、何かを警戒するように眉間に皺を寄せ、じっと俺を見据えてきた。漸く、人間らしい考える顔になってきた。

「神父さん、聖書の神は全知全能の存在であり、かつ完全なる愛の存在であると聞いている。これに間違いはないよな。それでは、これらについて少し検討してみようじゃないか」

流石にこの後の展開を悟ったのだろう。神父は、まるで親の仇でも見るような物凄い形相で俺を睨みつけた。そう、これから俺は、あらゆる矛盾をも奇跡と断じてしまう筋金入りのキリスト教徒であろうと、決して看過できない根本的矛盾にメスを入れようとしているのだ。

「キリスト教では、最後の審判の際、永遠に神の国で暮らせる者と、永遠の責め苦を受ける者とのふり分けされるのだったな。つまり、神に救われる人間と、永遠に救われない人間がいるということだが、これはどういうことなのかな？神には、重い罪を犯した者や悪魔に魅せられた者を救う力が無い、ということか。それならば全知全能ではないな」

「ちっ、違う！決してそういうことでは」

「では、助ける気がない、ということか。それならば完全なる愛の存在ではないな」

一呼吸だけおいて、俺は続ける。

「神父さん、今私が言ったこと、分かったよな。私は、キリスト教の神は無知無能で無慈悲、手前勝手な存在だと言ったんだ。さて、こんなもの意思に従ったところで、幸せになどなれるだろうか？何か反論があれば聞こうか」

神父は黙りこくったまま考えている。それこそ必死だった。恐らく、今神父の頭の中では、あらん限りの聖書の文言やら聖人の言行録やらをひっ掻き回し、何とかして俺の主張を論駁しようと悪戦苦闘しているのだろう。しかし、そのいずれもが神の無知無能性、或いは無慈悲さのどちらかを論証する根拠にしかなり得ない、そんなジレンマに苦しんでいるはずだ。あちらを立てればこちらが立たず。疑問から疑問へと思考がどうどう巡りして、自ら深い混迷に嵌り込んでしまっている。もう、俺からは何も言わない。信念というものは、他人に言われて簡単に覆るものではない。覆る時は、あくまでも自分自身で納得した時だけだ。あとは、この人自身が結論を出すしかない。俺はすぎるような思いで、ひたすら時を待った。

「ヒャーッハッハッハッハ！」

突如発せられた金切り声。その場にいた全員が息をのんだ。絶叫の主である神父を除いて。

「神が全知全能であろうがなかろうが、そんなのどうだっていいんだよ！兎に角、私は特別な存在の声を聞いたの！つまり私は特別な存在！分かる？お前らとは格が違うってことだよ！つまり私は人を殺してもいいの！上位種が下等種ぶっ殺して何が悪いってんだよ！ばっかじゃねえのか？ハッハッハッハッハアッハアッハ」

ああ、また、こうなってしまったのか。

ズキューン！

悲しくこだました銃声とともに、黒衣の男は脱力し、崩れ落ちた。リミットの十分だった。

第七章 結

私たちは私たちの正義の為に、こいつはこいつの正義の為に死力を尽くして戦った。自らの正義を貫いて死んだのだ、こいつも本望だろう。あの時、かつて神父だった物言わぬ屍の前から、いつまでも立ち去ろうとしなかった俺に、慈はそんな言葉を掛けてきた。

果たしてそうなのか。この神父は、これで本当に幸せだったのか。正義は正義でも、それが偽りの正義なら、当然の帰結として本人の願いとは正反対の結末を迎えることになる。どうして、それで満足と言えるだろう。身命を賭して数十年の人生を駆け抜けたその報酬が身の破滅だなんて、割に合わなさ過ぎるじゃないか。哀れ。ただ、それしかない。

「何が正しいかなんて、その人その人の考え方次第だ。他人の信仰をあれこれ言うものじゃない。殊更一つのことを主張するな」。そんなことを言う者に、今までに何人も会ってきた。おかしなことを言うものだ。その人たちは、癌も湿布で治ると主張する医者のがのさばるのも、その人その人の考え方だから善しとするのだろうか。そんなことは絶対に許されないし、許してはならない。間違っただけを信じれば、取り返しのない悲劇が起きる。それは、問題が深くなればなるほど、より深刻な弊害を招く。まして、今問題になっているのは人生の指針。それを「どんなものでもいい」などとは、本来、口が裂けても言えることではない。信念を強制するのは論外だが、検証すら避けるのは、個性の尊重を隠れ蓑にした無責任、無関心以外の何物でもない。まして議論を咎めるなど、無関心を通り越して無慈悲だ。必要なら徹底的に論じ合い、間違いは間違いと明確にしていく。それが誠意ある態度というものだ。

それにしても、人間の信念、宗教とは、余りにも繊細な問題だ。「宗教なんて信じているのは弱い人間だ」などと吹聴する者は、それが世界の九割九分の人間を見下した発言であることをまるで自覚していない。おまけにそんな者ほど、十二月にはクリスマス、大晦日には除夜の鐘、正月には初詣と二股も三股もかける上に、宗教無くしては冠婚葬祭もままならない宗教大好き人間だったりするのだから、愚かな上に我が身知らずの大馬鹿者である。

人間は、何かを信じなければ生きていけない。金さえあればと信じる金の信仰、名誉に固執する名声の信仰、この人だけは裏切らないと信じる愛の信仰、科学の発展こそが人類の幸福と信じる科学の信仰、社会主義の世界を望む共産主義の信仰。特に人は皆、明日の未来を信じて生きている。そういう意味で、人は例外なく何らかの宗教を信じている。その信念の崩壊を絶望と言ひ、人は生きる気力を失い、死をも選ぶのだ。あの神父が最期に見せた、狂気じみた支離滅裂な振る舞いは、自らの信念の誤りを認めた瞬間に間違いなく襲いかかる、激しい絶望と後悔の嵐を恐れたが故の必死の抵抗だったのだ。

宗教の問題は繊細だ。しかし、だからこそ徹底的に吟味しなければならない。しかし。

ここで俺はいつも二の足を踏む。たとえ信念の誤りが見出せても、誤りを指摘しただけでは解決にならない。溺れる者は藁をもすがすが、溺れる者を救うためには藁を取り上げるだけでは駄目なのだ。それでは見殺しにしたのと結果的には何も変わらない。では、救助の船はどこにある？その最も肝心な部分について、他でもない俺自身が全くの無知なのだ。

もしあのとき、神父にその船を指し示すことができたら……。ありもしないifを自問してしまうほど、俺は自分自身に決定的に欠落している何かに煩悶せずにはいられなかった。

「そこまで気に病むことはないって。慈も言ってたけど、本来、即時射殺も仕方ない相手にあれだけの時間と投降のチャンスを与えた。寛大過ぎるほどの最大限の措置だったんだから」

そんな風に燈から慰められる始末だった。引き鉄を引かなければならなかったお前の方が、どれだけ辛かっただろうに。自己嫌悪に耐えられず一人校舎から飛び出し、キャンパス内をぶらぶらしているというわけだった。俺のことを心配してくれた燈の配慮までふいにしてしまうとは、本当に器の小さい人間だ。考えれば考えるほど気が滅入ってしまいそうだった。

そんな鬱屈した気分を和らげてくれる何かを必死で探していたのかもしれない。ふと、カフェテラスでコーヒーを飲みながら読書に耽っている結さんが目に入った。ふらふらと吸い込まれるようにそちらの方へ足が向く。結さんなら、変に俺を気遣ったりしないだろう。今は却ってその方が楽かもしれない。そんなことを考えたのかもしれない。

「こんにちは、結さん。すみませんがここ、座ってもいいですか？」

円形のテーブルに均等に並べられた四脚の椅子。その一つに手を添え、その隣に腰かけていた結さんに話しかけた。結さんは、あの大きな目でじっと俺を見つめていた。それが突然現れた人物に驚いた目なのか、はたまた訝しんでいる目なのか、相変わらず表情からは何も読み取れなかった。が、程なくしてこくと首を縦に動かすと、再び誌面に目を

落とした。どうやら許可を得られたらしい。こちら最低限の礼だけ述べて、どかりと腰を下ろした。

思えば久方ぶりに訪れた静寂の時間。風のざわめきと葉ずれの音の合間から聞こえてくる雑踏やら鳥の囀りやらに、ゆっくりと意識が吸い込まれていく。今この時だけは、俺は一人でいられる。おあつらえ向きのシチュエーションの中で、漂うコーヒーの香りの効用もあってか、張り詰めていた緊張がすっと抜け落ちていった。

何だろう、この食欲をそそるスパイシーな香りは。ああ、カレーか。そういえば腹が減ったなあ。そろそろ食事にしようかな。眼をこすりつつ、俺は首をもたげた。眼前には、ハムスターのように頬をパンパンに膨らませた女性。それとバッチリ目が合ってしまった。それがカレーを口一杯に頬張った結さんと正しく認識するまでに要した時間、約十秒。そのまま、両者とも完全に沈黙。永遠とも思える時間が流れた。そんな訳の分からない見つめ合いは、ハムスターのごくり豪快な一飲みにて漸く解除された。

「起きたね」

「は、はい」

俺の声は裏返っていた。如何に人間が知恵ある思慮深き存在とはいえ、予想外の事態に行き当たってしまった時の反応なんて実に惨めなものだ。今の俺が当にそんな状態で、火薬武器を初めて経験した元寇の鎌倉武士よろしく、普段の結さんのイメージとは余りにもかけ離れた衝撃映像を目の当たりにして、文字通り開いた口が塞がらなかった。本人は歯牙にもかけない様子だったが。よく見ると、結さんの傍らには、既に完食されたカレーの大皿が五枚ほど積み上げられている。このままいつまでも間抜けな顔を晒しているわけにもいかず、意を決し、俺は懐にしまい込もうとした疑問を、敢えて結さんにぶつけてみた。

「あの、結さん。なぜカレーを」

「ん？好きだから」

な、なるほど。カレーがお好きなのですね。事ここに至っては、まさか嗜好ではなく量について本当は尋ねたかったなどと追及できるはずもなく、俺は開きかけた疑問を包み直し、再び懐にしまい込むしかなかった。

「いつの間にか、寝ちゃってたね」

耳をくすぐる優しい声。誘われるままに声の主を見ると、あの大きな目がすっと細くなり、ほんの僅か、口元が緩んでいる。とても柔和な表情。魅せられてしまった。

「あはは、申し訳ありません。突然やって来た上に勝手に寝てしましまして。お恥ずかしい」

綺麗な人だ。寝顔を見られたことよりも、本人を目の前にしながら、そんなことを口走りそうになったことが恥ずかしかった。俺はポリポリポリとハチドリもびっくりの周波数で後頭部を搔く。照れ隠しもいいところだ。だが目を戻すと、結さんはとうにいつものお人形さんに戻っていた。俺はこの日、希少価値という言葉の重みを実感した。

「恥ずかしがることない。とても可愛かった」

ひっくり返ってしまった。思いがけない人から思いがけず、思いも寄らぬ言葉を聞いたのだ。何がですかと聞くまでもない。話の流れからすれば当然、俺の寝顔のことだ。折角収まったばかりだというのに頬がまた熱くなる。おのれ、この恥辱、豈に漱がずにいられようか。

「あの、結さん。折角のご好意に水を差すのは誠に心苦しい限りではありますが、この際、言わせて下さい。男に対して『可愛い』は決して褒め言葉にはならないのですよ」

「あら、そうなの」

存外あっさりとして理解して頂けたようで何よりだ。

「とても興味深いわね。では、疑問その一。なぜ男性に対して『かわいい』は褒め言葉にならないのか、説明してもらえるかしら？」

全然理解してくれていなかった。

「分かりました。少々煩雑になりますが暫くお付き合い下さい。まず、『かわいい』を漢字で表記すると『可愛い』、つまり『愛すべき』となります。『愛づ』は古語で、これが現代語の『かわいい』にあたります。次に用例ですが、『虫愛づる姫君』の古文からも分かりますように、『愛づ』の対象は、話し手にとって明らかに目下のもの、しかも子供や所有物など、百パーセントその庇護下にあるものなのです。ちなみに『愛づ』と『愛する』は同じ愛の字を使いますが、『愛づ』の対象が必ず目下であるのに対し、『愛する』の対象は基本的に対等です。この辺りも個人的には興味深く思うのですが、今は置いておきましょう。ともかく、現代語の『かわいい』の用例を二、三思い浮かべてみて下

さい。やはりその対象は犬や猫にぬいぐるみ、特に人間の場合でも親子兄弟など、極めて親密な関係で、しかも保護監督の責任を持つ者が年少の者に対して使用する例が一般的であることがお分かりになると思います」

「つまり、『可愛い』には相手を自分よりも目下の存在、かつ自分に属するものと見做している、そんなニュアンスが含まれているというわけね」

そう言って結さんは、すらりと通った鼻筋を撫でながら何かを考えていた。恐らく、『かわいい』の用例を思い浮かべているのだろう。やがて納得したようにニコリと微笑んでみせた。

「とても分かり易い説明だったわ。でも、その考察はまた一段と興味深いわね。もし黎君の言う通りだとすると、私を含めて『かわいい』と言われることに喜びを見出している世の女性たちは、無意識のうちに誰かの庇護下に入ることを望んでいる、ということなのかしら？」

「色々五月蠅い団体との関わり合いは御免ですので、コメントは差し控えさせていただきます」

結さんは口元に手を添えてクスクスと笑った。

「分かったわ。これ以上の詮索はしないことにしましょう。それはさておき、考えなしに『かわいい』と言ったのは浅はかでした。この通り謝ります。さて、続いて疑問その二。黎君のお怒りは『かわいい』の定義に関してだったけど、あなたの言葉に対する感覚はとても繊細ね。相当思索を深めているみたいだけど、そこまですることにどんな効用があるのかしら」

和やかな雰囲気のままだが、幾分目つきが鋭くなった。どうやら、こちらが本題のようだ。

「言葉は世界を構築しますからね」

「あら、解体じゃなくて構築なのね。でも、随分と抽象的な表現ね」

「はて、そう聞こえましたか。私としては極めて具体的な物言いをしたつもりなのですが」

一息置いて、俺は続ける。

「言葉の作用は端的に言えば、あることとそれ以外を区別することです。ですから、繊細な言語感覚の習得は、繊細な心的世界の構築と同義なのです。では、言葉の定義が乱れるとどうなるのか。それは心的世界の乱れをもたらしますから、世界の乱れた人間同士、共通認識は望めません。結果として先ほどの私達のように、意図せぬ悪意を互いが受け取ってしまう事態も起きるのです。言葉の乱れは思想の乱れと言われますが、全く正鵠を射ていますね」

「なるほど、余計な情報を与えてしまう危険性も、言語感覚を磨くことで防げるというのね。それでは更に問いましょ。言語感覚を磨けば、それで正しく情報が伝わるのかしら」

やはり、そうくるよな。

「結論から言いましょ。不可能です」

「ふふっ、こっちが拍子抜けするほどの歯切れのよさね。歯切れがいいのはいいけど、一体どこへ話を持っていくつもりなのかしら。では、聞きましょう。黎君、その理由は？」

「理由は言葉の不完全さにあります。言葉はあくまでも区別しかできない相対的な尺度であるため、適切な比較対象がなければ意味をなしません。例えば、蜂蜜を舐めたことのない人に蜂蜜の味を表現して伝えるにはどうすればいいでしょうか。『脳天を貫く強烈な甘味がねっとりどろりと歯や喉に絡みつく』などと説明するのですが、この『強烈』、『甘味』、『ねっとりどろり』という言葉では質感までは分かりません。『ねっとりどろりというのは、餡かけの餡よりも粘度が高いが、水飴よりもサラサラしている』などと仮に比較対象を挙げても、尚解釈には幅があります。このように、まず共通の経験がなければ適切な比較対象が得られず、いくら言葉を尽くしても到底分からないのです。しかも、その経験自体、同じ出来事でも受け取り方は千差万別であることを考えますと、情報の共有は本質的に不可能なのですよ」

一通り説明を聞き終えた結さんは、噛み締めるようにゆっくりと頷いていた。

「誤解は減らせても、心のすれ違いはどうしても起こってしまうのね。難しいものね。自分の思いが直接相手に届いたら辛い思いをすることもないでしょうに。そう思わない？」

「おっと、そういうわけにもいきませんよ」

すかさず俺は否定した。結さんは目を丸くしたが、これはこれで結構楽しんでいるようだ。

「正確に伝わったら、それこそ大変なことになってしまいますよ。例えば、今結さんが考えていることを一つ残らず私が知ることができたとしたら、どうです？」

「あ、それは……。そうね、正しく伝わらない方がいいこともあるわよね」

何を考えていたのか、うっすら頬を染めて目を伏せる結さんは、ちょっぴりかわいかった。

「……今、失礼なことを考えなかった？」

「滅相もない」

不審そうな目でこちらを見る結さん。大丈夫、何も後ろめたいことはない。あれは女性に対しては褒め言葉になるはずだから、多分。そう自分に言い聞かせた。

「複雑ね。人は分かり合いたい欲求に駆られる一方、絶対に知られたくない心を持っている」

「生きていればどうしても、誰にも知られたくない恐ろしいこと、醜いこと、恥ずかしいことを考えます。だって人間ですから。人間の本質的な孤独は言葉云々よりも、案外そこに原因があるのかもしれないね」

気がつくと、周囲が一段と賑わっていた。そろそろ昼時らしい。

「あ、そうだ。忘れていたけど黎君」

思い出したように、やおら身を乗り出して結さんが口を開いた。

「私に対してさん付けはおやめなさい」

「拒否権を行使致します」

「この議案に関して、黎君に発言権はありません」

「常任理事国どころか加盟国であることさえも否定された！？」

「そもそも敗戦国に発言権なんてないわ。大人しく金さえ払ってあげればいいのよ」

「横暴だ！所詮は国際協調の名の下に弱者をいたぶり、国益を貪る利権争いの場でしかないというのか、ここは！これだから国連は嫌いだ！！」

「その反骨心、嫌いじゃないわ。でも黎君、私は大した徳もないくせに先輩面するのもされるのも大嫌いなの。前にも慈から聞いたでしょ？黎君はそんな私のささやかな希望も汲んでくれない酷い人なのかしら？」

「でも結さん、私は徳がある人に敬意を示さないことが大嫌いなのです。結さんはそんな私のささやかな希望も汲んでくれない酷い人なのですか？」

「……私に、そんな徳があるかしら」

「私の分かり難い話を辛抱強く聞いてくれました。その並外れた聞く力は敬意に値します」

俺の言葉に、結さんは可笑しそうに含み笑いをした。

「何て独りよがりな理由なの。意外と強情なのね。しょうがない、ここは年長者の度量を見せて、こちらが折れてあげます。有り難く感謝しなさい」

「それは恐悦至極に存じます」

そうして俺たちはひとしきり笑ったのであった。

「おお、ここにいたのか。駄目元だったが探した甲斐があったぞ」

見知った長身の女が、俺に向かって手を挙げつつ近づいて来た。よく見ると、燈も一緒だ。慈の脇で小さく手を振っている。知り合ってまだ数日しか経っていないはずなのに、こいつらとも気の置けない仲になったものだ。二人に応えるように、俺も軽く右手を挙げた。

「あれ？結ちゃんも一緒だったんだ」

食器の片付けから戻ってきた結さんに気付き、燈は自分が腰かけようとしていた椅子をさっと差し出した。結さんはぺこりとお辞儀をすると、差し出された元々の自分の席に収まった。燈のやつ、ふざけた呼び方をする割には先輩に対する態度はちゃんと心得ているのだな。かくして、俺の右手に結さん、向かいに慈、左手には燈といった面子で一つの円卓を囲んだ。

全員が席に着いた。だがどうしたことか、誰も話し出そうとしない。食事を終えて再び読書に耽る結さんはともかく、慈は腕組みしたままどことなく気難しい顔をしているし、燈はいつものように微笑んでいるものの、それは愛想笑いともとれなくはない微妙なものだった。

「どうしたんだ、何か俺に話があるんじゃないのか？」

堪らず俺から切り出してみた。すると、三人が一斉に俺に目を向けた。その六つの瞳は六つとも、少々の驚きの中にも一様に安堵の色を浮かべていた。それを目にして、はたと俺は気が付いた。そうか、この異様な沈黙の原因は俺だったのか。ここへ来る直前、俺は俺を励まそうとしてくれた燈から逃げ出してきたのだった。そのことは慈の耳にも入っ

ているだろうし、結さんは他にもない、そんな心中穏やかでない俺を目の当たりにしていたのだ。そう、みんな俺のことを心配してここに集まり、下手な物言いをするまいとして何も言い出せなかったのではないか。そんな気遣いに思いが至らず、俺はというと、つい先刻の出来事もすっかり忘れていた。情けない。俺はまたしても、自分の狭量さに恥じ入った。

「よかったよ。黎明君、もう大丈夫なんだね」

自分のことしか考えていなかった俺なのに、燈は温かい笑顔で迎えてくれた。よし、いつまでも沈んでいてはいけない。この優しさに応える為には、態度で表わすのが一番だ。

「応、一眠りしたらすっかり調子も良くなって、頭も冴えわたっちゃったぜ。今ならフェルマーの最終定理だってものの十秒で証明してみせるぞ」

「わお、さっすが皇大のプリンス！」

俺の完全復活を、燈は自分のことのように喜び、パチパチと手を叩くのだった。

「サンキュー、燈。しかし何だ？皇大のプリンスってのは」

「皇大随一の明晰な頭脳にオールマイティな能力、そして貴公子然とした優雅な振る舞いから名付けられた、お前の通名なのだそう。いわゆるニックネームというものだな」

慈は立て板に水を流すが如く、スラスラと解説を加えてくれた。随分と持ち上げ過ぎだが、まさか自分にそんな二つ名が付けられていたとは。知らぬは本人ばかりなりとはこのことか。

「ちなみに、そのニックネーム、私は燈からしか聞いたことがないがな」

「あ、私も」

「そりゃそうだよ。昨日思いついたばかりなんだから」

燈の創作だった。

「大丈夫、これからどんどん広めていく予定だから、心配ご無用！やがて噂は噂を呼び、類は友を呼び、孔明は東南の風を呼ぶ。人から人へ胸から胸へ、口から口へ口移し。やがてはかの長江さえも真っ赤な火炎の海原に変貌すること間違いなしですぞ！」

「お願いします、そんな乱世の奸雄も真っ青な恥ずかしい計略、どうかお止め下さい。この通りです！というか、口移しはあかんやろ！」

わいわいと騒ぎ立てる俺と燈を、慈は愉快そうに眺めていて、結さんは肩を震わせながら必死に笑いを堪えていた。

第八章 西洋哲学概論

「黎明、哲学とは何だ」

唐突だった。その場にいた慈を除く全員が目を点にしている。

「慈、お前は話の順序というものを知らんのか」

「知らん。知っていたとしても私の柄ではない。大体、言いたいことがあるのに包み隠してそれとなく伝えようなどというまどろっこしいやり方は、考えただけでむず痒くなってくる」

「お前、紫式部よりも清少納言の方が好きなタイプだろ」

「おお、よく分かったな。うむ、『春はくらなど、夏はえあぁ』。あの枕草子は実にいい。当時の価値観に縛られず、好きな物は好きだとズバツと言っただけのける所が見事なまでに清々しいではないか。それに引き換え何だ、あの源氏物語は。一言で簡潔に済む所を、だらだらだらだらと無駄に文章を引き延ばしおって。読む気より眠気の方が勝ってしょうがなかったわ」

「苟しくも世界最古とも言われる長編物語文学を虚仮にするとは。それから、お前が読んだという随筆、多分、枕草子じゃないぞ。しかし、それはさほど取り立てるべきことではない。目下の所、私はなぜお前が哲学について聞いたがるのか、それを知る必要がある」

「な、なぜ聞きたいのかって.....そんなの、どうでもいいことじゃないか」

おかしい。明らかに慈は動揺している。要領を得ない俺に、横からそっと燈が耳打ちした。

「慈は昨日の出来事が衝撃だったんだって。ほら、最期一瞬だけだけど、あの牧師さん、いい顔していたでしょ。それで自分も哲学の素養を習得すべく、是非黎明君から聞きたいって」

「こ、こら燈、誤解される物言いは止めろ！私は哲学も今後の戦いに有効と言っただけだ」

「ええ？同じことじゃない」

「同じじゃない！今の言い方では、私が黎明を認めたみたいじゃないか。訂正しろ」

「え、まだ認めてなかったの？自分のことを慈と呼ばせていたから、てっきり」

「あ、あれは作戦上仕方なくなの！別に黎明のことを認めたわけじゃないんだからねっ！」

「おお、慈ったらツンデレだ！」

「ツ、ツンデレとは何だ、ツンデレとは！私がそんな軟弱なものであるはずがなからう。そうだ、断じてない、絶対ないんだからっ！勘違いしないでよねっ！」

狼狽する慈を冷やかすものだから、根が真面目な慈は益々混乱していった。燈、もうそのくらいにしてやれよ。しかし、慈が俺の説得に興味を示したのは歓迎すべきことだ。それは、鬼と呼ばれる者との和解の道を模索し始めたということなのだから。俺は慈に語り始める。

「往々にして哲学には、難解な言い回しで人を煙に巻く言葉遊びといったイメージがある。まあ、実際、そんな哲学者の風上にも置けないような連中が大手を振っていたりするから厄介だが、本来の哲学はそんなものじゃない。その人が人生をどう考えるのか、それが哲学だ。『毎日を堅実に生きよう』、『心から理解しあえる人と出会いたい』、『人生はギャンブルだ』とか、人は皆何かしらの生きる指針を持っているものだろう？それら全てが哲学なのだよ」

「なんだ、そんなものか。それなら私も.....いや、待てよ？今の話だと、人は皆哲学者と言ってもよさそうだ。なのに、とりわけ讃えられている人間がいる。これはどういうことだ？」

「そう、そこが重要なのだ。全ての人は各々生きる指針を持つ。だが、ここで大きな問題が出てくる。果たして、その中で思い描いた通りの人生を歩める者は、何人いるだろうか」

慈は静かに思いを巡らす。そして一つの結論を導き出すのに、そう時間はかからなかった。

「それは難しいことだな。どんなに優れた人間でも不測の事態は避けられないし、時には夢や希望を断念せざるを得ないことも、人生八十年のうちには一度や二度ではないだろう」

「それだけじゃない」

それまで聞き手に回っていた結さんが、口を開いた。

「たとえ望み通りになったとしても、それで満足はできないわ」

「そうだよ。例えば私達ってさ、ついこの間まで、何とか皇大に合格しようと思死だったじゃない。それで合格できた時は嬉しかったけど、その感動も今じゃ何にも残ってないものね。それを思うと、あの地獄のような受験時代の日々

、思い返すたびに空しくなるわ」

燈の相槌に、皆思う所があったのだろう。場の雰囲気は急にしんみりとしてしまった。

「人はどんな喜びにも満足することはできない。それはやがて当たり前になる。一方で、不満は生まれ続ける。じゃあ、どこまで極めたら満足できるのかしら。世界中の富を手に入れたなら？世界中の人から愛されたなら？でも、それが幸せなのかしら」

「難しいね。だってそうなったら、今度はその幸せがいつ崩れてしまうかと、不安で押し潰されそうだし。しかも、そんな幸せさえも日常になってしまう底なしの空しさといったら」

「そうだな。夢は実現すれば空しく、実現しなければ苦痛。かといって、人はそこそこの満足に落ち着くこともできず、苦悩は止まない。それで人は気付くんだよ。人は好き勝手に生きてても、幸せにはなれない。だから考えるんだ。どうすれば自分は心から充実できるのか。しかし、これは考えれば考えるほど混迷を深める。そういう難解な問いなんだ、こいつは」

「なるほど、見えてきたぞ。つまり、哲学者と認められるか否かは、人生について如何に深く考え、有益な情報を私達に提供してくれたのか、そこに懸かっているんだな」

「うむ、その通りだ」

心ゆくまで納得できたのだろう。慈は満足そうに笑みを浮かべた。

「それにしても、黎明もさることながら、結に燈。お前達も、とても素人とは思えんな」

「えへへ、まあ、いろいろとありましたからね」

「そ、いろいろとね」

二人とも、詳しく語ろうとはしなかった。気になる。また後日、じっくりと聞いてみよう。

「おい、黎明。哲学とは存外面白いものだ。さっさと続きを聞かせてくれ」

絵本を読み聞かせると子供がそうするように、慈が目を輝かせて続きを所望してきた。

「すまない、慈。実は、私ができる話はここまでなんだ」

「は！？一体どういうことだよ」

突然の中断に、悲痛な面持ちを隠そうともしない慈。俺は素直に謝った。

「慈、これまで私は、有益な部分は取り入れ、害ある部分は積極的に忘れる、そんな哲学の学び方をしてきたんだ。そんなだから、私の頭の中は古今の哲学を体系的に説明できるようになっていない。人生の指針は最終的には本人が決定すべきもの。私の考証によって磨きあげられた私の哲学体系をそのまま慈に提供したところで、必ずしも有益にはならないのだよ」

神妙な面持ちで聞いていた慈が、確認するように問い返してきた。

「つまり、私自身が考えない限り、一方的にお前の理論を聞いても意味がないということか」

慈は俺の心をよく汲んでくれたが、期待を裏切られて、すっかり意気消沈してしまった。

「そう落ち込むな。幸い、ここには哲学の歴史を踏まえ、分かり易く概説下さる先生がいる」

俺の言葉に一同不思議そうな目をした。中でも仰々しく首を傾げた奴の肩を、ポンと叩く。

「とぼけるな。お前のことだぞ、燈」

「え、えええええっ！私！？」

「他に誰がいるというのだ。ここは哲学科志望のお前しかいないだろ」

突然の指名に、あたふた慌てふためく燈だったが、痺れを切らした俺が一喝すると、

「わ、分かったよ。よし、それではこの不肖観月燈が、慈のために一肌脱ぐとしましょうか！」

やると決まれば、もう乗り乗りだった。俺達もヤンヤンヤと囁きたてる。実のところ、燈の哲学講座を一番楽しみにしていたのは俺かもしれなかった。

「おほん、それでは燈先生が分かり易く解説しますね。そもそも、哲学は東洋哲学と西洋哲学に大別されますが、多くは西洋哲学が話題になるので、今回はこれに焦点を当てましょう」

燈の奴、あれほど混乱していながら、なかなかどうして、講師役もえらく様になっていた。

「さて、西洋哲学は紀元前六世紀頃のギリシアにまで遡ります。ですから、黎明君のリクエストは、約二千六百年にも亘る哲学の歴史を概説せよという、大変無謀なものなのですが、誰も終日語り明かそうなんて思っていませんから安心して下さいね。で、この二千六百年の歴史、実は十九世紀の哲学者ニーチェの『神は死せり』、この一言に収まってしまうのです」

ニコリと微笑む燈の爆弾発言。俺達は漏れなく驚愕の波に包まれた。

「ちょっと待て、燈。今、二千五百年ほどスッ飛ばしちまったぞ!？」

「いいのよ。実際そうなんだから」

燈は綽綽としたものだった。どうやら、奇をてらったわけでもないらしい。

「さて、この有名なニーチェの言葉ですが、後に二十世紀最大の哲学者とも称されるマルティン・ハイデガーは、『ニーチェの言葉〈神は死せり〉』という論文の中で次のように解釈しています。『プラトン哲学以来の、キリスト教も含むヨーロッパ哲学全体の終わり』とね」

説明を続ける燈は、本当に楽しそうだった。こいつには教師の才能があるのかもしれない。こんな先生がいたら、さぞかし授業も楽しいだろうなと、掛け値なしでそう思った。

「キリスト教も含めた西洋哲学には、考え方の違いはあれ、ある共通点があったの。それは、あらゆるものの価値を裏付ける価値、『真』なるものの存在を仮定していたのよ。プラトンならアイデア、アリストテレスなら第一哲学、そしてキリスト教なら神。そしてこの構造は、近代も変わることはありませんでした。理性、科学信仰、共産主義、自由主義、ヒューマニズムなどが従来の神に取って代わって神の座についた、ただそれだけに過ぎなかったのよ」

「待ってくれ。神中心の基本構造に変化がなかったと言うが、確か『我惟う故に我あり』で有名なデカルトは、懐疑主義の方法で人間理性を神から脱却させたと言われてなかったか？」

「ああ、ルネ・デカルトのことね。全く、あんなので懐疑主義なんてよく言えたものね。ちゃんちゃらおかしいわ。はっきり言って、疑い方が不十分よ」

「ま、また痛烈だな。近代哲学の父とも言われる人物に、疑い方が不十分とは」

「あらあら、黎明君は私を疑うの?しょうがない。ま、結構面白い話だし、解説しちゃうか」

口上とは裏腹に、全く迷惑そうに見えない。むしろご機嫌だった。

「さて、デカルトの有名な言説、『我惟う、ゆえに我あり』だけど、一般には、これが神の支配を脱し、世界を人間中心に捉え直した哲学史上の革命とも言われているわね。でもね、面白い……じゃなかった、驚くべきことに、この所謂根本的真理には、重大な欠陥があるのよ」

思わず知らず俺達は引き込まれ、身を乗り出していく。その重大な欠陥とは一体何だ。

「黎明君、『我惟う故に我あり』って、本当に疑い得ない真理かしら。実は、『我惟う』と『ゆえに我あり』。この二つが結びつくためには、ある大前提が必要です。それは何でしょう」

「え?そ、それは……『惟うならば、ある』ということか?」

不意を突かれ戸惑ったが、ご機嫌な燈の様子だと、今ので正解らしい。答えてみて、あっと思い至った。「惟うならば、ある」って本当に自明か?「惟っても、ない」ことはないのか。

「閃いたみたいね。多分、黎明君はこう考えている。『惟っても、存在しない』こともあるんじゃないか、とね」

ご名答。これはもしや読心術かと疑いかけたが、何のことはない。燈の誘導に俺が乗っただけだった。しかし先の指摘は尤もだ。このことにデカルトは何も触れていないのだろうか。

「『惟うならば、ある』。懐疑主義者なら、これも当然疑わなきゃならないわ。デカルトも馬鹿ではなかった。ちゃんとこのことに言及しているのよ。でもね、それが本当に突飛なの」

「もったいぶらずに続けてくれ」

「もう、せっかちな、黎明君。そんなんじゃ女の子にもてないぞ。さて、余計なお世話だと罵声が飛んでくる前に進めちゃいましょう。デカルトはね、『惟うならば、ある』、これは自分が極めて明晰に理解できるから真なのだ、と言っているのよ。ほんと、笑っちゃうわよね」

そう言って、燈は本当に腹を抱えて笑い転げてしまった。しかし、それもむべなるかな。そんな言い分、通用するは

ずもない。例えば幼い男の子は、仮面ライダーが実在すると極めて明晰に理解している。しかし、仮面ライダーは実在しない。また中世ヨーロッパの人々は、大地は平らで不動だと極めて明晰に理解していた。しかし実際は、地球は丸く、回っている。

「燈、それは本当なのか？このままでは『デカルト＝馬鹿』の式が確定してしまいかねんぞ」

「あ、そうよね、やっぱりそう思うわよね。でも、さっき笑っちゃったけど、本当はこれ、とても悲しいお話なの。彼はこう言っているわ。『私達は神から理性を与えられている。だから、私が明晰に理解できることは全部真なのだ』。あの天才が、そんなことを言っているのよ」

それは、人間の愚かさを存分に描いて余りあるものだった。結局、神なのか。この国に生まれ育った俺は、キリスト教とは馴染みが薄い。だから、人として生まれ落ちてよりキリスト教に染まり切った文化の中で成長した人の価値観なんて簡単に分かるものではないが、ここまで理性的な判断を狂わされてしまうものなのかと、そのことが単純に恐ろしいと思った。

「神から逃れるつもりだったデカルトも、結局は神に頼るしかなかったのか」

燈は頷く。

「その通りよ。今までの話は全部、彼の著書『方法序説』に書かれているんだけど、今の黎明君の指摘は『デカルトの循環』と呼ばれる、有名なデカルト最大の矛盾なの。結局、デカルトは何一つ証明できなかったことが、彼自身の言葉で明らかになってしまったというわけ」

「よし、これで納得できた。二千六百年前から、西洋哲学は神の呪縛から逃れられないでいる。で、ニーチェはその神は死んだと宣言した。それはつまり、神をはじめ西洋哲学で真なるものとされていたものは、全て人間が作り出した妄想と断じたわけだな」

「そう。そしてニーチェはこの考察に基づいてニヒリズムの到来を予言したの。所謂神が妄想の産物だと暴露された世界では、社会を構成していたあらゆる価値が崩壊する。当然の帰結として、それまで権威のあったものが引き摺り下ろされ、こき下ろされるようになるわ」

ここで、それまで黙って話を聞いていた慈が深く頷いた。

「分かるなあ。最近がまさにそうじゃないか。真面目や誠実、堅実さといった美德が馬鹿にされ、即物的で刹那的快樂が大手を振るい、皆狂い回っている。そんな退廃的世情のなれの果てときたらどうだ。殺人に愉快犯、覚醒剤に性的倒錯と止まる所がない。もはや病的だ」

憤慨気味な慈の弁に熱がこもる。慈の言葉は昨今の世情を的確に言い得て妙だった。物に不足はないはずなのに、心が渴き切っている。漠然と誰しもが感じている所だろうが、人一倍正義感の強い慈には尚更許し難いものがあるのだろう。呼応するように、燈も大きく頷く。

「そう、まさにそれなのよ、ニーチェの予言したニヒリズムというのは。なぜ今を生きているのか分からず、人間にとって一番大切なことを誰もが見失い、偽りの快樂に流されるままに、ただ死んで行くだけ。そんな人間の姿を永劫回帰と彼は呼んだのだけど、他にもない、今現在のこの世界がニヒリズムそのものなの。ニーチェは生前、『私の思想は百年後に理解されるだろう』と書いていたけど、図らずもその通りになってしまったようね」

全く、とんでもない人物が現れていたものだ。一個人のうちに起きた着想が、こうも悉く的中するなんて。余りの衝撃に言葉を失ってしまう。

「しかし燈、そのニーチェを解釈し得たハイデガーなる人物もまた、とんでもなさそうだな」

「おお、黎明君、ここでハイデガーに目をつけるとは鋭い！」

「いや、鋭いも何も、お前が数分前にしっかり布石していたことじゃないか」

「あらら、そうだったっけ。ああ、そういえばそうだった。言い出した私が忘れていたわ」

屈託なく笑い上げる姿を見るに、本気で忘れていたようだ。本当に大丈夫かと心配になるが、燈は腕をまくり、ちろりと舌舐めずりした。ここからが燈の本領発揮らしかった。

「ハイデガーはね、ニーチェの予言を哲学的に論証したの」

章立てで言うなら新たな展開に入った燈の第一声がそれだった。論証、その言葉に俺は俄然色めき立つ。まさか、あのニヒリズムを論理的に解説できるとでもいうのか。知的好奇心に突き動かされたこの時の俺の双眸は、恐らくは少年のように輝いていたことだろう。

「ハイデガーはその主著『存在と時間』の中で、まず、世界の中に人間が存在しているという、従来の考え方の誤りを

指摘したの。そして緻密な分析の末、人間を『世界内存在』と規定し、世界は私の構成成分の一つであることを明らかにしたのよ。今、私が見ているこの机もお皿も、黎明君たちも、みんな私の一部だということ。ああ、勿論、黎明君の立場から言えば、黎明君が見ているこの私は、あくまでも黎明君の一部、ということになるわね」

「ふむ、それはなかなか面白い見方だ。だが、何だか狐につままれたような話ではある」

「なあ、燈。ハイデガーはどうしてわざわざそう主張するのか、説明してくれないか？」

俺と慈の要求に、燈は快く応えてくれた。

「勿論だよ、慈。例えばね、あそこにバイクが停めてあるじゃない。当然のことだけど、私達には、あれがバイクとして現れているわよね」

「ま、そりゃそうだな」

「じゃあ、考えてみて。ここに急に旧石器時代からタイムスリップして来た人がいたとするでしょ？さて、その人には、あれがバイクとして現れるかしら」

「あ！なるほど」

閃きとともに、感嘆の声が思わず口をついて出た。

「む！？黎明、何か分かったのか？」

「ああ、つまりこういうことだろ？恐らく、旧石器時代の人たちがあれを見ても、あれはバイクにならない。せいぜい、イナゴを象ったオブジェだろうかと推測するのが関の山で、そもそも興味すら抱かないだろう。では、同じ人間なのに、この差はどこからくるのか。それは、私達はバイクは乗って運転するものだという用途を理解しているが、旧石器時代の人たちはそれを知らない。そこにあるのだ」

「正解！大変良くできました」

燈が手を叩いて賞讃した。これはこれで悪い気はしなかった。

「今、黎明君が言ってくれた通りよ。私が言いたかったのは、私の身の回りのものが『ある』とはどういうことかを考えてもらいたかったの。『ある』ものは全て、私にとってそれがどんな意味があるのかが了解されているもの。逆に、私にとって何の意味もなければ、それは生活上『ない』ことと変わらないの。ここまではいいわね？」

燈が一同を見渡す。俺達がよく理解できたことを確かめると、息もつかず燈は喋り出す。

「そこで次に問題になるのは、私にとって意味があるとはどういうことなのかということ。ハイデガーは、それは私の『存在可能性』から導かれることを示したの。『存在可能性』とは、乗る、書く、座る、食べる、歌う、などなど、そういう自分の在り方のことよ。食べる私だからそこに箸があり、書く私だからそこにペンがある。つまり、存在可能性によって、私の身の回りのものは初めて意味をもつというわけ。お分かりかな？」

「なるほど、だからハイデガーの哲学は、実体から関係性へのパラダイムシフトなのか」

「そう、そこがハイデガーの哲学の胆なのよ。私を離れた客観的実体があるという考えは間違い。世界の中で私が生きているのではなく、私が世界を生み出しているのよ。となれば、神は絶対的存在ではない。私の『信じる』という存在可能性によってのみ存在を許された、極めて儂いものなの。あ、当然だけど、信じる私が先で、神の登場はその後よ。これでやっと、こう言えるわけ。神が人を造り出したのではない、人が神を造り出したのだってね」

真っ直ぐ天を指差した燈の姿はなかなか様になっていて、正直、格好良かった。

第九章 燈の定理

更に燈の講義は続いていた。

「こうして漸く哲学は神の呪縛から解放された。でもね、ハイデガーの成果はこれだけじゃなかったのよ。さっき示した通り、存在可能性を通して世界は初めて意味を持つ。ところが、その数ある存在可能性の中でも、人間最後の究極の存在可能性というものがあるの」

人間最後の究極の存在可能性。そんなものがあるのか。歩く、座る、見る、飲む、話す。様々な存在可能性があるが、それらに優劣があるようには思えない。あらゆる存在可能性に勝る存在可能性？あれこれ思い浮かべてみるものの、それが何なのか全く分からなかった。

「あれ？みんな分からないかな。死だよ、死。死ぬということ」

痺れを切らした燈が正解を発表した。しかし、答えを聞いてもまだ俺は釈然としない。結さんも慈も同じらしく、慈などは口を尖らせている。そんな俺達に、燈は解説を加えた。

「聞けば単純なことだよ、黎明君。ほら、今にも死んでしまう人がいるとするでしょ。その時、お金とか家族とか名声とか、その人にとって、そういったものに意味があるかな」

ああ、なるほど。そういえばそうだ。この世のものは例外なく、生きていてこそ価値のあるもの。死んで花実の咲くものかとはよく言ったものだ。ならば、その生という土台が崩れ去る状況においては、それらのものは微塵の意味もなくなってしまうじゃないか。

しかし、何か腑に落ちない。冷静になって考えれば明らか過ぎるほど明らかなことなのに、こう霧のかかったような違和感は何なのだろう。気味の悪い不審が未だ晴れやらぬ。

「死ぬという存在可能性は、あらゆるものの意味を失わせてしまうという特別な性質があるの。人は全ての意味が失われた不気味な世界に、底なしの不安を覚える。つまり、人間は死という存在可能性を備えているが故に、決して不安から逃れることはできない。何をやっても心からの充実感が無く、ただ空しい。そんな空虚感はこちらに原因があるというのよ」

「ちょっと待ってくれ。死はそんなに不安で恐ろしいことか？どうもそうは思えないのだが」

慈が燈の話を遮った。俺も思わず唸る。俺の心を、慈が代弁してくれたのだ。「黎明君も同じ意見？」との燈の問いに、改めて頷き返す。さっきから続く違和感は、きっとその辺りにある。ここは是非とも、燈に解き明かしてもらいたい。燈は、まず慈に向かって問い掛けた。

「慈、死ぬのが恐ろしく思えないということなんだけど、どうしてそう思うの？」

始まりはオーソドックスだった。

「え、だってそうじゃないか。いくら死が悲劇とはいえ、死ぬ時は一瞬。どれだけ延びても数分のうちのことだろ？そう考えれば、何もじたばた騒ぐこともないと思うのだが」

なるほど、そうだ。慈の説に一理ありと、俺も隣で首肯した。燈の問いは続く。

「なるほど、死ぬ時は一瞬か。じゃあ聞くよ。死の苦しみも一瞬だと考えるのはなぜかな？」

何となく勘付いていたが、燈の話しぶりはソクラテスの対話法みたいだ。繰り返し相手に質問を投げ掛けることで思考体系を相互に具体化させ、その矛盾点その他を探り出し、納得へ導く、哲学の王道中の王道だ。やはり、燈は生粋の哲学者なのだと言心していた。

「苦しみが一瞬なのはなぜかって？そりゃあ、死んでしまえば何も無くなるわけだし」

「今、無になるって言ったよね。じゃあ、問うよ。死んだら無になる、その根拠は何かしら？」

燈の瞳が、表情全体がキラキラと輝いた。燈の奴、何かを掴んだな。

ここで俺はふと考えた。そういえば、死んだら無になると証明した人などいないな。まあ、死後どうなるかだなんて、確かめようもないから当然と言えば当然なのだが。では、分からないなりに、人間は死後をどう考えているのだろうか。まず、死後が有るのか無いのかという点で、ほぼ半々に分かれそうだ。四大文明を考えてみても、死後を重視した文明はエジプトとインダス、死後を軽視した文明はメソポタミアに黄河と、丁度二対二に分かれる。現代ではどうか。死後を肯定するのはキリスト教とか神道とか。一方で死後を否定する思想の代表と言えば、共産主義と科学信仰だが。ん、待てよ？この二つの共通点と言ったら……

「だって、死ねば感情や感覚を司る脳が機能しなくなるんだぞ。苦痛も何もないじゃないか」

「分かった！つまり、慈は脳が心を生み出す、と考えているんだね」

脳が心を生み出すという考え方、これを唯脳論と言う。今、慈が主張したのが、まさにそれだった。テレビなどによく出演する、どこぞの大学教授が盛んに宣伝したこともあり、今でも根強く信じている人は多いだろう。この考えによれば、脳が心を生み出すのだから、当然、死んで脳がなくなれば心もなくなる。死の苦痛も一瞬で済むことになる。ただ留意しなければならないのは、これはあくまでも仮説であって、誰も証明はしていないということだ。

さて、この唯脳論だが、唯物論という考えの亜型と言ってもいいだろう。唯物論とは簡単に言えば、この世にあるのはただ物質のみであり、所謂精神も物質の挙動の一つの現れに過ぎないという考え方だ。唯脳論は、唯物論でいう物質を脳で置き換えたに過ぎない。そして、先程俺が考えていた共産主義と科学信仰の共通点。それがまさしく、唯物論の思想だった。

しかし、しかしだ。この話の流れからすると、燈は唯脳論を論破するつもりらしい。いや、そうとしか考えられないではないか。だが、相手は大学教授さえもが声高に唱えた説。それを一介の女子大生が打ち破るなんて、容易に想像できることではない。一体、燈の脳内にどんな秘策があるというのか。予想もつかない展開。固唾を飲んで、俺は成り行きを見守った。

「今、慈が話してくれたのはね、唯脳論っていう考え方なの」

嚙んで含めるが如き燈の解説はそこから始まり、一通りの基本事項が説明されていった。

「その唯脳論ですが、はっきり言って間違った考えです。今からそれを証明してみせますね」

やはりそうきたか。予想していたはずなのに、やっぱり面食らってしまう。さて、いきなり大上段に構えた刀をどう振り下ろすのか。ここに、燈による鮮やかな名解説が始まった。

「まず、唯脳論の要点を分かり易くするためにグラフを描いてみるわね。唯脳論というのは、さっきも言った通り、脳という物質がその人の心を決定するという考え方なの。だから、横軸を脳の物質的同一性、縦軸を心の同一性とおいたならば、こういうことになるわよね」

そう言いつつ、燈は傍らのレポート用紙をひらりと取り上げ、ペンでサラサラとxy座標を描き、そこに右肩上がりの直線を一本引いた。その線の意味は、脳の物質的構造が違えば別人であり、逆に構造が同じなら同一人物になるということ。唯脳論の主張そのものだった。

「では、慈。今からちょっとした思考実験をしてみましょうか」

キラキラ輝く童のような瞳を湛えながら、燈は質問の主である慈を指名した。慈も、いつもとは違う燈の雰囲気を感じ取ったのだろう。口を閉ざしたまま恐る恐る、コクリと頷いた。

「脳は物質でできている。ということは、技術的障壁を度外視すれば、理論的に複製可能よね。では、慈、そんな技術的障壁を乗り越えた未来の科学によって、等身大のあなたのコピーが誕生し、ここに現れました。さて、慈。この人はあなた？それとも別人？どっちかしら」

「.....これは難しい質問だな」

生粋の唯物論者なら、一も二もなく私と即答するところだろうが、慈には何か引っかかる場所があったらしい。暫く考えこんでいたが、出てきた答えは明瞭だった。

「別人だな」

「あら、どうして？脳の構造が同じなのだから、感性も思考も過去の記憶も全く同じなのよ。映画を見ても、昔の友達に再会しても、二人の感動は同じはず。なのに、なぜ別人なの？」

それまでの立場を翻し、唯脳論者の論法で追い詰めようとする燈だが、慈は構わず応えた。

「確かに同じなのだろうな。だが、同じように感動するとは言っても、やっぱり私はコピーの心を直接窺い知ることは出来ない。果たしてそいつは、本当に同じ場面に際して、私と同じ質と深さで感動しているのだろうか。私はそれを外見から推測するしかない。結局、私にとっては、そいつは何を考えているのか分からない、得体の知れない別人でしかないんだ」

「お見事！その通りだよね」

手を叩く燈は、とても満足そうだった。

「では、続けて次の思考実験に行くわね。慈、あなたにも小学生だった頃があったわよね」

燈の言葉にぴくりと反応した慈は、急に慚然とした表情になった。

「今の言い方、何か引っかかるが気のせいかな？どことなく、私にあどけない少女時代があったなんて考えられないとい

ったニュアンスが込められていたような。特に『にも』って辺り」

「こっ、細かいことは気にしないの！」

凶星だったのか。

「全く、日本語って難しいわ。じゃなくて、今大事なのは慈に小学生時代をイメージしてもらうことなの。それで、その時のあなたの脳は、構成成分もシナプスの結合パターンも、今のあなたのはまるで違うわ。さて、慈。小学生の時のあなたは、本当にあなたなのかしら？」

「無論だ」

今度は即答だった。

「少女の頃の私は間違いなく私だ。過去、私は様々な人と関わり、様々なことを学んできた。時には悲しいこともあったし、辛いことだってあった。しかし、紛れもなくその延長に今の私がいるのだ。もし、過去の私が私でないなら、大切な思い出も、今まで築いてきた人との絆も、全て私のものではないことになってしまう。お前達だってそうだ。お前たち一人一人が、過去の私が私であるが故に過去から受け継いだ、私にとってかけがえのない存在なんだ」

畜生、慈のくせに。飾らない慈の真情に触れ、視界が滲みかけたのが少し悔しかった。

「ぐしっ、こ、慈、慈、慈おおおお！」

「ばっ、やめろ、燈！ひゃんっ、って、こらっ、お前、どさくさに紛れてどこ触って、あ、だ、だめ、そこは駄目だつってんだろ、って、あ、いや、あ、ああ、ああ〜ん」

凄まじいことになっていた。くんずほぐれつ、あられもない醜態を晒す美女二人。できることなら、この耽美な光景でいつまでも眼福を肥やしていたかった。だが、結さんの冷たい視線に射抜かれてしまっては膝を屈するしかない。俺は泣く泣く二人を引き剥がした。

「.....大変お騒がせ致しました」

正気に戻った燈が、恥じ入った面持ちで深々と頭を下げた。

「ま、まあ、燈も悪気があったわけじゃなし、ここは不問にしておく。こっ、今回だけだぞ」

こちらも頬を赤らめつつ、耳の後ろ辺りをポリポリと搔く慈だった。

「それで、燈。さっきの話の続きだけど」

「はっ！そ、そうだ。私は唯脳論を論破している最中だったんだ」

結さんに促されるまで、すっかり頭から抜け落ちていたようだった。

「おほん、不測の事態が起きてしまいましたが、話を続けます。とは言っても、ほぼ九割方終わっているんだけどね。さて、まとめるわよ。まず、たとえ完全に自分と同じ脳を持つコピーがいたとしても、それは別人であるということが分かったのよね。つまり、こうなる」

燈は、先ほどの騒動で皺くちゃになってしまったグラフ上の右下に点を打った。

「次に、現在の脳とは似ても似つかぬ脳を持っていたはずの幼少期の自分であっても、間違いなくそれは自分自身であることが分かった。ということは、こうなる」

今度はグラフの左上に点を打った。そのままずっと線を引き、先ほどの点とつなぎ合わせる。グラフ上には、予め引いてあった右肩上がりの直線と、今引かれた右肩下がりの直線とで、大きなXが描かれていた。刹那、俺の脳裏に衝撃が走った。

「こっ、これは！？」

「そう、両者が無関係であることを示すグラフよ。始めに引いた直線は唯脳論の理論そのものだった。そして、今引いた直線は実際を表す。つまり、唯脳論と現実とは無関係ということが、ここで示されたというわけ。これにて証明終了。ね、単純明快気分爽快でしょ」

「す、凄えええ！！」

やりやがった。一介の女子大生が、あの唯脳論を論破してしまったのだ。衝撃と感動のあまり、体裁などお構いなく、俺は感嘆の声を上げた。

「そもそも、このXを描く証明方法は、とある大脳の機能局在論の証明にも使われたことのある手法でね、ここには脳科学の手法を使って唯脳論を破ったという面白さが」

「いや、そんなことどうでもいい。それより燈、この証明は、お前のオリジナルなのか？」

「む、折角の蘊蓄をどうでもいいとは失敬ね。でも気分がいいから許してあげる。そうね、私のオリジナルと言えるのは、このXにまとめた所だけね。それ以外はよく聞くネタよ」

「まとめただけって、そこが一番肝心な所じゃないか。コピーの話とかも確かに面白いが、やはり証明の美しさとは比較にならない。燈、お前、本当に凄いよ！感動した。まさか、あの唯脳論がこうも鮮やかに破られるとは。ああ、もう何と言ったらいいのか。本当に凄い！」

興奮は冷めやらず、俺は馬鹿の一つ覚えみたいに凄い凄いと連呼するしかなかった。

「はっはっは。そんなに凄いかね。それでは、そんな凄い証明を披露した私に敬意を表し、これを『燈の定理』とでも名付けたまへ」

美しい女性の名を冠する美しい証明というわけか。ああ、何だかいいな。完全に呆けてしまった俺を余所に、おほん、と結さんが咳払いをした。

「で、どうして唯脳論を論破していたんだっけ？」

「ああ、そうそう。本題を忘れるところだった。確か、人間の究極の存在可能性は死であるというハイデガーの哲学が、みんなには少し腑に落ちなかったんだよね。それは、死がそんなに恐いとは思えなかったからだけど、どうやらその主張の根っこには唯脳論があった。だから、それを破ってみたんだよ。どうかな、慈。ハイデガーの主張は理解できそう？」

「え、ああそうか。私は脳が死ねば心もなくなるという前提で、死の苦しみも一瞬だと考えていたんだよな。でも、脳と心は独立なのだから……ん？私は、死んだら一体どうなるんだ」

「そう、そこなのよ。人はともすると、死の覚悟くらいとうにできている気になってしまう。けど、それはまだ死を遙か遠くに眺めているの。本気になって考えると、死について全く無知な自分が嫌というほど知らされるわ。手掛りも何もない暗黒の世界に飛び込んでいくのは、とても不安で恐ろしいこと。でも、その死が、何人にも避けられない人生の終着点なのよ」

テーブルに置いてあったグレープジュースを一口飲んで喉を潤し、燈は話を続ける。

「ハイデガーは、この死という存在可能性を特に重視して、人間のことを『死への存在』とも呼んでいるわ。だからハイデガーの哲学の結論はね、この不安から逃れる為には、根本的に死の不安に繋がれた世界を脱却するしかない、ということになるの。仏教の言葉を借りれば、解脱、出離、或いは後生の一大事の解決ということになるのかしらね」

死の不安につながれた世界、後生の一大事からの脱却か。また途方もない結論だ。だが、少なくともそれができなければ、真実に辿り着くことなど不可能だろうな。

真実、か。長らく胸中に浮かぶことのなかった響きに、在りし日の記憶が呼び起こされた。

「ねえ、黎明君」

決して楽しいとは言えない思い出に浸りかけた意識が、燈の呼びかけで今に引き戻された。

「黎明君はどう思う？そんな世界ってあるのかな？あるとしたらどんな世界かな？」

そんな世界、不安と恐れから離れ出た世界、真実の世界。どうしてだろう、なぜか重苦しい気分になってくる。どうしてそうなるのか、全く心当たりが無いわけではなかった。

「ま、今の俺には分からないし、そもそも、そんなものがあるのかどうか」

「ふうん」

その場凌ぎの返答にがっかりとでも言いたげな顔だったが、何を思ったか、そのまま燈はじっと俺の目を見つめていた。その視線がどうも気になりだした頃、くすつと燈が笑った。

「全く、黎明君ったら嘘ばかり」

嘘ばかり。どういうわけか、その言葉が暫く頭から離れなかった。



第十章 命

プラズマ画面から流れるお昼のニュースは、ここ数日帝都内で散発している、ミイラ化した若年男性の連続死体遺棄事件を報じていた。急激に体内の水分を失ったように見受けられる死体。その奇怪な手口にもかかわらず、目撃情報もなく動機も不明で、捜査は難航しているようだ。警察は一層警戒を強めているらしい。物騒な世の中になってきたものだ。今こそ世界一平和な国と言われているが、その安全神話も明日には崩れ去っているかもしれない。

先月までワイドショーを賑わせた通り魔事件といい、世情不安は確実に深まりを見せている。そんな中、政府では、昨年の世界的金融危機の後処理もままならぬ中、政権交代のゴタゴタ劇で新たに与党となった市民党が、国民の無関心をいいことに党則レベルで着々と独裁化の準備を進めていた。政府発表の取材も大手メディア数社に限るなど、あからさまな情報操作まで横行している。政治屋たちが政局に右往左往する間に、海外では米中同盟が成立。あんな経済も社会体制も行き詰った国との同盟に何のメリットがあるとの疑問もあるが、佞言ばかりで約束も守れぬ首相の為に信用の失墜した我が国も、人のことを言えないのが悲しい。世界の帝国外しの流れは、人目を忍びつつゆっくりと、しかし確実に進行しつつあった。

そんな危機を危機とも思わず、人々は相変わらず己の欲望を満たす為だけに、あくせくと今日も走り回っていた。自分を最優先に考えるのは結構だが、かといって関心のないこと全てを他人任せにしては、明日にもそんな生活はできなくなるかもしれないというのに。

世界の歴史を振り返ると、凡そ爛熟期に至った文明は退廃的風潮を好む傾向にある。その点、この国もそれだけ繁栄したと言えるわけだ。しかし、そんな倒錯に手を染め出すと、得てして崩壊の時を迎えるもの。平安末期、室町中期、江戸末期、大正時代。そして、現代。

「でも、そういう混乱期って文化の洗練期でもあるわ」

空の食器に目を落としたまま結さんが呟いた。

「平安末期、室町中期、江戸末期。いずれもその後に大きな影響を及ぼす、思想的、文化的変革が起きているわよね。そう考えれば、今の混迷もそう憂慮することではないのかも」

「結さん、案外楽天主家ですね。いや、この場合は他人事と言った方が適当か」

「あら、どういうこと？」

「文化の洗練は、待っていても実現しないということです。文化の担い手はあくまでも人間ですから。過去の混迷期にも、親鸞や世阿弥、千利休に西郷隆盛といった、実力を備えた一握りの天才が現れたからこそ、思想や文化が大成され、新たな境地が開拓されたのですよ」

「なるほど、そう言われてみれば、同じ混乱期といっても大正期には天才らしい天才って現れなかったわよね。だから、この帝国が自己主張のできないまま欧米その他のいいようにされて現在に至っているのは。私たち凡人には辛いものね、英雄不在の混乱って」

「結さん、案外毒舌家ですね」

「で、そんな天下国家を憂える黎君は、今日も今日とてどうしてここに来ているのかしら」

カレーを頬張りつつ、結さんがちらりと俺に視線を投げかけた。

「いや、何というか、結さんの近くにいと落ち着くというか、安心するというか」

「安心する？」

「結さん、無駄な干渉はしてこないから」

俺の言葉に、結さんは更にぶくっと頬を膨らませた。

「黎君。今、凄く失礼なことを言ったの、自覚している？」

確かに。今の言い方だと、居ても居なくても同じだと言うのと変わらないじゃないか。

「ですよね、言ってから気付きました。すみません」

「全く……」

再びカレーに没頭し始めた。怒っているのかいないのか、今一つよく分からなかった。

「ん、そう言えば黎君は食べないの？もうお昼なのに」

「もう食べたじゃないですか。しかも、食べ始めは結さんと同じ時間でしたよ」

「ああ、あの唐辛子粉末山盛り追加の赤門ラーメンか。辛そう、人間の味覚とは思えないわ」

「カレー七皿完食して何を仰る。結さんの胃袋が人のものかどうかがよっぽど疑わしいです」

呆れついでに辺りを見渡すと、いつもと違う光景に今更のように気付いた。学ランにブレザー、セーラー服など、どこからどう見ても高校生な人たちが、食堂の大半を占めていた。

「今日、皇大のオープンキャンパスの日」

狐につままれたような顔の俺の不審を汲み取り、結さんが解説してくれた。そういえば、そんな情報が掲示板に貼り出されていたような記憶がある。

「なるほど、今日がその日だったのか」

「終に行く道とはかねて聞きしかど 昨日今日とは思はざりしを」

「ふむ、伊勢物語のラストを飾る業平の歌ですね。本当に今日がその日だとは思いませんでした……って、結さん。何巧いことを言ったかのような顔をしているんですか！それじゃ私が今日死んでしまうことになるでしょ!？」

「おお、分かった？」

「分かるわい！そのくらい」

ベタなノリ突っ込みだったが、結さんはコロコロ笑った。ま、それも束の間で、今は見事に元通りなのだが。こんなに可愛らしい一面を持っているのに勿体ないなと思ってしまう。

「それにしても、天下の皇大がオープンキャンパスとは。そんなの、学生不足に悩む私立大学のやることだとばかり思っていました」

「子供はイメージに惑わされ易いから」

成程。現在はプレゼンテーションの時代、どれだけ魅力的なPRをするかが人や金の流れを大きく左右する。一方で実質を伴わない誇大広告も問題となっており、真偽のほどを見極めるのが困難な世の中だ。だからこそ、足を運んで自分の目で確かめ、自らの頭で考える基本的な手続きが益々重要になってきている。マスコミの恣意的なキャンペーンで良心的な内閣が総辞職に追い込まれるご時世、勉強漬けで情報も限られる高校生なら尚更危ういということか。折角皇大に入る能力がありながら、キャッチーな広告に釣られて流されるよりは

「虎の子を一般公開して格の違いを見せつける、というわけですか。受け取りようによっては嫌らしいが、正確な情報を提供するという意味では、理に適っていますね」

他と比較にならぬ皇大の充実した設備その他は、受験生に一目で衝撃を与えることだろう。

「でも、大学を出たからどうなるってものでもないんだけどね。本質的に」

勿論、高学歴は有利なんだけど。そう付け加えると、早くも八皿目のカレーを平らげた結さんは、几帳面にもスプーンを盆の上に真っ直ぐに置き、ごちそうさまの合掌をする。そしてさっさと片付けに行ってしまった。ああ、そうか。この人も、俺と同じなんだ。

「おお、二人ともここにいたのか。駄目元だったが、探した甲斐があったぞ」

見知った長身の女が、俺達に向かって手を挙げつつ近づいて来た。よく見ると、燈も一緒だ。慈の脇で小さく手を振っていた。二人に伝えるように、俺も右手を挙げて見せた。

「あれ、結ちゃんも一緒だったんだ……って、ん？何だろう。以前にもこれと同じ場面に出くわしたような。これってデジャヴ？日本語に直すと既視感？」

「先週あっただろう。ほら、お前が『燈の定理』を講演してくれた、あの時」

「ああ、そっか。いやあ、歴史は繰り返すって言うけど本当だね。ということは、私達は今、その貴重な歴史の証人になったのね」

はっきり言って、どうでもいい歴史だった。

「あ、あのお、東郷せんぱい」

その何かを訴えるような、すぎるような声。慈の背後にくっついて見慣れぬ人影に気付いた。身に着けたセーラー服からして高校生であることは間違いなさそうだ。元々小柄なのだろうが、女性にしては大柄な慈の陰に隠れているためか余計に小さく見えた。

「あ、すまない。忘れていた」

「ふ、ふええ、そんなあ」

眼鏡の向こうでうるうる瞳を潤ませていた。

「あああ、泣かせたな」

「黎明、お前、何小学生みたいなことを。言葉遣いには気をつけないと人格を疑われるぞ」

.....今後、慈の発言の一切は、録音して後世まで残しておくことにしよう。

何はともあれ、新たに登場した女子高生に、俺たちは興味津々だった。それを察したのか、女の子をなだめていた慈が、今度はその子を俺達の方に向き直らせた。

「突然ですまんが、こいつは私の知り合いなんだ。昼食、この子も一緒にさせてくれないか」

一斉に向けられた視線に怖気づいたのか、女の子はびくっと肩を震わせ、すぐさまぺこりと勢いよくお辞儀した。眼鏡がずり落ちそうだったが、腰から折れる綺麗なフォームだった。

「そうか、慈の知り合いなのか。君も大変だなあ」

後ろから思いっきり殴られた。神具は使っていないはずなのに、洒落に無く痛かった。

「さあて、馬鹿は放っておいて、命、自己紹介しな」

それは言葉のブーメランだと突っ込みたいところだったが、すぐ暴力に訴える野蛮人に無用な挑発を仕掛けるほど愚かではなかった俺は、目下優先されるべき事はこのお嬢さんとの親睦を深めることであるとの理性的判断の下、黙って彼女の言葉に耳を傾けることにした。

「あ、あのっ、お初にお目にかかります！私、葦原命と申します。考える葦の葦と、原っぱの原に、いのちと書いてみことと読みますっ。ど、どうぞ宜しくお願い致しませうっ！」

滅茶苦茶緊張していた。

「ねえねえ、命ちゃん。命ちゃんも皇大志望なの？」

燈が弾んだ明るい声で語り掛けた。流石は燈。今の一言で葦原さんはすっかり警戒心が解けている。葦原さんはおずおずとした口調ながら、はっきりと受け答えしていた。

「は、はい。できることならここに進学できたらいいなと思っています。でも.....」

口をつぐんでしまった。どうやら希望はあるものの、成績が芳しくないみたいだ。

「苦手な教科でもあるのかな？何なら私達が相談に乗るよ。特にこっちのお兄さん、皇大のプリンスの異名を持つ、とても頭がいい人なの。いいアドバイスとかもらえちゃうかもよ？」

お茶を噴いてしまった。燈の奴、忘れかけていたあの赤壁計画を本気で実行に移すつもりか。慌てる俺を、慈は面白そうにニヤニヤ見ているだけだし、結さんはまたも肩を震わせて笑いを堪えていた。ああ、葦原さんの目にキラキラ光が灯り始めたじゃないか。その千古の闇室に一筋の光明を見出したかのような真っ直ぐな瞳が、痛く心に突き刺さる。ここまで期待を持たせながら、無責任なことを言って繊細な受験生の心に一生ものの傷を負わせてしまったらどうする！？燈め、覚えている。無茶振りの代償は高いものと思い知らせてやる。

「え、えっと、葦原さん？葦原さんには苦手な科目があるのかな？」

引き攣りそうになりながらも、慣れない笑顔を何とかこしらえ話し掛けてみた。葦原さんは、まるで触れれば弾けそうなシャボン玉のようで、俺は薄氷を踏むような心境だった。

「あ、はい。私、理系なんですけど、お恥ずかしながら物理が苦手です.....」

極度に失敗を恐れる情けない俺に、葦原さんは包み隠さず、でも本当に顔を真っ赤にしながら答えてくれた。本気で恥ずかしいことだと思っているのだな。正直、可哀想だった。

「苦手と言っても色々あるだろう？公式が煩雑で覚えられないとか、そもそも教科書に何が書いてあるか分からないとか。できれば具体的に教えてくれないかな」

「あ、そういうことはないです。学校の試験も結構できますし、センター試験くらいなら問題ありません。でも、皇大模試になっちゃうと駄目なんです。その.....十点とか、八点とか」

段々で見えてきた。センターなら解けるが、皇大模試だと解けなくなる、か。センターと皇大模試の違い、それは物理的な発想を要求されるか否かだ。センターなら、実は使うべき公式がそれとなく分かるように問題が書かれており、ある程度学力があれば解答は簡単だ。しかし、皇大本試はそうはいかない。まず、問題文を一読しただけでは何を問われているのかがすぐには分からない。精読し、問われた内容を明確にイメージする必要がある。その際、物理的な概念に穴があると、どこかで考えが行き詰まり、混乱する。昔の俺がそうだった。

「私、参考書の解説とかいくら読んでも分からないので、先生や物理の良くできる友達とかに聞いたりするんです。でも、質問したら『普段から自然を観察してないから分からないんだ』って言われるだけで.....この前も、ばねの運動の問題が分からなくて友達に聞いてみたんですが、そしたら、いきなり『ばねってこういう動きをするものでしょ』っ

と言うんです。それで私が、どうしてそう動くと分かるの？って聞いたら、変な顔されて、それっきり……」

言葉がもう途切れ途切れになって、所々震えていた。自然を観察していないから分からない、か。あの特殊な物理の概念を、当然のように最初から受け入れられる奴もいるからな。悪気はないのだろうが、全く説明になっていない。俺は葦原さんにはっきりと言ってやった。

「葦原さん、自然を観察していないから物理が分からないというのは、嘘だ」

涙目になっていた葦原さんが、え！？と、さも意外だと言わんばかりに目を見開いた。

「葦原さんは、ガリレオ・ガリレイは知っているかな？」

「は、はい。確か、十六世紀から十七世紀にかけてイタリアで活躍した、近代科学の先駆者です。ピサの斜塔での振り子の等時性の発見や落下実験とかのエピソードで有名なように、克明な実験と自然現象の数学的記述に取り組んだことで知られていたと思います」

「流石、よく知っているな。あのピサの斜塔の実験は後の創作らしいが、その徹底的な自然観察で有名なガリレイさんが、『天文対話』という本の中で、潮汐論なる説を述べている。それによると、潮の満ち引きは、地球の回転運動に海水が置いていかれたり追いついたりする現象で、地球の自転の証明になるとのことなのだが、葦原さんはこれをどう思うかな？」

葦原さんはおでこにちょこんと指を当てて、暫く考えていた。何度も頭の中で検証してみたのだろう。数分経って、静かに、しかしはっきりとした口調で言った。

「その説はおかしいと思います」

「ほう、そう思った理由を聞かせてもらえるかな？」

「えっと、その潮汐論は、地球の回転運動によって海水の水平運動が起きるというものですよね？でも、地球と海水は同一の加速度系。慣性力は加速度と逆向きにしか働きません。地表は等速円運動をしていますから、その加速度の向きは赤道上なら地球の中心。つまり、慣性力の向きが海水の運動方向に対して垂直なんです。これで海水が動くはずがありません」

「その通り！よくできました」

ホッと胸を撫で下ろした葦原さんは、パチパチと手を叩く俺にはにかんでみせた。

「今、葦原さんが説明してくれたのは相対性原理という、物理学では重要な概念だ。これは基本中の基本だから、現代なら高校生だってガリレイみたいなミスはしないだろう。ところで、この相対性原理を最初に明確に提示したのは誰だと思う？他ならぬ、ガリレイなんだよ」

「ええっ！？それじゃ、ガリレイは自分の説を自分で無視しちゃってたってことですか！？」

「そういうこと。でも洗濯機を観察すると、確かにドラムの回転についていけず水は取り残される。これが地球の常識だ。ガリレイはその卓越した観察眼が仇となって、相対性原理の検討以前に、思わず波の運動にもその常識を持ち込んでしまったのかもしれないな。いくら自然を観察しても、それで物理を解けるようになるわけじゃないことがよく分かるだろ？」

「は、はい！よく分かりました！！」

「ついでに言うと、古典力学の生みの親、ニュートン。彼が著した『プリンキピア』という有名な書物があるが、そこに書かれている抵抗のある物体の運動についての記述は、殆どが間違いだったことが明らかになっている。頭さえ良ければ物理が分かるというのも間違いだ」

「ちょっと待ってよ。抵抗のある運動なんて、受験物理の山中の山じゃない！？」

理系の先輩である燈が口を挟んできた。

「その通り。だから敢えて断言しよう。ニュートンに皇大入試の物理の問題は解けないと！」

「か、かっこいい」

葦原さんの口から漏れ出た一言は俺の琴線に触れ、えもいわれぬ響きをもたらした。

「おやおや、命はすっかり黎明に籠絡されちゃったらしいな。いつの間にか尊敬の眼差しになっているぜ。いや、こいつはひょっとすると、恋する乙女の眼差しかな？」

「そ、そんなことないです！と、東郷先輩、変なこと言わないで下さいよ！」

からかい甲斐のある後輩の反応にカラカラと笑う慈の傍らで、真っ赤になってじたばたする葦原さんの動きが小動物っぽくて、見ているだけで何だか癒されてきた。

「黎君、講義はもうおしまい？まだ皇大物理を解く方法は説明されていないみたいけど」

おっと、誤魔化されていない人がちゃんといた。

「よし、それでは葦原さん。いよいよ物理学が驚くほどよく分かるコツを伝授して進ぜよう」

「は、はい。お願いします！」

息を凝らして、葦原さんは次の言葉を今か今かと待ち構えていた。徐に俺は言葉を続ける。

「心得その一、物理はフィクションと心得よ」

「は、フィクション……ですか？」

「そう、物理とはフィクションだ、架空だ、作り話だ、嘘っぱちだ」

「ひええ。そんなこと言っているんですかあ！？」

混乱する葦原さんの脇で大きなくしゃみをした奴がいたが、敢えて触れないでおこう。

「いいんだよ。そもそも、物理は地球上の現象を書き表したものではない。物理学が扱う世界は、あくまでも物理学者が立てた仮説の上に構築されたもの。だから、全く異世界のお伽話だと思うくらいが丁度いいんだ。そこに地球の常識を持ち込んだりするから、却って訳が分からなくなる。一旦地球から離れて割り切る心得がまず必要なのだよ。そういう目で、今度問題を解いてごらん。今まで分からなかった所がスラスラ分かるようになるはずだから」

葦原さんの目は、すっかりと輝きを取り戻していた。私はもっと頑張れる、そんな希望を抱いてくれたとしたら仕上げは上々だ。大役を果たせた俺は、心地よい疲労感に浸っていた。

「はっはっは、物理がフィクション？聞くまでもない。あんな計算式で世界が分かってたまるか。ま、私はそんなの一笑で見破っていたからな。端から理系なんて選択肢はなかったぜ」

物理学の意義さえ理解できていない、残念な先輩がいた。

「あ、あの、黎明先輩。き、今日はお忙しい所を、私なんかの為にご講義下さいまして、本当に有難うございました。何だか、私にもできるんじゃないかって気がしてきました。そ、それで、なのですが、も、もしもですが、もしお邪魔じゃありませんでしたら、また分からないことが出てきたら質問とかさせてもらっても……あ、すみません、すみません、すみません！私ったら少し優しくして頂いただけで、何て図々しくて身勝手なことを……」

丁寧で礼儀正しい振る舞いと言葉遣いだった。だが、敢えて言えば、気持ち悪い。

「葦原さん」

「は、はいっ」

急に低い声で話しかけたからだろう。葦原さんはびくっと肩をすくませた。

「今、自分を『私なんか』と言ったか。『図々しい』と言ったか。『身勝手』と言ったか」

「は、はい。あの……それが、何か」

「それは自虐と言う。私はそんな言い草は嫌いだ」

「ひゃんっ」

叱られるとでも思ったのか、葦原さんは反射的に、ぶたれないようにと両手で自分の頭をかばった。この反応には悲しい気持ちにさせられたが、構わず続けることにした。

「自分を貶めるのは良くない。それから、分からないことは恥ずかしいことじゃない、当然のことだ。だから質問も当然だし、聞いても分からなければ、それは答えた者の説明が悪かったからだ。葦原さんなら、それくらいの自信を持っていいんだぞ。大丈夫、葦原さんなら皇大に入れるさ。皇大生なら優秀とは言えないが、優秀な奴なら皇大には受かる。そうだ、合格の暁には思いっきり歓迎してやろう。残り数か月、悔いのないようしっかり頑張れ」

予想外の展開に呆然とする葦原さんの瞳が、じわりと滲んだ。そして何も言わないままコクコクと頷いていたが、感極まったのか、堰を切ったように泣き出してしまった。どうなることかと身構えていた燈達も、ほっと胸を撫で下ろし、安堵の表情を浮かべるのだった。

その後の展開は、ハッキリ言って最悪だった。一件落着かと思った所へ、空気を読めないことに定評のある皐月祭実行委員の連中が雪崩れ込んできたのだ。奴らは只の学生に過ぎなくせに、緑の腕章を笠に着た鷹揚な態度で有名で、噂に寄れば、今年は特にそれが顕著らしかった。己に大した価値もないくせに権威を振りかざしては人を見下す、最低な皇大生の典型である彼らは、俺を無垢な女子高生に乱暴を働いた危険人物と決めつけ、委員会への同行を求めてきた。普段からろくなことを考えない連中は、流石に発想も違うなと感心したが、人格を侮辱されて黙って引き下がるわけがない。牙を剥いて掴みかかろうとしたが、慈と結さんと、そして葦原さんまでもが、三人がかりで引きとめた。動きを封じられて尚も連中を睨みつける俺をなだめながら、連中にやんわりと、しかし断固として同行を拒否した燈の巧みな交渉のお陰で俺は冤罪を逃れることができたわけだが、気掛かりなのは葦原さんだ。希望を抱いて皇大見学に来たはずなのに、よりによって皇大の一番汚い部分を目の当たりにしてしまったのだから、いくら情に無関心な俺でも責任を感じてしまうというものだ。

「あ、黎明先輩！」

噂をすれば影が差す。聞き覚えのある元気な声が聞こえてきた。見ると、セーラー服の少女がとことことこちらへ駆け寄って来ていた。

「おはようございます、黎明先輩。これから大学ですか？」

「残念、今日は土曜日だから大学は休みなのだ」

「あ、そうか、そういえばそうですよね。すみません、私ったら自分が学校あるからって人も同じだと思い込んでしまっただけ。これじゃあ心理学的には五歳児と変わりませんね。えへへ」

葦原さんは自分の頭をポカリと叩いておどけてみせた。自虐は微塵も感じられない。あの時の葦原さんからは考えられない、大変な進歩だった。

「あ、そうだ。黎明先輩、あの日のレクチャー以来、物理がもの凄くよく分かるようになったんですよ。来週、早速皇大模試があるんですけど、今度はいい点が取れそうです」

「ほう、たったあれだけのヒントで、そこまで分かるようになったのか」

間違い無い、葦原さんは天才の部類に入る逸材だ。来年の四月には、晴れやかな顔で赤門をくぐっていることだろう。

「期待しているよ、葦原さん。ああ、それから……この間はすまなかったな」

謝る俺にきょとんとする葦原さんだったが、ああ、あのことですか、と思い当たった顔をすると、くすくすと笑うのだった。

「何を謝っているのですか？先輩も仰っていたじゃないですか。『皇大生だからって優秀とは言えない』って。最初は一体どういうことだろうと思っていましたが、あの人たちを見て納得しました。私、流石は先輩、嘘は言わないなって感心したんですよ。ということは先輩、私が皇大に合格したら皆さんで歓迎してくれる、あれも間違い無いってことですよ？」

全く杞憂だったようだ。泣き虫の印象があったが、なかなかどうして、案外強かなものだ。

「いやはや、これは今から歓迎会の計画を練らないと、満足してもらえなさそうだな。ああ、それから、葦原さん。これはあくまでも相対的な意味でだが、君に言うておくことがある。皇大に来れば後悔はしない。最高のキャンパスライフが君を待っているぞ」

「うわあ、ますます皇大に入りたくなっちゃったじゃないですか！やりますよ、私。あ、いつけない、もうこんな時間。じゃ、先輩。またお会いしましょうね」

手を振りながら駆け足で去っていく未来の後輩の姿を見送り、俺は改札へと足を運んだ。



第十一章 誉、再び

多分、そうじゃないかとは思っていた。しかし、とても受け入れられることではなかった。

ギラギラ照り付ける日差しと、かまびすしく鳴く蝉の声、そして半袖のセーラー服に夏の訪れを感じる中、あの皇大前通りの惨劇から一転、今度は打って変わって平穏な日々が続いていた。しかし、天災は忘れた頃にやってくる。こんな時こそ油断は禁物だ。安きに居りて危うきを思え、思えば則ち備え有り、備え有れば患い無し。唐の李世民の言行録「貞観政要」、遡れば「春秋左氏伝」にも収録されているこの名言は、平和な時代の危機管理こそが守成の要であることを今の我々に伝えている。そんなわけで、貴重なる休日に召集された戦略会議なる物々しい名称の会合。その場で俺達に、命が神具の使い手であることが告げられた。

「……命はまだ高校生だろう」

「高校生だから、戦場に出すのは忍びない、か。私も同感だ。だがな、黎明。このところ全くと言っていいほど鬼の襲撃が無いことをどう考える。仲間を一人葬られた以上、ただ手をこまねいている奴らではないだろう。我々がこうしている間にも、次の暴挙に出る何らかの作戦を考えているかもしれん。そうなると非常に厄介だ。悔しいが、元々私達には単体で鬼に対抗する術がない。その上で下手に知恵を巡らされた日には、目も当てられなくなる。だから、今は来たる災禍に備えて少しでも軍備を増強しておかねばならん。第一、神具を扱える人間は希少なのだ。年端もゆかぬ娘であろうと協力してもらわねば、私達に未来はない」

「生きるためには仕方がない、か」

理解はできる。しかし、納得はできない。

「前々から疑問だったのだが、お前たちのバックにある組織は一体何なんだ？そこまでの強制力、その権力はどこに由来している。神具の使い手を選定する基準も不明瞭だ」

「部外者に答える義務はない」

突き放す慈の一言。他の三人も判を押したように沈黙を守っていた。部外者、確かにそうだ。彼女達から見れば、俺はふらりと現れた通りすがりの一大学生に過ぎない。

「黎明君、私も命ちゃんを危険な目に遭わせるのは嫌だよ。でも、愚痴ばかり零しても何も始まらないわ。それより、より安全な今後の作戦や戦法を考えていくべきだと思う」

燈の意見は、残酷だが的を得ていた。事ここに至っては、もうそれしかないだろう。

「なら、お前たちの組織について説明しろ。己を知らざれば戦う毎に必ず殆うしだからな」

「部外者に答える義務はない」

またそれか。俺の苛立ちはそろそろ沸点間近になっていた。

「だったらその部外者をこんな会合に呼び出すな！」

「黎明、お前が一言、私達の一員になると言ってくれば、お前の知りたいことは幾らでも」

「もう一度確認しておく」

怒りを抑えた低い声に、一同が凍りつく。

「私は鬼と呼ばれる者の蛮行は許さない。しかし、鬼と聞けば無条件で殺しにかかるお前達の組織のやり方も、決して認めない」

それだけを言い残すと、俺はその場から退出した。

心に去来する、幾つかの出来事。彼女達と死線をくぐり抜けて来た日々は数えるほどしかなかったが、それでもお互い背中を預け合ったという事実は、何物にも代えがたい信頼を培ってきたと思い込んでいた。しかし、それも所詮、社会の枠組みを乗り越える力にはならなかった。悲しいことだが、要は錯覚だったのだ。信じていた嘘が露呈してしまった空しさは、これまでも何度か経験してきたはずなのに、やはりやり切れないものがあった。

「ばあっ！」

「うおわああああっ！」

突然視界を覆った無邪気な笑顔。少女はよろめく俺の肩を、両手両足でキュッと鷲掴みにしたかと思うと、やや後ろへ弓なりになった俺の身体の正中ラインを、ばねのように上手く使って、くるりと後方へ宙返り。空中で膝を抱えたままくるくる回転した後、赤いスカートをはためかせながら優雅に着地を決めて見せた。純白のパンツ丸見せだったという淑女にあるまじき点を除けば、オリンピック級の選手も目を丸くしてしまう、十点満点の演技だった。

「久しぶりだね、お兄ちゃん！会いたかったよ〜ん」

今度は猛烈な勢いで俺にタックル、そのまましがみついてきた。

「おおっと。相変わらず元気だな、誉は」

後ろに倒れないよう咄嗟にバランスを取るのは難しかったが、何とか持ちこたえた。頬をすりすりと擦りつけてくる誉の頭をぐりぐり撫でてやると、にゃはは〜と嬉しそうに顔を綻ばせ、喉をゴロゴロと鳴らす。まるで猫だな、お前は。

「はい、ごろにゃんタイムはこれでおしまい」

「ああん、お兄ちゃんの意地悪う。もっとごろにゃんしたいよお」

肩を掴んで引き剥がすと、名残惜しそうに抵抗した誉も手を離し、ふくれっ面で帽子の乱れを正した。が、にっと歯を見せたかと思うと、さっと俺の右腕にしがみついてきた。これならいいでしょ？と満面の笑みを向けられては、もうどうしようもない。やれやれ困ったものだと、こちらも呆れ顔を向けてみるが、後は誉に引っ張られるまま歩き出すしかなかった。

「ねえ、お兄ちゃん、アイス食べようよ、アイス！」

「うわあ、この服かわいい！ねえねえ、お兄ちゃん、これ試着して来ていい？」

「おお、ここ、すごい人出だ！何かイベントとかやってるのかな？ちょっと見に行こうよ！」

「あ！この新作ゲーム面白そう。よし、お兄ちゃん、誉と勝負だよ！」

「見て見て、お兄ちゃん！ヲタクが歩いてるよ、ヲタク！キャハハッ、ヲタクきもっ」

最後の発言については、この後、まずきちんと頭を殴り、次に、ヲタクを侮辱することは世界経済の活性に多大なる貢献をするとともに、平和的芸術の精神で第三次世界大戦の勃発を回避せしめている偉大なる英雄を侮辱することであり、同時に二千有余年の歴史を誇る我が国の文化への冒涇と同義であるという、今日、幼稚園児でも知っている世界の常識をしっかりと叩き込んだ。誉も己の犯した罪の恐ろしさを深く自覚し、涙を流して充分反省した様子だった。全世界のヲタの皆様、身内の無礼を私に免じ、どうか平にご容赦願いたい。

それにしても、誉の好奇心と行動力は止まるところを知らない。最初は散歩に出かけるくらいの軽い気持ちでいたが、結局は帝都内を散々引き回された挙句、仕舞いには現在位置さえ分からなくなり、公園の一角のベンチに座り込んで、ぐったりとしてしまった。夕暮れの空は見事に一面真っ赤に色付き、それを見上げる誉の瞳もキラキラと赤く輝いていた。

「ああっ、遊んだ、遊んだ！今日は楽しかったあ」

誉が満足そうで何よりだ。今の一言で、一日の疲れも不思議と吹き飛んでいくようだった。

「ねえ、お兄ちゃん.....私達って、周りの人達からどう見られているのかな？」

いつの間にか、誉は俺に擦り寄るくらいの位置に座っていた。夕日に照らされているせいか、誉の頬と唇が、ほんのり紅く染まっているように見える。

「そうだな.....」

俺は拳を顎に軽く添えて考える。誉をちらと盗み見ると、物憂げな瞳がゆらゆら揺れていた。明らかに何かを期待している。期待されたら、応えねばなるまい。

「赤い火星人と、それに連行されている可哀想な地球人」

「なんでやねん！」

彗星の如き、三倍増しの強烈な張り手が炸裂した。

「ならば、赤い火星人の身勝手な遊興の為に、脅迫されて無理矢理故郷を離れさせられ、強制労働に狩りだされ、未来に夢も希望も抱くことを許されなくなった可哀想な地球人」

「表現が生々しくなって余計酷いじゃない！いい加減に誉を太陽系第三惑星の知的生命体と認識しやがれ、この馬鹿

兄貴！」

「ならば、赤い独裁者の身勝手な思想の為に、脅迫されて無理矢理故郷を離れさせられ、強制労働に狩りだされ、未来に夢も希望も抱くことを許されなくなった可哀想な日本人」

「非道いっ、非道すぎる！いくら何でも、あんなの引き合いに出された火星人があんまりだ！謝れ、帝国内に潜伏する数万人の火星人工作員諸君に謝れ！」

「ナイス突っ込みだ。それなら、身勝手な妹に無理矢理付き合わされた可哀想な兄でどうだ」

「きゃっほーい！遂に妹に昇格だ！二階級特進だ！！」

誉は飛び跳ねて喜んだ。発言が少々、いや、極めて不謹慎だった。

いつまでも跳ね続ける誉を眺めているのも良かったが、ふと、俺は思い出した。

「ああ、そうだ。お前に会ったらちゃんと答えておかなくてはと思っていたんだ。あの質問」

「へ？あの質問??」

ピタリと飛び跳ねるのをやめて、誉は不思議そうな目でこちらを見ている。あれ？結構深刻な内容だったから、簡単に忘れるはずはないと思っていたのだが。

「ほら、俺達が初めて会った時に誉が言っていたじゃないか。人間は蚊を殺すくせに、どうして人を殺してはいけないのかって」

「え、何？それ」

な、何と言うことだ！こっちは結構真剣だったというのに。あまりの仕打ちに開いた口が塞がらず、いくら顎をカクカクさせても、最早言葉にならなかった。

「お兄ちゃん、今度はどうしたの！？死にかけの金魚みたいに口をパクパクさせちゃって。そんなに慌てなくても、酸素ならちゃんと大気中に二十一パーセントあるじゃない。変なの」

「って、誰のせいだと思っとるんじゃー！！」

「キャハハハ、お兄ちゃん、怖い、怖い」

年甲斐もなく、きゃいきゃいはしゃぐ乙女と鬼ごっこに興じてしまう俺であった。

スタミナを使い果たしていた上に追い駆けっこまでさせられて、もう息も絶え絶えだった。

「お兄ちゃんはね、とっくに誉のテストに合格していたんだよ」

不意に、誉が呟いた。疲労で未だ焦点の定まらない目を、ぼおっと誉に向けた。誉はというと、さっきのは口をついて出てしまった台詞だったのだろうか。自分に向けられた視線に気付いて慌てて顔を背けたが、やがて俯き加減になって、訥々と言葉を紡ぎ始めた。

「う、うんとね、誉がその質問したの、お兄ちゃんが初めてじゃないんだ」

「その質問って、あの質問だよな。そうか、思い出したのか」

「ううん、思い出したんじゃない。忘れたふりをしていたんだよ」

折角、誉が自分から語り出したのだ。渦巻く疑念は差し置き、俺は黙って耳を傾けた。

「お兄ちゃんて何人目だろう。兎に角、色んな人に聞いたよ。そしたらそいつら、何て答えたと思う？『馬鹿げている』とか『中二病』だとか。『危険思想だ』って言ったのもいたっけ。酷い奴になると、嘲って立ち去ろうとするんだよ。全く、腹が立つ。一体どっちが馬鹿だったのよ！？何も考えずのうのと生きている奴の方が、よっぽど頭イカれてるって！！」

その場凌ぎだったはずの誉の演説は、次第に熱を帯びてきた。なるほど、十分に予想される反応だ。こういうことを普段から真面目に考えていない連中は、予想外の問いかけに、まず驚きを示す。そして何とか答えなければ体裁が悪いと衝動が働くのだが、質問が質問だ。人類発生以来の大問題なのだから、答えが見つからないのが当然だ。さて、簡単であるはずの問題に答えが見つからない。そうなる人はどう動くか。十中八九、問題のすり替えを起こす。具体的には、哲学的な問いかけを社会的、倫理的次元まで引きずり下ろして対処しようとするのだ。例えば、誉も言われたという「危険思想」、或いは「馬鹿だ」と頭から非難してくるのは、このプロセスを経た者の特徴だ。誉の問題提起は、本来、あらゆる損得勘定を度外視した人間存在自体の意味を問うた、深淵な問いなのだ。それを、聞く者は半ば無意識のうちに、人間の損得勘定を土台とする社会通念の範疇で捉えようとしてしまう。すると、折角の高尚な問いが、あたかも「あたし、殺したい奴がいるんだけど、合法的にそいつの息の根を止める方法ってないかな？」という低俗なことを尋ねているように聞こえてしまうのだ。見事に台無し。結果、あのような頓珍漢な返答となる。聞く側の国語力が劣

悪なのが原因とも考えられなくもないが、なかなか一概には言えない所もあるだろう。根は相当深い。

などと俺が脳内で推論している間にも、白熱した誉の弁舌は更にヒートアップしていた。

「お兄ちゃん、ごめんなさい」

本当に唐突に、話を中断して誉が俺に謝った。少々面食らった。一体何に対して謝っているのか、真意を測りかねた。俺はそのまま次の言葉を待つ。

「誉が忘れたふりをしていたのはね、もしお兄ちゃんがあいつらと同じだったらって、それが怖かったの。だって、そんなの考えるだけで嫌だよ。でも、それってお兄ちゃんを信用してないってことなんだよね。だから、誉、今決めたよ。お兄ちゃんが応えてくれるんなら、ちゃんと聞く。だって、誉のお兄ちゃんだもん。あんな奴らと同じわけがない。そうだよ」

気丈な態度の裏で、なけなしの勇気を振り絞って不安と向き合っていることが痛いほど伝わってくる。あの自信家の誉が見せる、こんなにもか弱い姿。当然だ。誉だって裏切りには耐えられないし、誰よりも裏切りを恐れている。なぜなら、誉は人間なのだから。

「聞かせて。お兄ちゃんの答え」

誉が俺を促す。もしここで失敗すれば、誉は俺を殺し、自分自身をも殺してしまうだろう。しかし、例えそうなっても構わない。今必要なのは、抜き身で立ち向かってくる誉に失礼の無いよう、今できる最善を尽くすことだけだった。自分の命を盾に言葉を紡ぐのは、これで何度目になるだろう。だが、今回の俺は自分でも不思議に思うほど落ち着いていた。

「まずは、なぜ人間は他の生き物を殺すのかについて答えよう。誉、それは人間のエゴだ。人間が生き物の命を奪える正当な理由なんてない。あるのはエゴ、人間の自分勝手な欲望だ」

「うん、やっぱりそうだよ。誉の思っていた通りだ。生きるためには仕方がないって言うけど、それにしても罪悪観が希薄だし、おまけに休みとなれば半日でも釣りをしていると、狩りがスポーツだとか。人間には本来、殺しを楽しむ性質があるとしか考えられないよ」

やはり誉は利発だった。この歳でここまで問題意識があり、思考過程も論理的で整理されている。どうやら、こちらが噛んで含めるように話をするとかの気遣いは無用のようだ。

「でも、お兄ちゃん。それじゃあ、誉もエゴで人間を殺していいってことなの？エゴで他の生き物を殺している連中がエゴで殺すんだなんて、そんな言い分、通用しないよ」

「うむ、問題はそこだな。それについて考えてみたのだが、その結果、分かったことがある」

「な、何か分かったの!？」

余程意外だったのか、誉は目を丸くして俺の言葉を待ち構えた。俺は正直に答えた。

「すまない。色々考えてみたのだが、俺にも分からない。そのことが、よく分かった」

「ズコーッ!」

見事なヘッドスライディング。リアクションは完璧だった。

なぜ、人を殺してはならないのか。思いやりの心が大事、自分が嫌うことを他人にしてはならない、他者を尊重しなければならない.....。社会的、倫理的な説明ならいくらでもできる。しかし、それらの議論が成立する大前提として、そこまでして守らなければならない人間の価値とは何かが明確になっていなければならない。では、その価値とは一体何か。

ここで間違っはならないのは、たとえ尊厳さが明確でなくても、同じ人間同士、互いに尊重し合うべきだという議論は、誉には通用しないということだ。本来、人はそれぞれ生まれも才能も性格も各人各様に異なり、同じではない。なかんずく誉は暴力の面と並の人間とは格が違う。平等の価値を見出す方が難しい。そもそも、人間が人間を平等だと思っていない。殊に個人主義が浸透している昨今では、むしろ他者との違いこそが個人の価値と固く信じている者ばかりだ。命の平等性を説けば目くじら立てて排斥にかかる、それが世の実情だ。

だからといって、人間の不平等性を受け容れた上で、改めて法や国家の下の平等で人間の価値を説けば本末転倒となる。それでは、人間は組織の歯車の一つとして機能する場合にしか人間性を認められないことになるからだ。組織に属さぬ者はいくら殺しても構わなくなるし、何者の権威にも属さぬ誉には、人間を幾ら殺しても良い根拠を与えることと同義である。

色々複雑なことを言ってきたが、要は、才能や経験、性別や生い立ちなどに全く左右されない、人間の本質的な価

値があれば全ては解決できるのだが、その最も肝心な所が分からないということだ。これは白旗を揚げるしかないだろう。

「でもな、誉。人間を殺しちゃいけない理由、今は分からないが、それは俺がまだ知らないだけで、ちゃんと答えはあるような気がするんだ。俺は、何とかしてそれを見つけたい」

そう、俺はここで留意しておかなければならない。俺は人間の本質的価値が無いとは言っていない、分からないと言っているだけだ。どこかにあるが、見つかっていないだけ、ただそれだけなのだ。ならば、俺が見つけてみせる。例えそんなものがない確率が九九・九パーセントだとしても、残り〇・一パーセントには人生を賭ける価値がある。実際、そんな途方もない問題なのだから。ここで燃えずして、どこで燃え上がれというのか。

「そっか、お兄ちゃんにも分からないんだ。じゃあ、誉が分かるはずないね」

俺の答えを聞き終えた誉は、妙に清々しい顔をしていた。

「お兄ちゃんはやっぱり違うね。今までちゃんと教えてくれる人は一人もいなかったんだよ。答えにならないことばかり言う奴は、ムカついたから、誉、み～んな殺しちゃった」

何か恐ろしいことをサラッとやってくれたような気もするが、気にしない、気にしない。

「分からないくせに分かった振りするなんて嘔吐きだよ。でもね、お父さんとお母さんは『分からない』って、正直に答えてくれたんだ。えへっ、お兄ちゃんと同じ。だから、お兄ちゃんは正真正銘の正直者。うん、誉が保証するっ」

えっへん、と無い胸を張ってVサインした。誉が威張るところではないはずだったが、無邪気な仕草に笑みが零れた。それにしても、立派なご両親だったのだな。子供にそんな説明をして尚且つ納得させるなんて、普通の教育が余程しっかりしていたに違いない。

「人間の本質的な価値って奴だっけ？結局、それが分かれば全部答えが分かっちゃうんだよね。大丈夫、お兄ちゃんなら見つけられるよ。誉も応援するし、それまで人間殺すのもやめる。だから、お兄ちゃん。見つけたら、いちばん最初に誉に教えて。絶対だよ！？」

「よしよし、分かった、分かった」

じゃれついてくる誉の頭を、またぐりぐりと少し乱暴に撫でてやる。この刺激が心地よいらしい。またも、にやはは～と満面の笑顔を湛えていた。ところが、突然「あっ！」と叫んだかと思うと、いきなり自分の頭をポカポカ殴り始めた。

「もう、誉ったら自分ばかり喋って。そういえばお兄ちゃんの名前も聞いてないじゃない。馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿っ！」

そう言われてみればそうだった。名前とは人間同士のコミュニケーションにおける最低限の要素。それも無しにここまで深い話ができてしまっていたのか。常識で考えればあり得ることじゃない。俺は誉との並々ならぬ因縁を感じずにはいられなかった。

「はは、俺の名前は隙。黎明隙だ」

「げき……お兄ちゃん」

巷では呼びにくいと余り評判の宜しくない俺の名を、一音ずつ大切に発音する誉。俺はゆっくりと動くその愛らしい唇を、見るとはなしに眺めていた。

第十二章 頑迷なる者

「せ、先輩っ！？そっ、そこの鬼っ！先輩から、は、離れなさい！」

声のした方を振り向くと、青ざめた命が立っていた。よく見ると、膝がガクガク震えている。なぜここに命が？あ、そうか。確か神具には鬼と呼ばれる者の気配を感じ取る機能があった。ということは、この状況はさしずめ、誉の気配を感知した命が出向いたところ、当に俺が襲われようとしている場面に出くわした、そこで、何とかして俺を助け出したいが、鬼との接触は初めてだし、もの凄く恐いし、どうしよう、とにかく何でもいから、まずは鬼を俺から引き剥がさなければと考えている所だろう。そういえば、誉と命は初対面だった。

「き、聞こえなかったの！？早く先輩から離れなさいって言っているでしょう！！」

「待て、待て、命。この子は俺に危害は加えないって。お前もそんなに怖がることは……」

「くっくっく、残念だなあ。このまま上手くいくと思っていたのに」

俺の腕の中の誉の雰囲気が一変した。ま、まさかこいつ！？

「おい、そこの神具の使い手。命っていうんだっけ？だめじゃない、誉の邪魔しちや。やっとお兄ちゃんを油断させ切っつて、これからじっくりと鬪るなり殺すなり何なりして遊ぼうと思っていたのに、台無し。苦労したんだよ？さあて、一体どう落とし前付けてくれるのかな？」

そう言いながら、誉はさっきから俺の胸板の胸骨左縁第四肋間辺りに、人差し指で何度も「の」の字を描いている。そこは、俺の心臓の位置だった。

「ひ、ひいっ！鬪るなり殺すなり何なりって、その何なりって何なんですか！？もの凄くエッチな響きですっ！！」

エッチなのは命の思考回路の方だ！などと突っ込んでいる場合ではない。何と、いつの間にか俺は生命の危機に立たされていたのだった。

「ほらほら、命さん？そのまま突っ立っているだけでいいの？早く何とかしないと、隙お兄ちゃん、私に殺されちゃうよ？」

命は泣いてオロオロするばかりで、精神的にも追い詰められていた。当然だ、人質救出を兼ねた戦いなんて実戦経験ゼロの命が知る由もない。まずい！このままでは二人とも危ない。

「おい、誉。本当に俺を殺すつもりなのか？何かの冗談なんだろう？そう言ってくれ！」

「うん、冗談だよ」

……冗談らしかった。

「ばっかだなあ、お兄ちゃん。誉がお兄ちゃんを殺すわけじゃない」

そう言うと、誉はケラケラと腹を抱えて笑い転げた。

「で、誉。なぜそんな冗談を言った？」

「だって、面白そうだったんだも〜ん」

「言いたいことはそれだけか」

申し開きを聞き終えると、俺は両手の人差し指をくっつと折り曲げ、その角になった部分を誉のこめかみに当てる。そのまま、有無を言わずグリグリと押し捻じった。

「いたたたたたたた！いたい！いたいよ、お兄ちゃん！」

しかし、俺は許さない。

「誉、よおく聞け。誉は面白かったかもしれんが、そのために心の底から恐い思いをした人がいるんだぞ。いいか、自分の快樂の為なら他人はどうなろうが構わないと考えるのは、もの凄く悪いことなんだ。分かるか？誉」

「あーん、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいもうしません二度としません許して下さいグリグリはやめてください〜」

泣いて懇願するものだから、慈悲深い俺はグリグリをやめてやった。こめかみを解放された誉はペタリと地面に座り込み、そのままえんえんとベソをかいた。命は呆気にとられている。俺は泣きじゃくる誉の頭にポンと手を置くと、今度は努めて優しく語り掛けた。

「誉、お前が悪いことをすれば、巡り巡って必ずお前に災いが訪れる。お前が人を苦しめれば苦しめるほど、お前の敵が増えていくんだ。生きることは只でさえ戦いの連続だ。その上、無用な争いに巻き込まれて、お前が心身ともに擦り減っていく様を俺は見たくない。誉なら、分かってくれるよな」

両手を眼に押しあてたまま、コクリと誉は頷いた。

「よし、偉いぞ。とはいえ誉、人に完璧はあり得ない。必ず失敗する。だから、もし失敗したら、その時はきちんと心から謝ることだ」

聞き終わると、誉はすくっと立ち上がり、下を向いたままゆっくりと歩き出した。そして命の前で立ち止まると、ぺこりと頭を下げ、「ごめんなさい」と小さな声で謝った。始めは恐れ慄いて後ずさりした命だったが、予想外の言葉に、しばし混乱した様子だった。が、何とか事態が把握できたとみえ、おずおずと誉に問い直した。

「さ、最初から、黎明先輩に危害を加えるつもりはなかった、ということなのですね？」

誉は下を向いたまま、こくんと頷いた。

「な、なら仲直りです。どうやら、あなたは話に聞いていたほど悪い人ではなさそうですし、私も人に危害を加えるつもりのない方と戦う気はありません」

命は右手を差し出した。仲直りの握手のつもりなのだろうが、小刻みに震えている。でも、ここで誉も右手を差し出し、がっちり握手を交わせれば誤解も解けて無事落着くということか。

そう期待したのも束の間、何を思ったか、誉は差し出された命の右腕を両手でがっちりと掴みかかった。「ひっ！」と小さな悲鳴をあげる命。誉がゆっくりと顔を上げた。

「あんた、いい奴だね。あたしは誉。宜しくねっ。で、あんたは命だっけ？だったら、みこっちゃんだ！うん、みこっちゃん、我ながらいいネーミングセンスしてるなあ」

「は、はは……ご自由にどうぞ」

ちょっと顔が引き攣っていた。

「それにしても、みこっちゃんたらタイミングが良かったね！本当なら会った時点で殺しておいてもよかったんだけど、どういうわけか気紛れで、こういうことになっちゃったわけだし。あ、そうそう。もし誉が謝っても許してくれないようだったら、その時も殺していたかもしれなかったんだよ？いやあ、みこっちゃんて、ほんとついでる！」

「あ……」

今度こそ、命は白目を剥いて倒れてしまった。

「あれ？みこっちゃん、どうしたの？しょうがないなあ。こんな所で寝たら風邪ひいちゃうよ？おおい、起きろ、みこっちゃん」

懲りない奴だ。俺は再び誉のこめかみに人差し指の関節を当てた。間もなく、少女のあられもない嬌声が公園中にこだまするのであった。

「あらあら、幼女虐待とは戴けませんわね、黎明隙さん。そんなことをしていると、都知事や公安局が飛んでくるのではなくて？」

見知らぬ女だった。いつからそこにいたのだろうか。全身から妖艶な雰囲気を出している、濃紺のドレスを纏ったうら若い女性だった。やれやれ、溜息が出る。俺は女からよく見えるよう、誉をずいっと突き出してやった。

「知らぬようだから言うておくが、幼女とは未就学女児を指す言葉だ。あんたには、この子が五歳以下にでも見えるというのか」

女の端正な顔が引き撃ったように見えた。対照的に、誉は心底申し訳なさそうに俯く。

「お兄ちゃん、確かに誉は年齢十八でございます。ですが、恐れながら誉は学校には行っていません、未就学女児であります」

「え！？十八って……ふ、ふむ、なるほど。つまりは大きな幼女ということか」

「何と！これって新ジャンル誕生！？もしかして誉、歴史的瞬間に立ち会ってしまった！？」

「しかしな、誉、学校に通っていないことを気に病むことはないぞ。何を隠そう、俺も学校には行ってない」

「お兄ちゃんは今日休みなだけじゃないの！」

「いい加減になさい！その二人。変態ロリコンに定義も何もありますか！そもそも、私を無視するなんて、そんなことが許されるとでも思っていますの！？」

苛立ちを募らせた女の金切り声が飛んできた。

「ふん、ロリとペドの使い分けすら知らない奴に言われたくはないな」

「はああ、全くもってロリコンの言い訳は見苦しいですわね。こんなお馬鹿な変態さんのお相手をしなければならないなんて、私ったらよくよくついていませんわ。そういうわけで黎明さん、さっさと私の食糧とおなりなさい。生きておめおめと醜態を晒すよりも、そっちの方がずっと社会の為だし、何より貴方自身の為よ」

さっきから言うことが滅茶苦茶だし、取りつく島もなかった。知らないなら、せめて「ペドって何ですか？」と素直に聞いてくれれば会話が成立したものを。己の尺度で測れぬ相手を勝手に変態と決めつけ、一方的に自分の要求を押しつけようとするとは呆れた根性だ。

「あんた、今、俺を食糧にするとしたな。人間を食わないと生きていけない体質なのか？」

「ほらほら、負け犬が無駄に遠吠えなんてしないで、逃げるなり許しを乞うなりしてみたら？もしかしたら、お慈悲で一分くらいは余命を延ばしてもらえるかもしれないわよ？アーツハツハツハツハツハツハ！」

女の脳内で、いつの間にか俺は負け犬になっているらしかった。人の話に全く聞く耳を持たぬ、この横柄な態度！

「あれって、ただの我儘なおばちゃんじゃないか」

「お、おばっ！？」

「あ、誉、知ってるよ、おばちゃん。おばちゃんってさ、車運転する時とか、曲がってからウインカー出したり、十円安い大根買いに何キロも先のスーパーまでガソリン代使ったり、寄ると触ると飽きもせず人の悪口をネチネチ囁き合ったりするんだよね。まだまだ沢山あるけど、間違ってもあんな歳のとり方はしたくないよね」

「ほんとほんと、そうですね。あ、でも、家のご近所のおばさまは、とってもお優しくて上品な方ですよ？同じ壮年の女性といっても、全然違うみたいですね」

「結局は、その人の歩んできた歴史が人格に現れるということなのだろうな」

「あなたたち、何をごちゃごちゃと。噂話や悪口なしにコミュニケーションが成り立つとでも思ってる？」

全く悪びれる様子がなかった。

恐らく、あいつは鬼と呼ばれる者の一人なのだろうが、喋る割に、こちらの問い掛けにまともな反応を返さない。応じてもらえないことには、対話を持ちかけようにも話にならない。どうしたものかとあれこれ思案しているうちに、女は薄ら笑いを浮かべたまま、ずかずかとこちらへ近付いてきた。相手の出方が分からない以上、不用意に近づくのは危険だ。俺は女に距離を詰められぬよう、大きな円を描くように左後方へ後退を続けた。誉と命の二人も、俺に倣って同じく女から距離を取りつつ動いている。しかし、このままではジリ貧だ。

「誉、あいつはどんな奴だ。どんな攻撃してくるのか、分かる範囲で教えてくれないか？」

「ええ！？そんなこと知らないよ。お兄ちゃん、どうして誉にそんなこと聞くの？」

知らないだって？予想外の答えに驚いてしまったが、誉の方は俺以上に、意外なことを聞かれたものだとでも言いたげにぼかんとしていた。

「え、どうしてって、あいつも誉と同じ、鬼と呼ばれる者なのだろう？」

それでも誉は、俺が何を言っているのか分からない、といった表情でいる。だがすぐに、ああ、と何かを納得した表情を見せると、今度は呆れたような顔をされた。

「あのねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんは船橋市在住の富武次男さんの職業を知ってる？」

「誰だ？その富武次男さんというのは」

初めて聞く名前だった。

「誉だって知らないよ。この前チラッとネット動画でそんな名前を目にしたけども。だけど、その人はお兄ちゃんと同じ人間なんだし、お兄ちゃんなら分かるかなって思って」

「何だそりゃ？」

「何だそりゃ、って言ったね。でも、さっきお兄ちゃんは同じことを誉に聞いたんだよ」

「……つまり、鬼と呼ばれる者同士だからといって、面識があると考えるのは突飛だと」

「そうだよ。当然のことじゃない。それから、鬼っていうのは人間が勝手につけた呼び方。誉たちは自分らことを人天って呼んでるからね。以後よろしく」

確かに、誉の指摘通りだった。そうか。俺はてっきり、人天は同類同士で何らかの小さなコミュニティを形成しているはずだと考えていた。だが、それは思い込みだったのか。

いや、ちょっと待て。ということは、彼らは人間世界に極めて自然に溶け込んでいるというのか。それとも、人天は少数という前提が間違っているのか。はたまた、彼らはコミュニティを形成する必要がないのか。こんな状況だということに、次々と疑問が湧いてくる。

「ま、どんな技を使ってこようが、誉の敵じゃないけどね。お兄ちゃんもそんなに警戒することないよ。あいつが襲いかかってきたら、誉がパパッとやっつけちゃうから」

やけに自信に満ちた、頼もしい言葉だった。

「そうか。だが、申し訳ないが、誉」

「分かってるよ。お兄ちゃんは、あのおばちゃんとお話がしたいんだよね」

俺達は、お互いにぐっと親指を立ててみせあった。

「あああ、馬鹿馬鹿しい。これじゃ埒があきませんわ。こんな面倒なことは、さっさと終わらせてしまおうに限るわね」

ぴたりと女の脚が止まった。そのまま右手を挙げ、人差し指を突き立てる。次の瞬間、俺達の背後から突風が吹き抜けた。しかし、風は後ろで起きたのではない。風は女が引き起こした。正確に言えば、突き立てた女の人差し指を目標けて、四方八方から空気が流れ込んでいたのだ。気付けば、女の爪の先には豆粒程の光の玉ができていた。ま、まさかこれは！？

「遅いよ」

「なっ！？」

一瞬の出来事に、俺と命は息を飲んだ。が、比較にならぬほど驚愕に醜く顔を歪ませたのは女の方だ。いつの間に！？何と誉は、今にも光の玉を投げつけようとしている女の後ろに回り込み、その首筋、頸動脈付近に爪を突き立てていたのだ。

「ちっ！」

舌打ちとともに、女は投げ捨てるように光球を放った。

何が起こったのか分からなかった。光の粒があさっての方向に飛んで行ったかと思うと、雷と違うばかりの凄まじい炸裂音が轟き、俺と命は吹き飛ばされてしまっていた。これは、さっきの光の爆発。あんなのをまともに食らっていたら、今頃命はなかったに違いない。

無意識のうちに身構えていたのだろう。ひどく身体を地面に打ち付けたかと思ったが、怪我らしい怪我はなかった。命も無事のように。俺達が這這の体で何とか立ち上がろうと足掻いている中、視界の隅にそれは映った。あの衝撃だということに、誉とあの女は、先ほどの位置から微動だにしていなかった。

「なるほどね。分かったよ、お兄ちゃん。このおばちゃん的能力は、半径約二メートル以内の大気圧を変化させるものみたい」

女の首に爪を立てたまま、誉が俺に種を明かした。やはりそうだったか。もし、さっきの光球がその範囲の空気を断熱圧縮させたものだとすれば、それは相当の高エネルギー弾だったはずだ。つい今しがた味わった爆風も、それによる

ものとするば納得がいく。

「さ、お兄ちゃん、今のうちだよ。こうやって誉がおばちゃんを抑えておくから、聞きたいことがあれば何でも聞いてよ」

抑えておくなんて生易しいことを言っているが、実際は少しでも妙な動きを見せようものなら、頸動脈を引き千切ってしまうつもりだ。人天がいくら驚異的な自己修復力を備えているとはいえ、一度に循環血液量の大半を失ってしまえば致命的だろう。女も下手に動けないはず。この場合に限り、相手を話し合いのテーブルにつかせるには効果的な方法だった。

「た、助けて……お願いよ」

蚊の鳴くようなか細い声だった。人を食ったような、あのふてぶてしい態度はどこへやら。女は恐怖に打ち震える目で誉に懇願していた。

「何が助けてだよ！今の今まで、お兄ちゃんを殺す気満々だったくせに」

確かに今更感も否めない。だが、それでも同情を誘うには十分過ぎるほどに哀れな姿だった。はらはらと涙を流し、嗚咽にむせぶ声で女の訴えは続く。

「ごめんなさい！私どうかしてたわ。今にして思えば、何の恨みもない人を殺そうだなんて正気じゃなかったのよ！そもそも黎明さんを殺そうとしたのも、私の意思じゃないの！」

「え？それってどういう……」

私の意思じゃない。その一言に、微かな躊躇いが生じた。皮肉にも、その甘さが命取りになってしまった。初動なしで女が能力を発動させる。気を緩ませた誉は反応できない。

「あああああああああああああああああああああっ！！」

絶叫。誉の身体が地に沈む。その両腕は硬直し、沈みかけた太陽の光を反射して鈍い光沢を放っている。いや、これは単なる硬直ではない。誉の両腕は凍りついていた。

「断熱膨張だと！？」

「あら、お馬鹿さんのくせによく知っているのね。お姉さん、ちょっとだけ感心しちゃった」

そう言いながら、女は激痛に悶え苦しむ誉を一瞥すると、その鳩尾に強烈な蹴りを入れた。そのまま、誉はぴくりとも動かなくなってしまった。啞然とする俺達を余所に、不敵な笑みを湛えたまま、何事もなかったかのように女は再びこちらに近づいて来る。

「あなたの考えている通りよ、黎明さん。急激な圧力変化で、気体は断熱系とほぼ同じ熱力学的挙動を示すわ。これがどういうことか分かるわよね？気体なんてものは、至る所に存在する。つまり、大気圧を操る私は、物を燃やそうが凍らせようが思いのままってことよ」

女は得意気に自分の能力について講釈を垂れた。何もかもが的外れだった。

「そんな下らない解説、誰も聞きたくなんかない」

「はぁ？何を言っているの、あなた」

「それはこっちの台詞だ！おばさん」

みるみるうちに、女の口元がへ字にひん曲がった。構わず俺はまくしたてる。

「今のは策略とか、そういう手の込んだものじゃないな。あれは本心、少なくとも最初の命乞いの涙は本物だった。だから誉は憐れんで手を緩めたんだ。だが、あんたは舌の根も乾かぬうちに掌を返した。あんた、人の情けを踏みにじっておいて何とも思わないのか！？」

「何とも思わないわ。何、それがどうかしたわけ？」

暖簾に腕押しとはこのことか。厳しい追及にも、平然とした態度に全く変化はなかった。

「貴様に恥の概念は無いのか。数秒前の誓いを反古にして、恥ずかしいとは思わないのか！」

「はぁ？何を言っているの。殺されそうになったら助けてと口を突いて出てくるのは当たり前だし、目の前に獲物があれば機会を逃さず仕留める、これも当たり前じゃない。どこがおかしいわけ？こんな簡単なことも理解できないの？」

「全くもって自己中心的な発想、お目出度い限りだ。貴様の主張は『お前は殺すが私は助ける』というのと同じだぞ。そんな身勝手な要求が通用する道理があるとでも思っているのか」

「ふん、屁理屈ね」

心底、人を見下したような目でこちらを見ていた。どっちが屁理屈だ！

この女には論理が通用しない。それ以前に、こちらの話に耳を傾けようという態度すら無い。それでいて、出てくる発想、出てくる発想が皆、自己中心的。頑固な馬鹿ほど手に負えないものはない。もう、堪忍袋の緒が切れる寸前だった。

「だめです！黎明先輩」

こうやって命が俺の腕を引っ張ってくれなかったら、あの女の顔面を殴ってやりたい一心で無謀にも突撃して行ったかもしれない。寸での所で、ほんの少しだけ自制心が感情に勝ってくれたようだった。さて、ここからどうする。誉が心配だが、あの程度で死ぬような奴じゃないし、それに、あの女は誉には関心がなさそうだ。あのまま気絶していれば、今すぐに誉が危険に晒されることはないだろう。ならば、被害拡大を避け、まずはできるだけここから離れることだ。だが、その後はどうする？さしあたっては、まずあの女の動きを封じたい所だが、誉という戦力を欠いてしまった当方は、ほぼ詰めの状況にまで追い込まれている。

「先輩、多分大丈夫です。私の盾を使えば、何とかなるかもしれません」

今まで俺の陰に隠れるようにしていた命が、一步、前に進み出た。

第十三章 夏の夜の夢

俺達と女との間のほぼ中間の辺りに、真っ黒で巨大な盾が出現した。両腕を真っ直ぐ前へ突き出した姿勢で、命はその制御に集中している。そうか、命は盾の使い手だったのか。

「ふん」

吸い込まれそうな黒の突然の出現に立ち会いながらも、つまらなさそうに鼻を鳴らす女。すると今度は、女の方が両腕を前に突き出す。加えて腰を落とした。

パパパパパッ！

間髪入れず、弾けるような連音。女の空気機関銃掃射だった。銃声というには高く乾いた音質だったが、小刻みなテンポは機関銃そのもの。しかし、その見えない砲弾が俺達の所まで届くことはなかった。命の盾は、その全てを防ぎ切っていた。

「なかなかじゃないの。殺傷力に劣る空気機関銃とはいえ、貫通どころか衝撃に揺らぐことすらないだなんて。でも、却って殺り甲斐があるってものだわ」

盾の向こう側で、女が獲物を捕捉した蛇の如く、妖しく舌舐めずりしているのが見えた。

「で、できましたよ、黎明先輩。私、盾が扱えています！」

こちら側では、場の流れにすぐわめはしゃぎ声で興奮気味に命が叫んでいた。

「まさか命、神具の扱いは今日が初めてなのか？」

「え？あ……い、いえ。何度か練習しました。でも、実戦で同じように操れるかどうか、少しだけ心配でしたので」

そうだ。戦場で能力を使うのは、命にとってこれが初めて。神具の性能も、まだまだ未知数。たとえ策を弄しても、仕損じることだってあり得る。ただ、あの空気銃を完璧に凌ぎ切った強固さをもってすれば、或いは。今はそれに賭けるしか無い。

「よし、命。今からこの局面を切り抜ける方法を考える。そのために、まずはお前の盾の特性を把握しなければならない。これから尋ねる幾つかの質問に答えてくれ」

こうして俺と命は、行動を開始した。生き残るために、そして、生き残らせるために。

「無駄な足掻きはおやめなさいな。最早、貴方達に勝ち目はありませんわ」

女は不敵に笑う。

「確かに、そこのお嬢さんが操る盾はまさに鉄壁。恐らく、私のどんな攻撃も跳ね返してしまうでしょうね。でもね、貴方達が扱えるのはあくまでも盾一枚。しかも、貴方達は機動力の面で極めて不利。この意味が分かるかしら？お馬鹿さんたち」

女は懐からキセルを取り出し、俺達の目の前で一服してみせた。

「どうせ分からないでしょうから教えてあげるわね。戦いはね、結局のところ足し算で勝った方が勝ちなのよ。例えば、相手が三枚の駒で防衛線を張った場合、こちらは一枚加えた四枚で対抗するの。そうすれば、その守りは必ず破れる。この法則をこの場面に適用したらどうなるかしら？まず、貴方達は盾という駒一枚、そしてこちら側も空気砲という駒一枚。これだと一見、互角よね。でもね、実戦ではそこに機動力という要素が加わるのよ。多分、同じ条件ならお嬢さんも、私と同じくらいの速さで動き回れるのよね？でも、今そちらには黎明さんという足手纏いがある。だから、お嬢さんは素早く立ち回れない。つまり、貴方達が一手打つ間に私は二手打つことができるの。さて、黎明さん、一と二ではどっちが多いかしら？いくら貴方でも、このくらいの計算はできますわよね。おっほっほっほっほっほ！」

弱者をいたぶることが面白くて堪らないのだろう。高笑いする女は楽しそうだった。

「ああ、私ったら完璧な計算に酔いしれてしまって、つい大事なことを忘れるところでしたわ。黎明さん、貴方達が勝てない理由はもう一つありましたの」

そう言いながら、女は人差し指を天に向かって突き立てた。風が吹き荒れ、たちまちのうちに、あの光の粒が現れる。

「所詮、盾は防御の道具。つまり、私はどれだけ攻撃しても攻撃されない。ああ、絶対安全な場所に身を置きながら、一方的に相手を凌辱できるこの快感、何て甘美なのかしら！」

絶叫しながら、女は俺達目がけて突進してきた。それを見た命は、すかさず盾を動かした。

「何っ！？」

気付いた時にはもう遅い。高速で突進してくる女に対し、命も女めがけて盾を投げつけたのだ。相対速度では自らのスピードの二倍で迫りくる盾、避けられるはずもない。更に命は寸前で盾を変形させる。横長になった盾は見事に女の顎に命中。ゴキッという、日常では聞き慣れない、関節が砕け、骨と骨が激しく強くぶつかり合う音がした。首だけを大きく後ろに反らしたまま、女は仰向けで宙に舞う。間もなく、衝突の瞬間に制御を失った光球が爆発。命は素早く俺達の傍らに盾を展開、襲いかかる爆風を凌ぐ。一方、爆風に吞まれた女は地面と激しくぶつかり合いながら横転していった。やがて爆風が収まりを見せ、女は全身で天を仰ぐ格好になった。命は女の直上に盾を出現させる。それはそのまま女に覆い被さると同時に、ベニヤ板のようにグニャリとたわみ、首から上を除いて女の動きを完全に封じた。

「盾は防御の象徴であるがために、消極的な印象がある。が、実際はそうじゃない。敵に押し付けて視界を奪う、ぶつけて動きを止めるなど、最前線に立ってこそ威力を発揮する、紛れもない攻撃系の武器なのだよ」

早くも意識を取り戻し、何が起きたのか分からず茫然自失としている女に俺は語りかけた。

「まずは初手、あんたは先手を取ったつもりだろうが、盾の用途は防御のみと思いついてくれたお陰で私達が取らせてもらえたよ。更にあんたは、自分でこしらえた光の玉で自分自身を攻撃してしまった。その時はこっちも爆風を防ぐ一手だったが、実質的には私達の一手になったわけだ。駒を失ったあんたは反撃に移れない。結果、悠々と私達が勝利を収めた。あんたの機動力と光球という二枚の駒、確かに、命の三枚の盾には敵わなかったようだな」

「ムカつく……」

手足の自由を奪われながら、尚も悪態をつくとは見上げた女だ。いや、実際は俺を見上げているわけだが。ともかく、これで漸く話し合いになる。機会を逃してはならない。

「おい、あんた、なぜ俺を襲ってきたりした……」

え！？声が出ない。いや、それ以前に呼吸ができない。異常を察知して、横隔膜も頸の筋肉も総動員で空気を吸いこもうと努力するも、なぜかピクリとも肺が動かない。それに、この風の流れ。まさか！？俺はもがきながら必死で体を反転、女と反対方向に逃げ出した。

酸素がゆっくりと肺を満たしていく。待ちかねたように、体中の細胞が正常の代謝反応を再開した。うずくまり、額に脂汗をかいて空気を貪る俺を、愉快そうに眺めている女が一人。迂闊だった。気圧差を利用すれば二メートル圏など関係ない。さっきのように、俺の口元の空気を奪うことも可能だ。弱った。これ以上、不用意に近づくことはできなくなった。

「あら黎明さん、どうしたの？お話したいならこっちに来てくれなきゃ。それとも何かしら？口では私に勝てないからって試合放棄？やれやれだわ。男のくせに度胸の欠片もないのね」

言いたい放題言いやがって。近付こうものなら、今度こそ文字通り息の根を止める心積もりのくせに。それでいてよくも虚仮にしてくれる。

「おい！この距離からでも会話はできるだろう！」

「全然聞こえませーん。もっと大きな声で喋ってくださいーい」

聞こえないのではなく、聞く気がないのだろうが！本当にもう殺してやろうか！

逆上しかけた俺だったが、その時、命のか細い声が聞こえた。

「せ、先輩……すみません、もう、ダメです」

え、ダメって何が？振り返った時には、もう命は地面にうつ伏せになって倒れていた。

「体力の限界みたいね。知ってた？力を使うのってもの凄く疲れるのよ。黎明さんったら最低。貴方、お嬢さんをポロ雑巾のように使い捨てにしたのよ。女の子を働かせて自分はおいしい所を持っていこうだなんて、クズのすることよね。ああ、おかしい。あーっはっはっは！」

命が倒れたことで、盾も姿を消していた。手足の自由を取り戻した女は何事もなかったかのように、あの耳障りな高笑いを鳴り響かせていた。

完全に俺の下手際だった。命の盾の特性については十分に把握できたつもりでいたが、肝心の命が被るリスクには考えが及ばなかった。こんなの、当然のことじゃないか。無尽蔵に力を扱えるなんて、そんな虫のいい話があるわけがない。しかし、俺はそれを失念していた。顔をしかめて激しく肩を上下させる命を抱きかかえながら、俺は何度も詫びるしかなかった。

「さて、黎明さん。今までよくも手荒な真似をして下さいましたわね。あなた、レディーファーストという言葉をお知りにならないの？女性に対して暴力を振るうなんて、男性として最低のこと、そうはお思いにならないのかしら」

女はじりじりと距離を詰めてくる。

「レディーファースト、か。それをこの戦場で聞くとは思わなかったよ。その言い分が通用すると思っ込んでいたり、あんた、本当に身勝手だな。それからもう一つ。レディーファーストはあくまでも男性の側の心得であって、女性の側から主張すべきことではない」

「んまっ！口の減らない坊やだこと。いいわ、こうなったら、その生意気な口ごと跡形もなく消し去ってあげるから、覚悟なさい」

そう吐き捨てると、女は高々と人差し指を天に突き上げた。断熱圧縮が始まる。空気を奪われ、真空となった空間にどっと大気が雪崩れ込み、それが一陣の風となって辺りを吹き抜けた。タイミングを見極めた俺は、咄嗟に傍らの小石を掴み取り、殆ど出来上がりかけた光の玉めがけて投げつけた。針の穴をも通す送球は確実に光を捉える。一瞬、目を丸くした女の表情が網膜に映った。その残像を残したまま、光球は女の指先で派手に炸裂した。

「大変な威力だな。腕が肩から根こそぎもぎ取られている」

爆風に巻き込まれて随分遠くまで吹き飛ばされてしまったが、受け身が成功したのか、幸い全身打撲で済んだようだった。節々の痛む身体をやっとの思いで爆心地まで運んで来たわけだが、大量破壊兵器の製造主は見るも無残な姿に変わり果てていた。

「せ、先輩。もしかして、勝ったんですか！？」

「いったあい！え、何？今のお兄ちゃんがやったの！？」

体力が回復した誉と命が、俺の所へ駆け寄ってきた。俺は二人に会心の笑みを向けてやる。わあっ、という感嘆の声とともに、二人の目が輝いた。

「すっごーい！お兄ちゃん、凄いよ。生身の人間が人天に勝つところ、誉、初めて見た！」

「ど、どうやったんですか！？どうして勝てたんですか？ねえ、先輩！」

「大したことはない。相手の力を利用しただけだよ」

「大したことないで勝てるのなら苦労はいらないよ。ちゃんと教えてよ、お兄ちゃん」

「分かった、分かった。って、誉。お前、腕がすっかり元通りになっているじゃないか」

「へっへ～ん、これしきのこと腐れ落ちる誉さまの腕じゃないのだ！」

「ほお、便利というか何というか、不思議なものだ」

凍りついていたはずの誉の腕をぷにぷにと揉んだり撫でたりしてみるが、全く異常なし。張りのある健康的な肉付きの腕だった。

「それより、黎明先輩」

「ああ、そうだったな。そうだ、あんたも聞くか？」

ふんと女は顔を背けた。当然のことながら、とてつもなく不機嫌だった。

「じゃあ説明するぞ。光の粒は、半径二メートル内の空気を瞬間的に圧縮させてできる。だが、俺は少し違和感を覚えた。あそこまで圧縮された気体が、なぜ液化しないのかってね」

「ああ、確かに。過度に圧縮されれば、気体個々の分子運動エネルギーよりも分子間力が勝るから、液化、もしくは昇華によって安定化するはずだもんね」

「そうだ。しかし、あの光球は気体のままだった。なぜか？それは、断熱圧縮によるエネルギーだけではなく、分子間力を上回るエネルギーが更に加えられていたとしか考えられない」

「ええっ！？でも、そんなエネルギーなんてどこから」

「残念ながら、それは分からない。もしかしたら何らかの方法で、余剰次元から引き出してきたのかもしれないと、俺は仮説を立ててみた」

「余剰次元？あっ、超ひも理論ですね！」

「流石だな、命。よく勉強しているな」

「でもでも、それだと色々問題が出てきますよ？仮に余剰次元からエネルギーを引き出すとしても、まず、そのエネルギーをこのブレーンワールドに汲み取る機関が必要です。それに余剰次元に収まっているエネルギーは主に重力エネルギーのはず。それを熱エネルギーに変換する機関だって必要になりますし、そもそもそれらの機関を動かす動力は一体何なのかとか考えると……ああ、もう！何だかごちゃごちゃして訳が分かりません！」

「馬鹿だなあ、みこっちゃん。毒矢が刺さっているのに、毒の成分や犯行動機なんか考えてどうするの。毒矢が刺さったら、まずは矢を抜いて腕を縛らなきゃ。ね、お兄ちゃん」

誉は、俺にぱちっとウインクしてみせた。

「そう、誉の言う通りだ。命、ここで大事なのは、只でさえ不安定な所に、更にエネルギーが加わって益々不安定になっているということだ。そんな不安定系を維持するには、極めて精密なエネルギー的秩序が要求される。で、そこへ、その秩序を乱す衝撃が加わったら」

「ドカーン！というわけですねっ」

きゃいきゃいはしゃぐ俺と命だったが、意外にも誉は冷静だった。

「でも、それってあくまでも推論に過ぎないでしょ？それを実行に移すなんて、よく言えば豪胆だけど、一步間違えばただの蛮勇だよ。お兄ちゃんも結構、胆が据わってるね」

「いや、そうでもないよ。確かに今の話は推論に過ぎないが、それを確信させる状況証拠があったんだ。ほら、最初に光の玉ができた時、誉がこの女の動きを封じただろ？その時、こいつは放り投げるように光球を捨ててしまった。わざわざ捨てなくても、あのまま保持していれば幾らでも使い道はありそうじゃないか。なのに、なぜ投げ捨てたのか。それは、光の中のエネルギー膨張が限界に達して、コントロール不能になったからではないか」

「あ、そうか！お兄ちゃん、あったまいい！」

「あとはタイミングの問題だが、この女、あの光球に相当こだわっていたし、それに少々サディスティックだったからな。逆上させれば、きっと大技を仕掛けてくると思ったよ」

ちらりと女の様子を窺うと、まるで親の仇でも見るような酷い形相で俺を睨みつけていた。果たして、こんな状態でこれから俺の話の聞かだろうか。いや、兎に角やるしかない。そう自分に言い聞かせて、女の方に向き直った時だった。血走った女の眼が大きく見開かれた。

「危ない！」

命の叫びが聞こえた。同時に俺に向けた空気砲の乱射。命が盾を展開させつつ割って入る。だが、命の体力は未だ万全ではなかった。間もなく黒い盾は霧散し、今度は命自身が盾となって、迫りくる狂気を一身に受け止める形になってしまった。スローモーションのように、目の前で宙に舞う小さな身体。機銃掃射の嵐が収まった時、命は仰向けになって地に倒れた。

「畜生！邪魔するんじゃねえよ、小娘風情が！！」

いつの間にか老婆と化した女が皺くちやの顔を更に歪めて、物言わぬ命に罵声を浴びせた。

こいつ、どこどこまでも腐った奴だ。俺達は何度もあんたを追い詰めた。しかし、その度に止めを刺すことなく、対話の機会を模索してきたじゃないか。それが分からないとでもいうのか。いや、そうじゃない。分かっている、俺達があんたを殺すことはないと分かった上で、尚且つそれを利用することしか考えていないのだ、こいつは。なぜ話し合いに応じない、なぜ俺達の声に耳を傾けようとしない！？最早、怒りなんて通り越して涙が出そうだった。人というのは、ここまで醜くも悪に徹することができるものなのか。

「お兄ちゃん、まさか、ここまできて七縦七禽というわけにはいかないよね。お兄ちゃんやみこっちゃんを、こんな目に遭わせた奴を……。もう誉、我慢できないよ。こいつ、殺してもいいでしょ？ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんってば。何とか言ってよ！」

誉は泣いていた。怒りで全身を震わせていた。ああ、そうか。この子には、俺との約束があったのだ。もう人を殺さないという、あの約束。目に涙を一杯に溜めて、もうとっくに臨界点は越えてしまっているだろうに、それでも律儀に守り通している。もし、ここで俺が許可を出せば、瞬きする間もなく誉は女を殺してしまうだろう。だが、それは俺が誉を裏切ることであり、同時に俺が俺自身を裏切ることになってしまう。

初めて、俺の頭の中は真っ白になってしまった。しかし、時は容赦なく死へのカウントダウンを始める。老婆が今度こそ俺を照準に合わせ、再び機銃掃射を試みた、その時だった。

「黎明先輩から……離れなさい」

ゆらりと立ち上がった命。そのまま一歩、また一歩、覚束ない足取りで老婆に近づいていく。ただならぬ雰囲気には唖然とする一同。それを無視するかのよう、命だけが自らの時を進めていた。老婆はカチカチと歯を鳴らして震えた。余りの気味の悪さに耐えられなくなったのか、老婆は狙いを変え、命に向かって掌を突き出す。しかし、時同じくして、命は球体を撫でるように手首を回した。瞬間、突如現れたあの巨大な盾がぐるりと老婆を包み込み、完全な球体とな

って虚空に浮かんだ。もう老婆の悪態は聞こえてこない。静寂が訪れた。

一息つく間もなく、今度は掴んだコードを引っ張るように、命は拳を上下へ引き伸ばす。すると、黒い巨大な球体は形状を保ったまま、大きさだけを急速に変化させ、みるみるうちにゴルフボールほどまで小さくなってしまった。

「ふんっ」

命が大きく息を吐いた。そして、その存在はこの世界から跡形もなく消え失せてしまった。

すっかり暗くなってしまった公園には、真夏の夜独特の生暖かい風が吹いていた。

第十四章 鬼

「黎明、命！無事なのか！？返事をしろ！」

懐中電灯の明かりが二つ、遠くの方でゆらゆらと揺れていた。膝の上には完全に気を失ってしまった命の寝顔。誉も心配そうに横から覗き込んでいる。

俺は、何をしていた？記憶ならある。しかし、それが実感を伴っていなかった。なぜなら、常識の範疇を超えた出来事が目の前で起きてしまったのだから。つい先ほどまで呼吸のように悪態を発していたあの老婆は、存在ごとこの世から消えた。命が、消してしまったのだ。頭では理解しているはずなのに、心が追いついていない。たとえば滝壺や火口を覗き込んだ時、迫る「死」という究極の存在可能性。自分の存在のちっぽけなことを否応なしに自覚させられ、無限の宇宙に独り放り出されたようなあの感覚。丁度、そんな感じだった。

「黎明！いるならいると言ってくれ。探したぞ」

「んあ？」

「んあ？じゃない！これでも心配してたんだぞ」

声の主は慈。結さんもあとから駆けつけてきた。慈は、俺の膝の上で寝息を立てている命や、ただただ放心状態にある俺の姿にぎょっとしたようだった。二人とも衣服はボロボロだったが、とりあえず無事であることに、慈はほっと息をついた。ところが、俺の傍らにもう一人の気配を感じた慈が灯かりをそちらへ向けると、凍りついてしまった。そこにいたのは、先日、死闘を繰り広げた赤い制服の鬼。結さんもそのことに気づき、臨戦態勢をとる。二人のただならぬ気配は誉を刺激した。鋭い眼光が煌き、敵対する二人を睨みつける。

一触即発。まさに両者が踏み込もうとした刹那、間にゆらりと割って入った者がいた。

「双方とも手を引け。無駄な争いをするんじゃない」

突如、目の前に広げられた俺の掌に息をのむ誉、慈、結さん。だが、このことで互いに相手の動きが止まったことに思い至り、次第に緊張は解かれた。衝突は回避された。

「結ちゃんも慈も待ってよ。運動不足の私に、ダッシュは拷問以外の何物でもないんだから」

呑気な声をあげながら、息を切らせて後からやってきた燈だったが、緊張緩和の後とはいえ、尚も厳しく睨み合う三人の女と、その間で両腕を左右に広げ立ちはだかる男という奇妙な取り合わせを目の当たりにして、思わず後ずさりした。しかも、それらの瞳が一斉にギョロリと自分に向けられたものだから、気持ちの悪い冷たい汗がツーツと首筋を伝った。

「とっ、取りあえずカラオケにでも行くかね？皆の衆」

四人が一斉に首肯した。その光景が余計に不気味で、燈は生きた心地がしなかったという。

カラオケボックスに入った後も、会話らしい会話は無かった。互いが互いを強く意識しながら、或いは警戒心から、或いは敵意から、或いは気まずさから、互いに目を合わせようとしない。沈黙の時間だけが刻々と流れていた。

ピピピッと電子音が鳴り、一曲の歌が選択された。やおらマイクを手に立ち上がったのは燈だった。やがて曲のタイトルが大画面に表示される。が、アップになったアニメのキャラクターに、一同ずっこけてしまった。だが、激しいエレキギターによる前奏に続いて歌詞が流れ出すと、様相は一変する。アップテンポの曲調に乗る予想外の美声に、今度は一同舌を巻き、誰からともなく手拍子が生まれた。曲が終わる頃には、すっかり敵味方の別はなくなっていた。余韻を残しつつ一曲目が終了する。歓声と大きな拍手が沸き起こった。

「次、誉。歌ってみろよ」

「ほーい！誉、歌いまーす」

誉が選んだのは、テレビCMでもよく流れているJポップの曲だった。馴染みの歌に、自然と聴衆の身体がリズムに乗って前後左右に揺れる。こうして俺達の間をマイクが一巡した。

「黎明、お前、またそれかよ。いい加減にしたらどうだ」

「五月蠅い。私は専らアニソンなんだよ」

毒づく慈に構わず、再び俺はマイクを握った。

「ったく。お前から何か言ってやれよ、結」

「あら、黎君が歌うアニメソングって意外と歌詞が趣深いじゃない。私好きよ」

「おいおい、勘弁してくれよ。なあ、燈」

「え？私も黎明君の歌、結構気に入っているんだけど」

「へっへっへっ、お前のお気に入りには黎明の歌じゃなくて、黎明本人じゃないのか？」

「んなっ!？」

ポツと茹でダコのようになる燈。そんなやりとりにキュピーンと目を光らせて、年少組二人が燈を睨みつける。そうとも知らず、俺は結さん一人の手拍子を受けて歌に熱中していた。

「なあ、お前」

「ん、何か用？」

さっきから慈はチラチラと隣に座る誉の様子を窺っていた。何か話したいことがあるのに、なかなか口に出せなかったのだろう。慈にはこういう不器用な所がある。こんな時は、いつも見ているこちらがやきもきさせられるのだが、今回は機を逸することなく切り出せたようだ。誉の方も始めからその視線に気づいていたようで、話し掛けられるとすぐに反応した。

「ええと、何だ。お前達ってさ……」

「ちょっと待って。誉にはちゃんと名前があるの。お前っていうのは止めてくれない？」

「え？ああ、それは済まなかった」

「分かれば宜しい」

誉はにかつと笑みを向けた。誉の気さくさを感じ取ったのだろう。慈の表情がふっと緩んだ。

「誉よ、二つばかり聞きたいことがある。一つは、誉たちが人間を襲う理由は何なのかということ。もう一つは、そもそも鬼とは一体何者なのかということだ」

慈の問いに誉はぼかんとしていたが、今度は値踏みをするように慈のことをねめ回した。

「ふうん。それを本人に聞くの？お姉さん、結構大胆なんだね」

「本人に聞くのが一番確実だし、手っ取り早いだろ。ああ、それから、私の名は慈だ」

竹を割ったような慈の答えに、誉はくくつと可笑しそうに笑った。ひとしきり笑うと、その間も目を逸らすことなくじっと自分を見据えていた慈の方に、自ら身を乗り出した。

「慈の言う通りだね。そりゃそうだ、本人に聞くのが一番正確だ。いいよ、教えてあげる」

誉の言葉に、それまで遠巻きに動向を観察していた俺達の視線が一斉に集まった。

「まず、最初の質問。誉たち人天が人間を襲った理由だけど、誉の場合は、その人間が気に食わなかったからだよ。多分、他の奴らもそうなんじゃないかな？分からないけど」

「分からないだと!？そんな馬鹿な。なあ、気に食わないとかじゃなくて、もっと明確で統一された目標みたいなものはないのか？」

「無いよ。何で誉が他人と同じ目標を持たなきゃならないのさ」

いきなり自分の言葉を否定されたからだろう。無然とした態度で誉は応えた。しかし、慈の動揺も分かる。俺が遭遇した人天は誉を含めて三人しかいないので詳細は分からないが、慈の話によれば、彼等は以前と比べて人間に明確な敵意を持ち、組織だった動きを見せるようになってきたらしい。それに、夕方の老婆は最初から俺の名を知っていた。誉にさえ今日初めて教えたのだから、普通に考えれば、あの神父との戦いを観察していた誰かが、参謀的な役割を果たしていた俺を調査し、情報をあの老婆に渡したことになる。しかし、人天の動きが各自の判断による単独行動ならば、それらの事実が理解し難いものになってしまう。

「もう、お兄ちゃんまでそんな顔して。どうしても信じられないんなら、ついでに二つ目の質問にも答えておくけど。誉たちは、人間であることを強く恥じる心が元で人天になったみたいなんだよ。でも、人であることを恥じる理由なんて、それこそ人それぞれなの。欲望に駆られた低俗な奴もいれば、名誉とか信念とか、そういったことがきっかけになった奴もいる。本がバラバラなんだから、人天同士でも基本的に相容れることなんてないんだよ」

「人であることを恥じるだなんて……」

整合性のない事実の断片に慈たちが頭を悩ませている一方で、別の視点から誉の発言を重く見たのが燈だった。確かにもどかしさはある。だが、俺も今はそっちの方が重要に思えた。誉が人であることを恥じるようになった理由とは。

「ねえ、誉ちゃん。貴女がなぜ人であることを恥じるようになったのか、聞いちゃ駄目かな？」

誉の感情に配慮し、恐る恐る尋ねかける燈。誉は少し眉をひそめたが、燈に悪意がなく、むしろ自分を案じての問い

掛けであったことを察したのか、燈の瞳をぼおっと見つめていた。そして、何かに背中を押し出されるかのように誉の口が動き始めた。

「誉のお父さんとお母さんはね、殺されたんだよ」

衝撃の告白に空気が張り詰めた。否応なく聴覚が研ぎ澄まされ、そこから誉の発する一言一言を聞き逃すことができなくなった。

「誉はよく知らないんだけど、お父さんは有名な学者さんだったらしいの。何でも、お父さんの研究が物凄かったらしくて、未来の地球を救うとか、よくそんな話を聞いていたのを覚えてる。今から考えると大変な人だったんだなって思うんだけどね、誉はお父さんの膝の上で遊んでいた記憶しかないんだなあ、これが。多分、お仕事中にそんなことしていたからだろうな。お母さんが困った顔して誉を抱え上げるんだけど、誉はいよいよやって駄々こねるの。でもお父さんは笑ってて、優しく誉の頭を撫でてくれたんだよ。普通のお父さんだった。

お母さんとはよく一緒に遊んだな。ままごとしたり絵本読んだり、お絵かきしたりダンスしたり。流石に目の前に碁盤を広げられた時は面食らったけどね。でも、エプロンつけて台所に立つと滅茶苦茶カッコよくて、ごはんもすっごく美味しいの！誉は大きくなったら、やっぱりお母さんみたいに楽しくて料理の上手な人になりたいなって思ったよ。

そんなごく普通の日常が終わったのは、誉が六歳の時。もうすぐ小学生になるって浮かれていた時に、突然、スーツを着たゴツイおじさんたちが家の中に乗り込んできたの。お父さんとお母さんは慌てて誉を筆筒に押し込めて、何があっても絶対に声を出しちゃいけないって言った。すぐにお父さんと男達との口論が始まった。確か、お父さんが開発した技術を渡すとか渡さないとか、そんなことで言い合ってたと思う。そしたら、急にスーツの男たちがお父さんを殴り始めた。お父さんは血だらけになって、暫くして動かなくなった。お母さんが泣きながらお父さんの身体を揺すっていたんだけど、一人が拳銃を取り出して……。

誉は、最後まで声を出さなかったんだよ。筆筒の中にあったお母さんの洋服が、誉の噛み跡や鼻水やらで全部ぐしょ濡れになって駄目になっちゃったけど、最後の約束だったから。お父さんとお母さんとの約束、最後まで、誉は守り通した」

「誉ちゃん……！」

だしぬけに、燈がぎゅっと誉を抱きしめた。

「……お姉ちゃん？」

誉は不思議そうに燈の顔を見上げる。だが、そんな誉の双眸から、大粒の涙がボロボロと零れ落ちた。それは後から後から溢れ出し、まるで収まる気配を見せない。

「あ、あれ？変だな。何でだろ。やだ。誉、今きつと変な顔してるよ。お願い、見ないで」

「いいのよ。それで、いいの」

燈が優しく語りかける。そして自分の胸に誉の顔を押しつけるように更に深く抱きしめた。

「お父さんとお母さんの為に涙を流すことは、決して恥ずかしいことじゃない。だから、いいのよ。いくらでも泣いていいの」

燈の言葉に、何かが吹っ切れたのだろう。堰を切ったように、誉は泣いた。子供のように声を上げて泣いた。もう二度と会うことのない両親の名を呼びながら。

「落ち着いた？」

「うん」

誉は頷き、自分から燈の胸を離れた。でも、俺と目が合うや、また燈の胸に顔を埋めてしまった。無理もない。いくら女の子でも、人前で涙を流すなんてみっともないと思うのが普通だ。まして、名誉を重んじる両親の願いをその名に受け継いだ誉では尚更のことだろう。

「ほらほら、誉ちゃん。お兄ちゃんから顔を背けちゃだめじゃない。恥ずかしがることなんてない。むしろこういう時は、お兄ちゃんの胸の中に飛び込むものよ。隙お兄ちゃんなら、傷心の誉ちゃんを優しく抱きとめてくれるはずだよ」

.....なっ、何を言い出すんだ燈！？うろたえる俺を尻目に、燈の瞳が妖しく光る。分かる、燈が何を考えているのか、手に取るように分かる。「こうして乙女の純潔は、一人の野獣の手によって儂くも散る。だが、花は散り際にこそ全力で命を燃え上がらせ、永遠の輝きを最期の一瞬に凝縮して果てるのだ。ああ、何と哀しくも耽美なる恍惚。だが、それは決して終わりではない。少女は即時に華麗なる脱皮の時を迎え、美しき蝶、女として生まれ変わる。そしてその暁には.....じゅるっ。ああ、いかんいかん、涎を流してしまっは折角のもののはれが台無しだわ。自重自重」って、顔に書いてあるし！ああっ！燈、貴様は間違っている、脳の思考回路からして間違っている。見た目は乙女、而して頭脳はオヤジ。観月燈、恐るべし！しかし、俺の無言の抵抗も空しく、間違った大人の導きに誉は道を踏み外しかけていた。

「ほんと？お兄ちゃん」

燈の腕から泣き腫らした大きな瞳を覗かせ、上目遣いで俺の様子を窺っている。小動物を髣髴とさせる、そんな可憐な仕草に、悲しくも俺の父性本能がキュンと疼いてしまった。

「まったく、見てられないぞ」

堪りかねて慈が横槍を入れてきた。

「黎明、前々から節操のない奴だとは思っていたが、こんな小さな子にまで鼻の下を伸ばすとは、どういう了見だ。なんだ、これも例の萌えてやつか？」

「萌え」、そのキーワードが、あと一歩の所で俺を現実世界に踏みとどまらせた。何を隠そう、俺はドクター・萌えだったのだ。拳を強く握りしめ、俺は力説する。

「これは萌えではない！大体君たちは萌えの何たるかを知らない。そもそも、三次元に萌えは無いのだ！いいか、萌えとは一言で言えば、『架空のキャラクターに触れた際に得られる自己肯定感』のこと。メイド萌え、姉萌え、妹萌え、ツンデレ。世に萌えは数あれど、これらに俺達はなぜ萌える！？それは不変の真心を向けられることで、『ああ、自分はここに居ていいんだ』という自己肯定感を得られるからだ。即ち、萌えとは絶対安心。翻って考えてみよ。三次元に純心無し、変わらぬ心も三次元には無い。よって、三次元で萌えは成立しないのだ」

「はいっ、先生。質問があります」

肩から先をびしっと延ばした理想的なフォームで、燈が手を挙げた。

「先生、以前私が耳にした萌えの定義は『魂の高揚』、どんな対象においても高揚感を伴う愛着があれば、それは萌えだと聞いたことがあります。これは間違いなのでしょうか？」

燈の問いに俺は大きく肯く。

「うむ、いい質問だ。確かに萌えとは高揚感であり、そう捉えるのが素直な解釈だろう。しかし、燈君。それでは『萌え』と『かわいい』の区別がつかない。そうは思わんかね？」

「はっ！そう言われてみれば」

「更に言えば、例えいくら感情が昂ぶりをみせても、相手が自分に対して無関心、それどころか、その純粋な想いが他人に向けられていたとしたらどうだ。君はそれでも、その感情を萌えと言い切れるかね。そのような状況では、『かわいい』は成立しても『萌え』は成立し得ない。そういった点で、『萌え』と『かわいい』は明らかに異なる概念だ。確かに、概念の説明は困難を極める。しかし、だからといって曖昧なままでよいのか。私はそんな疑問から出発して数年来、萌えを研究してきた。そして、辿り着いた結論が件のものだ。とはいえ、研究途上であるゆえ最終的な判断は各々に任せる。君たちは私の講義を踏み台とし、あくまでも君たちの信念のままに萌えを追究していくがよい」

「な、何という高邁な思想。不肖燈、先生の気概に感服致しました！」

「お前たち、何でそんな話題で盛り上げられるんだよ！？あ、こら結、こんなのメモを取る必要ないって、多分」

「何という整然として隙のない論理展開。やっぱり、黎明先輩はすごいです」

「どうだ、凄いだろう！何たってお兄ちゃんは誉のお兄ちゃんだからね」

「む！わ、私は認めませんよ。黙って聞いていれば、誉さんはさっきから先輩のことをお兄ちゃんお兄ちゃんと呼んでいるようですが、黎明先輩はあくまでも黎明先輩であって、誉さんのお兄さんではありません！むしろこれは、そう、黎明先輩が持つ兄萌え属性と言うべきものであって、それを独断で占有しようとする誉さんの行為は明らかに事実の誤認です！」

「ふーんだ。何と言おうとお兄ちゃんはお兄ちゃんなの！それに今のみこっちゃんの理論でいけば、誉がお兄ちゃんを独り占めしようとするまいが、誉がお兄ちゃんをお兄ちゃんと呼ぶのは何ら問題ないってことじゃない」

「し、しまった！属性とは記号、即ち万人に開かれたもの。そう言われてみれば、そういうことになるのかも。はっ！？ということとは、私も先輩のことを……お、おに、ブフーツ」

「ああもう、收拾がつかん！どうしてこう揃いも揃って哲学論義好きばかりなんだ！！」

　　どういうわけか、慈は自分の髪の毛を掻きむしり、命は鼻血を流して倒れていた。

「成程、確かに三次元に萌えはなさそうね。でもね、黎明君。何事にも例外ってあるでしょ？」

　　にたぁと燈が不気味な笑みを浮かべた。あ、嫌な予感がする。燈がこんな顔をするのは、決まってよからぬことを企んでいる時のんだ。警戒するも反応もできず動静を見守っていると、燈は徐に背後から何かを取り出した。

「あら、こんなところにネコミミが。あらあら、なぜかイヌミミまで落ちていたわ」

「そんなものが都合よく落ちているわけないだろう！お前、どこで用意してきた！？」

「細かいことは気にしないの。さてさて、こっちのネコミミは誉ちゃんに、こっちのイヌミミは命ちゃんにつけますと、まあ、可愛い。あつという間にわんにゃんコンビの出来上がり」

　　何ということだろう。先程までそこには誉と命が並んで座っていたはずだった。いや事実、それは今この時も全く変わっていない。それなのに、ああ、それなのに、目の前の何の変哲もない空間が、その様相を一変させてしまったのではないか。それぞれの頭から左右に向かってちょこんと生えた二つの三角形。たかがミミ、されどミミ。今すぐにでも抱きしめて、そっと甘噛みしたい衝動に駆りたてる禁断のデルタ・フォース。その魅惑に必死に抵抗していた。いや、実は抵抗しているようでいて、こうして理性と情動との間で葛藤しているままが、既に奴の思惑に嵌り込んでしまった証なのかもしれない。加えて、そんな憧憬とも崇敬ともつかない、ただ強烈としか言いようのない俺の視線に晒されて、恥ずかしそうにうっすらと頬を桜色に染めつつ、不調和に身をよじる二人の仕草が一層愛らしさを引き立てている。

「さあ、誉ちゃん、命ちゃん。黎明君に一発かましたれ！」

　　指揮官の号令に、二人はゆっくりと頷いた。二人してそろりそろりと俺の方へ身を乗り出す。肩も腕も手首も、上肢のあらゆる関節という関節を互い違いに折り曲げ、頬に手の甲を近づける招き猫のポーズ。そこから奏で出る甘い鳴き声。

「にゃんにゃーん♪」「わう～ん」

「ぶふおほあはあはあああ！」

　　激震に見舞われた。お、俺は動揺したのか！？まさか、あり得ない。三次元に萌えなどあるはずがない。そうだ、錯覚だ、これは錯覚なのだ。そう思い直し、俺は二人に向き直る。

「にゃんにゃーん♪」「わう～ん」

「KA、KAWAIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIII！！」

　　思わずローマ字で叫んでしまった。信じられん。俺の理論は完璧のはず。そうだ、これは何かの間違いだ。間違いであるに違いない！さっきの台詞も「MOE」ではなかったではないか。気を確かに持て、黎明隙！天に振りかざすはただ、己が信念のみ。負けてなるものか！

「にゃんにゃーん♪」「わう～ん……」

「jk差うtお会いおせあflsiejshへいおfrはlf f s z j k f lshlf藍lfオお」

　　桜島と阿蘇山の同時大噴火に伴い、巨大カルデラ陥没が発生。未曾有の大災害を前に、俺はよく分からない何かに対して敗北を認めざるを得なかった。ネコミミ、イヌミミ、オソルベシ。いや、げに恐るべきは秘められし誉と命の魅力であり、憎むべきはそれを看破できず、あまつさえ手製の理論に固執した己の不甲斐なさだった。

「誉ちゃん、命ちゃん、グッジョブだぜ！」

　　溢れ出る鼻血を懸命に押さえつつ、燈が親指をぐいと突き立てた。って、お前もかよ！

「失礼致します」

不意に扉が開いた。ドリンクのサービスにやってきた店のスタッフだったが、そんな彼の目の前に広がっていた光景は……。

物言わず、扉はそのままゆっくりと閉まっていった。スピーカーから流れ出る「Fly me to the moon」が、部屋の中で空しく響いていた。



試読版は以上です。

続きは正規版 (<http://p.booklog.jp/book/21798>) にてお楽しみくださいませ。

黎明物語 上（試読版）

<http://p.booklog.jp/book/23458>

著者：ふんだりけ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fundarike/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23458>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23458>